

はか た
博 多 67

— 博多遺跡群第104次調査概報 —

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第594集



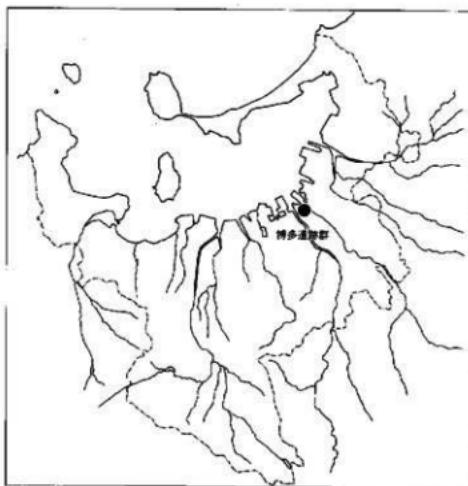
1999

福岡市教育委員会

博 多 67

— 博多遺跡群第104次発掘調査概要 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第594集



1999

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、記録の保存に務めているところです。

福岡市博多区の北側、JR九州博多駅から博多港にかけての都心部の地下に眠る博多遺跡群は、昭和57年以来現在まで開発に伴う数多くの発掘調査が行われており、古代から現代まで都市「博多」が東アジアの交流に大きな役割を担い続けたことを明らかにしました。本書は、その第104次調査の成果を報告するものです。

第104次調査地点は、榮西禪師によって建てられた聖福寺に近接しており、周辺の調査成果からも聖福寺の寺内町の範囲に含まれることが知られており、発掘調査では16世紀代の廊・蔵の基礎などが発見され、当時の姿を復元するのに貴重な成果を得ることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対し、心からの謝意を表します。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 町田 英俊

.....例　　言.....

1. 本書は、博多区上呉服町124地内における共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が平成9年度（1997年度）に実施した博多遺跡群第104次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集には大庭康時と協議のうえ本田浩一郎があたった。
3. 本書に使用した遺構実測図は大庭・本田・大浜栄緒が作成した。また、製図には本田・今村佳子があたった。
4. 本書の遺構実測図中に用いていてる方位は、すべて磁北である。
5. 本書に使用した遺物実測図は大庭・本田・森本朝子・井上涼子・上城賀代子が作成し、本田・森本・井上・上城が製図した。なお遺物実測図の縮尺は土器類を $1/3$ 、 $1/4$ に統一し、金属器・銅鏡・その他の遺物を $1/1$ 、 $1/2$ で統一した。
6. 検出した遺構については、調査時に検山順に通し番号を付した。
7. 遺物番号は通し番号とした。なお擇図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
8. 本調査で出土した銅鏡は、大庭智子が精査とし、判読し、拓本を作成した。
9. 本書で使用した写真は大庭・本田が撮影した。
10. 本調査に関する記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

遺跡調査番号：9766	遺跡略号：HKT-104	分布地図番号：千代・博多48
調査地名番：博多区上呉服町124		
開発面積：461m ²	調査面積：188m ²	
調査期間：1998年1月8日～3月16日		

本文目次

第一章 はじめに	1		
1. 調査に至る経緯	1		
2. 調査体制	1		
3. 遺跡の立地と歴史的環境	2		
第二章 発掘調査の記録	4		
1. 発掘調査の概要	4		
2. 基本層序	5		
3. 遺構と遺物	6		
(1) 第1面	6		
2号遺構	7	27号遺構	8
(2) 第2面	9		
109号遺構	10		
(3) 第3面	11		
115号遺構	12	119号遺構	13
120号遺構	16		
(4) 第4面	24		
139号遺構	25	140号遺構	26
148号遺構	26	150号遺構	31
151号遺構・152号遺構	32		
(5) 第5面	34		
163号遺構	35	164号遺構	36
178号遺構	36	184号遺構	38
186号遺構	40	188号遺構	40
198号遺構	43	200号遺構	43
207号遺構	43	217号遺構	44
219号遺構	46	236号遺構	47
237号遺構	51	242号遺構	52
250号遺構	53	255号遺構	54
259号遺構	55	263号遺構	55
264号遺構	57	265号遺構	58
(6) その他の出土遺物	59		
(7) 銅鏡	69		
第三章 まとめ	72		

第一章 はじめに

1. 調査にいたる経緯

平成9年12月26日、福岡市教育委員会生涯学習課・保険福祉局高齢者施設課・建築局住宅計画課の三課より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区上呉服町124番の複合施設建設予定地内に関する埋蔵文化財事前調査願が提出された。申請地は周知の遺跡である博多遺跡群の範囲内に含まれており、周辺の調査からも遺跡の存在は容易に推定できた。既存構築物の解体・撤去を待って試掘調査を行う予定であったが、申請地が細い路地に面する住宅密集地内に位置していること等の理由から試掘調査は断念せざるを得なかった。しかし、隣接する84次調査地点などの近隣の調査成果から申請地内に遺構が濃密に残存していることは確実なものと考えられた。これらをもとに遺跡の取り扱いについて関係者と協議を行い、建築工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行い、記録保存を図ることになった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、既存構築物の解体・撤去後、表土掘削等の条件整備が整った平成10年1月8日に本調査に着手し、同年3月16日に終了した。

2. 調査体制

調査委託 福岡市教育委員会生涯学習部生涯学習課
 福岡市保険福祉局高齢者部高齢者施設課
 福岡市建築局住宅部住宅計画課

調査主体	福岡市教育委員会 教育長	町田 英俊
調査統括	同 埋蔵文化財課 課長	荒巻 輝勝
		柳田 純孝（現任）
	同 埋蔵文化財課 第2係長	山口 漢治
調査庶務	同 埋蔵文化財課 第1係	河野 淳美
	文化財整備課	谷口 真由美（現任）
調査担当	同 埋蔵文化財課 第2係	大庭 康時 本田 浩二郎
調査作業	有田恵子 石川君子 泉本タミ子 井口正愛 江越初代 大久保五枝	
	大久保学 大庭智子 大浜菜緒 清水明 杉山正孝 関加代子	
	曾根崎昭子 田中トミ子 水懸和代 長田嘉造 西山径子 能丸勢津子	
	播磨千恵子 早川 浩 福島真由美 平井武夫 北条こず江 宮崎タマ子	
	村崎祐子 吉田 清	

資料整理中、銅鏡について下関市立大学の櫻木晋一先生に、建築物については千葉大学の玉井哲雄先生に御教示頂いた。記して感謝申し上げたい。

3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに現代まで続く複合遺跡である。地理的には、玄界灘に向する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東には江戸時代に開墾された石堂川（御笠川）、南は石堂川開墾以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御笠川）によって囲まれる。

この御笠川と那珂川に挟まれた地域は、弥生時代以後の主要な遺跡が集まる地域でもある。上流側から著名な遺跡名を挙げると、奴国の中心地である須崎岡本遺跡を中心とした一帯の遺跡群、朝鮮系無文土器が大量に出土した諸岡遺跡、日本最古の水田・環濠集落として知られている板付遺跡、弥生時代の青銅器鋳造地のひとつである那珂遺跡、弥生時代後期の環溝群で知られる比恵遺跡など、ほぼ直線上にならんでいる。博多遺跡群で調査されている弥生時代中期・後期の集落・墓塚墓群は、これら遺跡群の延長上で理解されよう。さらに、この延長でそのまま博多湾を渡ると、志賀島の「漢委奴國上」の金印出土遺跡にあたる。弥生時代中期に、周辺に可耕地を持たない砂丘上に忽然と出現する博多遺跡群は、奴国の海上活動の拠点集落のひとつとして位置付けらよう。律令時代にはいると、御笠川の最上流地域に太宰府がおかれて、九州の政治・軍事的中心地となる。また、博多湾岸には、博多遺跡群と入り海ひとつを隔てた西の丘陵上に、対外交渉の拠点として鴻臚館がおかれた。博多遺跡群に官衛がおかれたという記録はないが、石帶・銅製幣金具・墨書須恵器・須恵器鏡・皇朝鏡・鴻臚館式瓦・老司式瓦などがこれまでに出土しており、律令官人・それに伴う施設の存在が推定できる。平安時代後半になり律令体制が弛緩すると、対外貿易の管理も中央政府の直接的な掌握から、太宰府を通じての管理に変質し、太宰府官人による蕃財のための私貿易の拡大をもたらす。このような時勢の流れの中で、11世紀に入り博多において宋商人の居留が本格的に始まる。博多遺跡群が本格的に繁栄・展開するのは11世紀後半に入つてからであるが、該期の膨大な量の輸入陶磁器がこれまでに出土している。さらに、12世紀末から13世紀前半にかけて、聖福寺・承天寺が博多在住の宋商人綱首の援助のもとに、相次いで建立され、周辺の都市化が急速に進行し、笠崎宮周辺に展開する箱崎遺跡群と共に中世都市群として発展してことが現在わかっている。

鎌倉時代には、2度にわたる元寇で博多付近一帯は戦場となり一旦は荒廃するが、13世紀末には、鎮西探題が博多に設置され、博多は貿易の中心地だけでなく、九州の政治的中心地という役割をもつようになる。調査成果から13世紀末から14世紀初めにかけて、道路遺構が各調査地点で確認されており、それらは戦国期まで存続していることがわかっている。これらの道路は必ずしも統一された規則性を持つわけではないが、中世後半を通じての博多の都市景観はここに確立されたと言えよう。

室町時代後半の博多は堺とならんで自治都市として有名であったが、度重なる兵火によって焼亡している。1586年には中国の毛利氏の軍と対峙した薩摩の島津氏によって焼かれ灰燼と帰する。しかしながら豊臣秀吉によって復興される。これが太閤町割であり、この時点で鎌倉時代以降続いていた博多の道路・街区は廃止され、博多全体は長方形街区と短冊型地割りで仕切られた。こうして、中世都市博多は近世都市として再生された。しかし、江戸時代に入り鎖国政策がとられ、貿易都市としての博多は幕をおろし、商人町博多として明治維新を迎えたのである。

昭和57年から始まった博多遺跡群の調査は平成11年現在113次調査に至る。中世都市「博多」の様相が遺跡の破壊と同時に着実に明らかにされつつある。

本調査地点は、中世都市「博多」の東辺に位置した聖福寺の、かつての寺中町の一角に当たると推測される地点である。

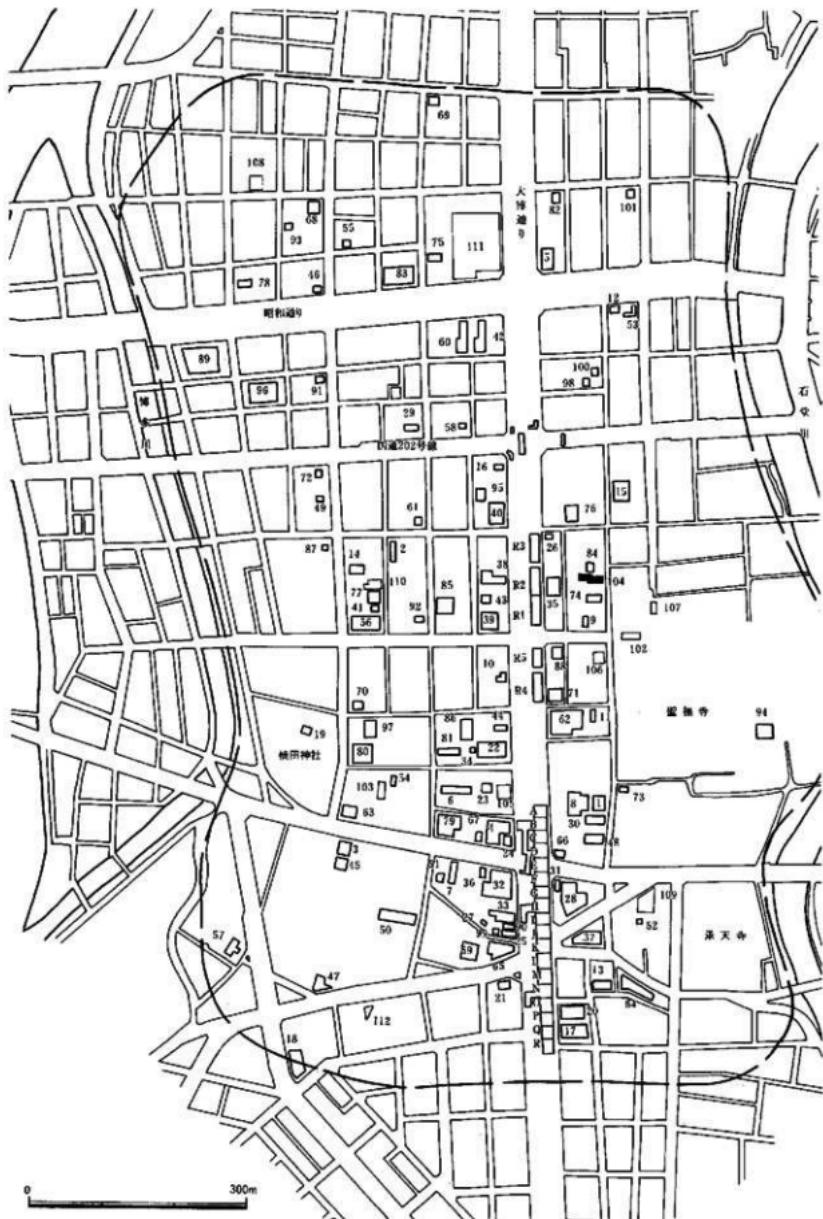
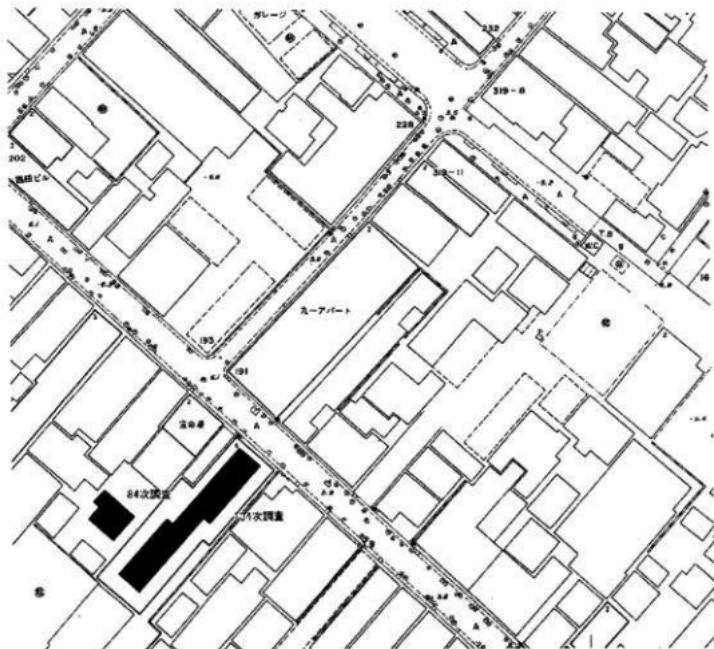


Fig. 1 博多通跡群内調査区位置図 (S=1/7000)

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要

博多遺跡群の立地する砂丘地形は大きく博多浜と息浜の二つに分けられるが、本調査地点は博多浜の北東端部近くに位置している。また、調査地点付近はこれまでの調査により聖福寺の寺中町内に含まれることが推定されており、これらに間接する遺構・遺物の検出が想定できた。発掘調査は予定建築物の基礎部分に破壊される31m×3mについてのみ行うこととなり、狭長なトレンチ状の調査区となった。住宅密集地内であり隣地とも近接していることから排土を調査区内で処理することが不可能であったため、場外に搬出することで条件整備を整え調査に着手した。本調査地点では諸事情のため試掘調査が行われていなかったことから、隣接する84次調査の成果をもとに包含層上の現代の整地層・搅乱層を重機で除去したのちに調査を開始した。既存建築物の基礎は浅く、遺構部分は大規模な搅乱を受けずに良好な状態で遺存していた。調査は期間の都合から基盤層となる砂層までの間に5面の遺構面を設定し行った。調査区北側については良好な整地層が幾重にも重なった状態が確認できたが、南側については井戸等の遺構が複数切り込んでおり、整地層は確認できず掘り下げは北側遺構面の高さに合わせて行った。



2. 基本層序

本調査地点では、前述のように大規模な擾乱は受けておらず、良好な状態で各遺構面は保存されていた。調査区の現地表面は標高6.75mを測り、厚さ1m程の現代の整地層を重機で掘削したのち調査に着手した。第1面上には近世のものと考えられる包含層が堆積しており、この包含層から後述する菊皿10枚と花生がまとまって出土した。掘方は確認できなかったが、菊皿は逆に入れ子状態で出土しており、木箱等の有機物容器に納められていたものと考えられる。それ以下標高5.50m付近までは繕まりのない暗褐色土の包含層が堆積しており、遺構は検出されなかった。標高5.50m以下で良好な整地層が検出され、第1面と設定し調査を開始した。以下、順次トレンチ断面において堆積状況を確認しつつ遺構面の設定を行った。調査区北側では第1面から第4面まで数センチ単位の細かい整地層が水平に幾重にも堆積しており、明確に数枚の生活面を確認できたが、調査区南側では整地層は検出されなかった。これは井戸などの深い遺構が複数切り込んでいたため、遺構の掘方も検出できなかったことから、掘り下げは北側の高さに合わせて行った。標高5.50mから4.10m付近までは中世の堆積層に相当するものと考えられる。標高4.10mから3.30mまでの間には、上層で見られたような細かい整地層は検出されず、暗褐色の砂質土または砂が堆積していた。検出した遺構・遺物から古代の堆積層と考えられる。3.30m以下は博多遺跡群の基盤層とされる自然堆積の砂丘砂層であり、これ以下では遺構の検出はなかった。



Ph. 1 調査区北端部堆積状況（南から）



Ph. 2 第4面下堆積状況（北から）



Ph. 3 第4面下堆積状況（北西から）



Ph. 4 第4面下堆積状況（北西から）

3. 造構と遺物

次に、各造構検出面と主要な造構の概要について述べる。なお、各造構面の年代観については、各造構面の鍵層が把握できた調査区北側を基本として考えた。調査区南側については、造構の埋土の一部であることは判断できたが、狭長な調査区であったため、調査区内において造構の切り合いの確認と造構全体の発掘が困難であることから検出は断念し、下層において造構主体部の検出を目指した。

(1) 第1面

調査区北側において、標高5.50mから5.35m付近で黄褐色粘質土の整地面が検出され、これを鍵層として第1面を設定した。北側と中央部の一部が搅乱を受けていたが、造構面は比較的良好に遺存していた。

第1面では土坑・柱穴・石組造構・近世の井戸などを検出した。調査区北側では、黄褐色粘質土の整地層に造構が掘り



Ph. 5 第1面全景北側（南から）



Ph. 6 第1面全景南側（北から）

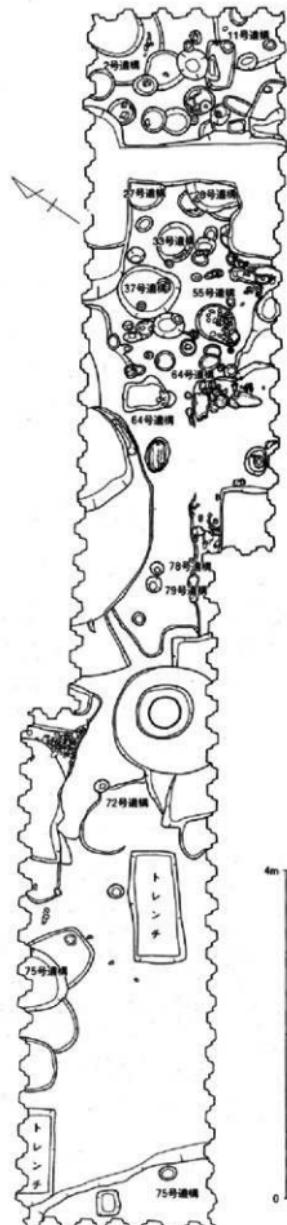
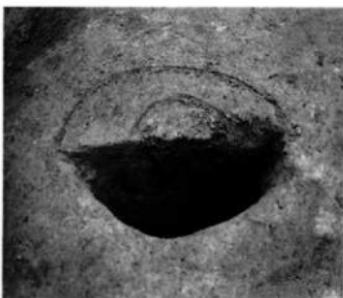


Fig. 3 第1面造構全体図 (S=1/120)



Ph. 7 第1面検出石組遺構（北から）



Ph. 8 76号遺構断面（北から）

込まれていたが、全容を知るものは少ない。007・011・022・033・048・057・069・082号遺構は遺物から近世に属する遺構と考えられる。002・027号遺構は出土遺物から15世紀から16世紀代の時代が当たることができる。調査区が約3mと狭く、建物としてまとめられる土坑・柱穴はなかった。整地は暗褐色土、黒色土、黄褐色土等の整地土が交互に敷き詰められた状態で、各整地層の単位は薄い層で数cmで厚い層でも10cm程度であった。整地層の間には薄く焼土が数層にわたって挟まれており、遺構面の年代観からも比較的短期間の内に何層もの整地を行ったことが窺える。第1面の年代観としては、上部包含層と各遺構から16世紀代を当てることができよう。

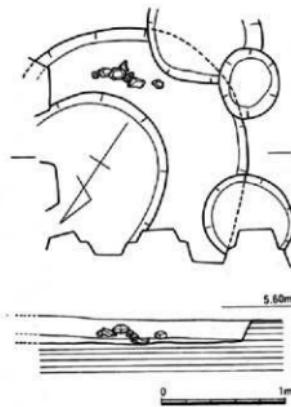


Fig. 4 2号遺構実測図 (S=1/40)

台内を露胎とする。4は李朝雜釉陶器の皿である。これらの遺物から16世紀代頃の年代が考えられる。

002号遺構

調査区北端で検出した土坑である。遺構の一部が調査区にかかるのみで他の遺構にも切られているため、全体を知ることはできない。検出面からの深さは10cm程度の浅い土坑で、底部付近に礫が検出された。

Fig. 5に出土遺物を示した。1は土師器の壺である。底部は回転糸切りで調整される。復元径は13.6cmを測る。2は白磁の切高台皿である。

全体的に被熱している。

3は青磁の碗の底部片である。龍泉窯系のもので、高

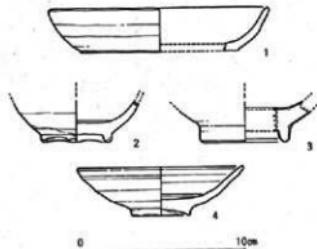


Fig. 5 2号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

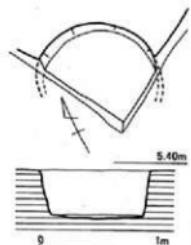


Fig. 6 27号遺構実測図 (S=1/40)

027号遺構

調査区北側で検出した土坑である。大半を搅乱に切られ全体はわからないが径1mの円形の土坑に復元される。検出面からの深さは40cmを測る。

Fig. 7に出土遺物を示す。

1、2は土師器の小皿である。1は全体的に器形が歪んでおり、底部は糸切り調整されている。口縁部付近に煤が付着しており、灯明皿として使用されていたものと考えられる。口径5.8cm、底径3.4cmを測る。2は搬入品で胎土は緻密で色調は淡褐色を呈する。復元径は4.8cmを測る。特徴から京都系土師器と考えられる。3は染付の碁笥底皿である。明代のもので見込みに双魚文を施す。外底部から疊付までを露胎とする。4は青白磁の梅瓶である。外器面は被熱し、釉は融け落ちており、唐草文様は判別できない。5は土師質土器の火鉢である。内面には横位のハケメ調整を全面に、外面は丁寧な範磨きを施している。雷文はヘラ状工具の尖端部で施されている。

この他に、陶器、鉄釘、鉄滓などが出土している。14世紀代の京都系土師器が混入しているが、遺構全体の年代としては16世紀代と考えるのが妥当と思われる。



Ph. 9 27号遺構出土遺物

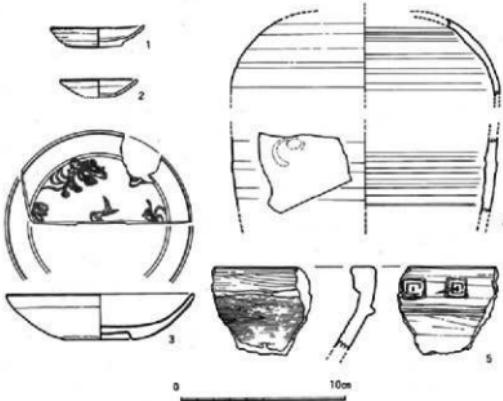


Fig. 7 27号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

第1面では主に16世紀から17世紀代の遺構を検出した。遺構面の時代観としては隣接する84次調査地点の第1面から第2面に相当するものと考えられる。84次で検出された道路遺構に関連する遺構の存在が予想されたが、検出はなかった。調査区中央部には白色粘土の整地面があったが、遺構・遺物の検出はなかった。

(2) 第2面

第1面の調査終了後、トレンチを設定し調査区北側において標高5.35m付近に、比較的厚く堆積する焼土混じりの整地面を確認し、これを鍵層として第2面を設定した。暗黄褐色粘土の整地面である。北側では、土坑・柱穴・石組遺構などを検出した。第1面と同じく北側と中央部の一部が搅乱されていたが、遺構面の状態は良好であった。調査区中央部から南側にかけては、鍵層となる整地面が部分的にしか検出されなかった為北側の高さに合わせて全体の掘り下げを行った。084・087・109号遺構などは出土遺物から14世紀代前半頃に、107号遺構は14世紀中頃から後半と考えられる遺構である。

また、柱穴の根締め石と思われる集石を持つ086・100号遺構や、1.6m×1.7mの石敷遺構などが検出されたが、建物の規模などは不明である。この面も第1面と同様に細かい整地が丁寧になされており、連縄と居住地区として利用されていたことがうかがえる。第2面の年代観として遺構・遺物から14世紀代前半から中頃を考えて大過ないであろう。



Ph.10 第2面全景北側（南から）



Ph.11 第2面全景南側（北から）

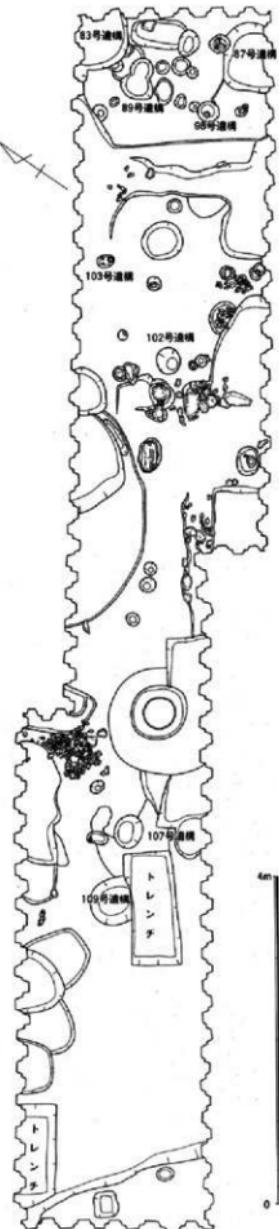
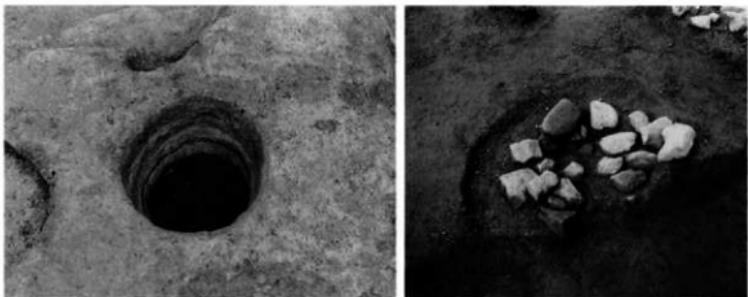


Fig. 8 第2面遺構全体図 (S=1/120)



上 : Ph. 12 88号遺構 (南東から)

右上 : Ph. 13 100号遺構 (南から)

右下 : Ph. 14 第2面北側下堆積状況
(南から)**109号遺構**

調査区南側で検出した土坑である。西側を搅乱で切られているが、円形を呈し、径は1.15mを測り、遺構検出面からは深さ50cmを測る。

Fig.10に出土遺物を示した。1は青白磁の碗である。被熱しており詳細は知れないが、内面に印花文を施す。この他には、青磁・白磁・石鍋・瓦質土器の摺鉢・傭前焼・常滑焼・東播系須恵器などが出土している。これらの遺物から14世紀前半頃の年代を考えている。

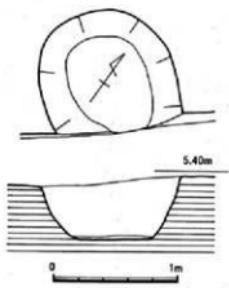


Fig. 9 109号遺構実測図 (S=1/40)



Fig. 10 109号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

第2面は主に14世紀前半から中頃の遺構を検出した。84次調査地点での第4面に相当する遺構面と考えられる。特に第4面検出の整地面は14世紀前半に位置付けられており、ほぼ時代差のない整地面と考えられる。

(3) 第3面

標高4.90m付近で設定した遺構検出面である。第2面調査終了後、トレンチ断面において下層の堆積状況を観察したところ数センチ単位の整地面が引き続き1m程堆積していることが確認された。第3面はこの連続した整地面のなかで比較的厚く堆積し、硬化している面に設定し調査を行った。鍵層とした整地面は白色粘質土（一部黄褐色）で上面には炭化物と焼土を多く含む暗褐色土が堆積していた。この整地面は調査区中央部まではその範囲を確認できたが、調査区南側においては上面と同じく部分的にしか検出されなかった。よって遺構検出は断念し、北側の高さに合わせて掘り下げを行い、調査区南端に設定していたトレンチをさらに掘り下げて南側の堆積状況を観察した。標高4m付近まで掘り下げた結果、同一のしまりのない暗褐色土が堆積し遺構面として設定できる層位は見られなかった。よって調査は中央部から北側にかけて重点をおいて行った。第1面・第2面と同じく搅乱されている部分はあったが、遺構面としては良好な状態で保存されていた。



Ph.15 第3面全景北側（南から）



Ph.16 120号遺構検出状況（北から）

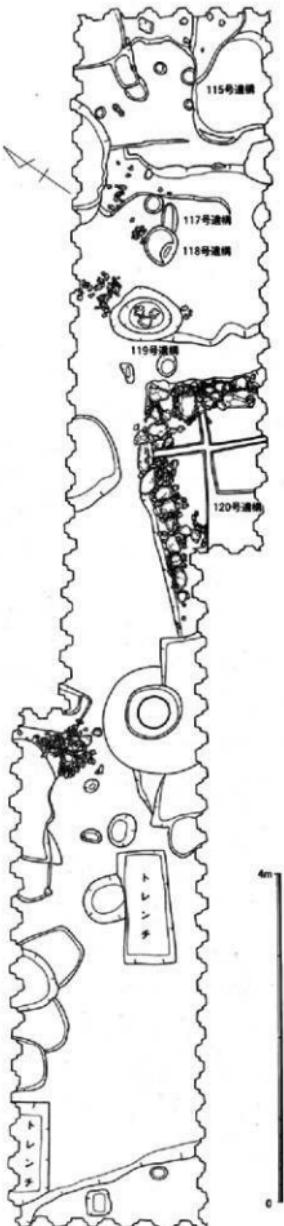


Fig.11 第3面遺構全体図 (S=1/120)

第3面の検出遺構は土坑・基礎状集石列と考えられる石組遺構などがある。113・115・119・120号遺構は出土遺物から14世紀前半頃に位置付けられよう。第3面は第2面と比較して、ほとんど時期差がないにもかかわらず、両遺構面の高低差が50cmもあること、遺構の密集度が減少していること、第2面から第3面までの間に数枚の焼土面を含む整地面が堆積していること、これらのことから本調査地点が火災等の原因で短い間隔のうちに繰り返し整地され、次第に市街地化・密集化されていったことが想定される。第3面は隣接する84次地点の第4面に対応しており、その成果からも14世紀代前半頃に比定されよう。84次調査の第4面では規模の大きい建築物の存在が想定されてるが、これが藏と考えられる120号遺構とどのように関連するのかは分からぬ。

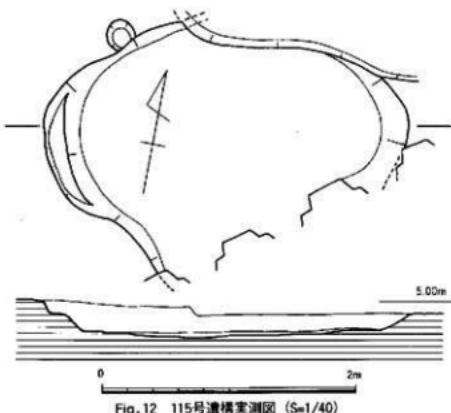


Fig. 12 115号遺構実測図 (S=1/40)

115号遺構

調査区北東端で検出した土坑で、遺構検出面からの深さは24cmである。他の遺構に切られ、調査区外にのびることもあり、平面形全体は不明であるが長径約3mの楕円形に復元できる。西側に張出状の段を有する。埋土は暗褐色を呈するベトベトの上で、底付近には炭化物が散乱していた。

Fig.13に出土遺物を示す。1は土師器の皿である。底部は糸切りで搬入品と考えられる。2は青白磁の碗の底部片である。被熱しており詳細は分からぬ。3は青磁の香炉副部片である。

外器面に乳頭文を施しているが、小片で全体の器形は分からなかった。この他には青白磁梅瓶、瓦質土器、青磁碗・盤、須恵質土器などが出土している。これらの遺物から14世紀前半頃の年代が考えられる。

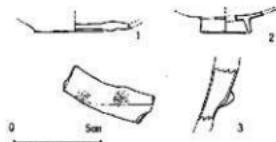


Fig. 13 115号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

119号遺構

調査区中央部北側で検出した楕円形の土坑である。長径で1.8m短径で1.4mを測る。検出面から底までの深さは40cmを測り、炭化物を含む黒色粘質土で埋まっていた。

Fig.15・Fig.16・Fig.17に出土遺物を示した。

1～4は土師器の皿である。底部はすべて糸切り調整されており、口径はそれぞれ7.6cm、8.0cm、8.6cm、9.2cmを測り1と2は被熱して廢棄されている。5、6は土師器の杯である。底部はどちらも糸切り調整が施されている。口径はそれ

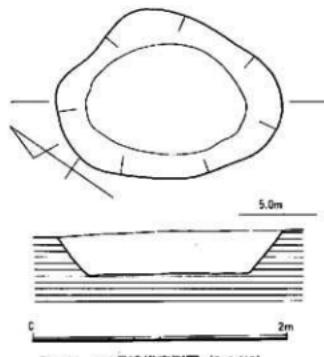


Fig. 14 119号遺構実測図 (S=1/40)

ぞれ13.0cm、13.8cmを測る。7は白磁の皿である。口縁部の釉を拭き取って口ハゲとする。口径9.2cm、底径6.0cmを測る。8は青磁の小鉢である。いわゆる龍泉窯系青磁で、豊付を露胎としている。見込み内にスタンプによる双魚文を施す。9～13は瓦質土器である。9、11は捏鉢で復元径はそれぞれ16.8cm、18.6cmを測る。9は内面に右斜め上方向へのハケメ調整を施し、11は横位のヘラナデ調整を密に施している。10、12、13は摺鉢である。いずれも摺り目はあまり摩滅しておらず、使用痕跡はあまり認められない。10は内器面にハケメを重複させ摺り目とする。12は横位のハケメを施したあとに三本の条線を縱位に施している。

Fig.16-14～18は古瀬戸である。14、15は鉢皿である。ともに灰緑色の透明釉がうすくかかる。小片であり、使用痕は見られない。16は瓶子である。遺存状態は良くないが灰緑色の透明釉がかかる。17は四耳壺である。釉調は灰緑色で内面に工具突端部で条線が施されている。18は壺の底部片である。不透明な鉄釉で釉だけは黒色を呈し、その間は茶色を呈する。19は備前焼の壺である。釉調は口縁から肩部までが暗茶褐色を呈し、それ以下では濁った乳白色を呈する。

Fig.17-20～23は中国産の陶器である。20は黄釉の盤である。口縁部は玉縁状となり釉は口縁部下まで施し以下は



Ph. 17 119号遺構出土遺物（縮尺不同）

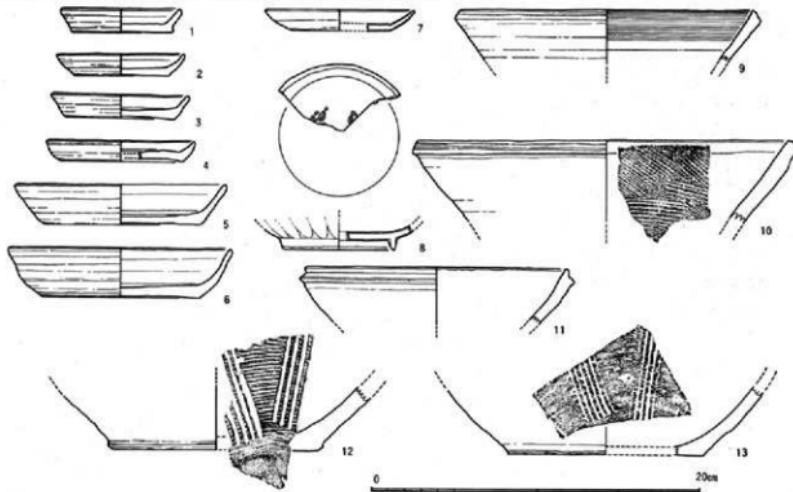


Fig. 15 119号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

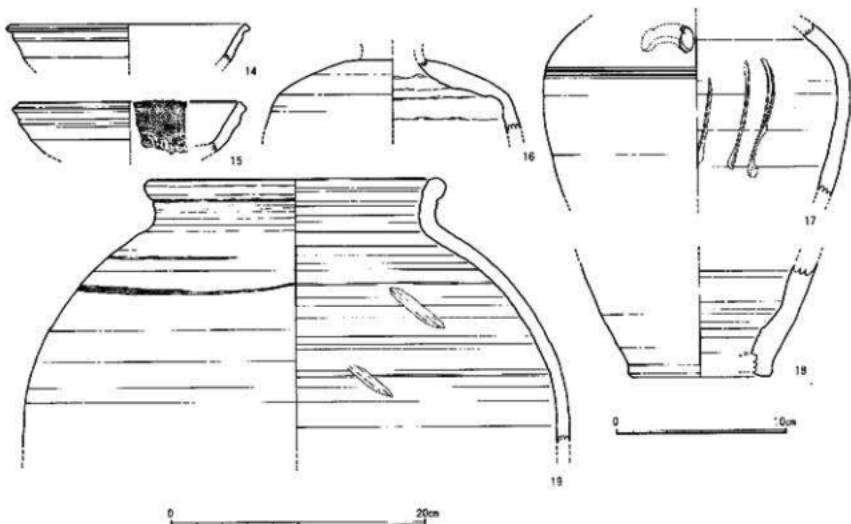


Fig. 16 119号遺構出土遺物実測図 (S=1/3, 1/4)

露胎とする。21は茶軸の壺である。22は壺の口縁部片である。口縁部は断面形がT字形を呈する。軸調は暗茶褐色で胎土はやや粗雑である。23は壺の底部片である。復元底径は22.4cmを測り、底部はヘラ切り調整とし露胎となる。軸調は暗灰緑色を呈し、露胎となる底部は暗橙色の色調となる。この他には、土師質上器の上鉢、鐵釘、瓦片などが出土した。これらの遺物からこの遺構の年代は14世紀前半代と考えられる。

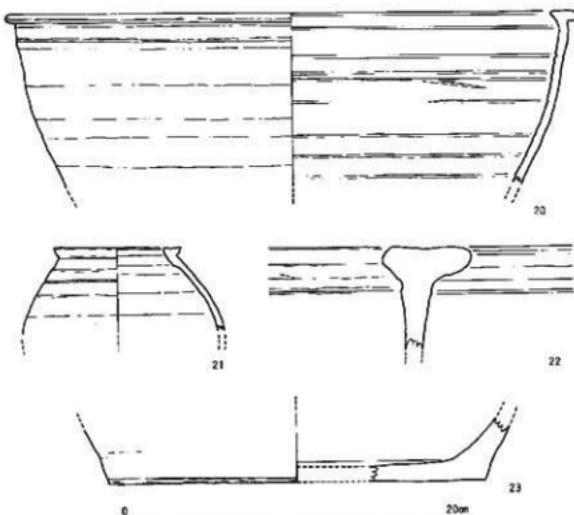


Fig. 17 119号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

120号遺構

調査区中央部で検出した石組遺構である。石材の一部は第1面から確認されていたが、第3面において全体を検出した。現状では $6.0\text{m} \times 2.5\text{m}$ の長方形の二辺のみが検出され、残りは調査区外へと展開するため全体の正確な規模は分からず。長辺の方向軸は 47° 程東偏している。石組は上下に分かれており、中間では石組の隙間に土が入るのではなく土の中に石が入っているような状況であった。使用されている砾も上下では大きさが異なり、上段では人頭大の石を使用し下段では拳大のものを並べている。掘り下げ時には建替えに伴う積み直しの可能性も考えられたが、石組の周囲には掘り込みはなく、土層の観察では整地と同時に石を組みあげるように構築しており、周辺の堆積状況から同一遺構の築造時の工程差として捉えた。石組長辺側の上段では最上段に扁平な石を等間隔に配置して石列としており、標高 5.10m 付近に並ぶことから、これらに柱をのせたと考えられる。短辺側にもほぼ



Ph. 18 120号遺構検出状況（北から）



Ph. 19 120号遺構短辺側状況（南東から）



Ph. 20 120号遺構長辺側状況（北から）

同じ高さの石列が並び同様に柱がのるものと考えられる。短辺側には内側に一段高い石列が配されており、上部構造を推定すると柱よりも内側に位置することからその用途は不明である。屋根材・壁材を含めた上部構造の詳細は分からぬ。これまで博多遺跡群の調査で検出された基礎状集石列遺構では、集石列内側で柱穴などの痕跡が検出された例があり、上部構造を含めた全体構造の復元が想定され

れ、このような遺構は土蔵などの壁の地固めと推定されている。本例もこれに類する蔵の基礎遺構と考えたわけだが遺構の内側では柱穴等の検出はなく、石組に取り付くよう堆積する数枚の整地面が観察されただけである。石組内側はしまりのない白色粘質土上に赤褐色の焼土層と炭層が交互に堆積し、その間隔は外側より薄く短い。これらは廃絶後に堆積したものと考えられる。土間などに相当する硬化面は検出されなかった。石列長辺北側では突出する数個の石材が置かれていた。石列で使用されている石材よりも大きく、上側が石列と同じ高さの平坦面となるように整地面上に組まれ、蔵の入口であったと考えられる。石材の裏には完形の天日茶碗が埋設されていた。何らかの祭祀であろうか。内外の堆積状況、石組構造を考え合わせると、本遺構が蔵として使用されていた時点では、内側が地表面より低い半地下の構造であったことが推定される。

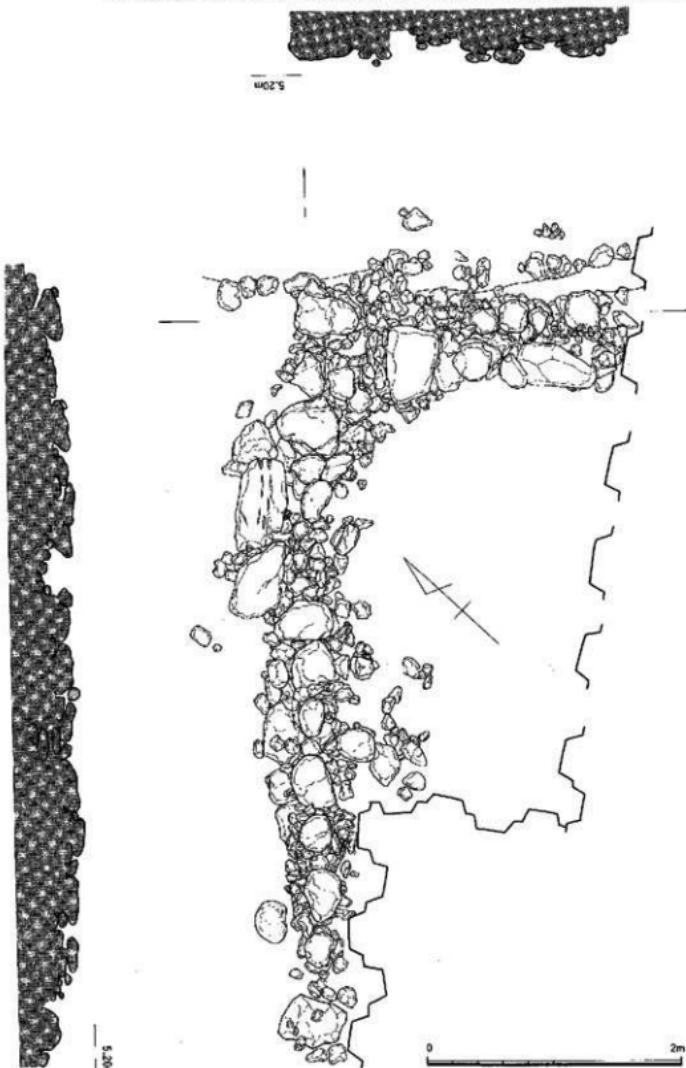


Fig. 18 120号遺構実測図 (S=1/40)



Ph. 21 120号造構検出状況（東から）



Ph. 23 120号造構短辺側面（北東から）



Ph. 22 120号造構内側堆積状況（南から）



Ph. 24 120号造構長辺側検出状況（南西から）



Ph. 25 120号造構掘り下げ状況（西から）



Ph. 27 120号造構掘り下げ状況（北から）



Ph. 26 120号造構掘り下げ状況（南東から）



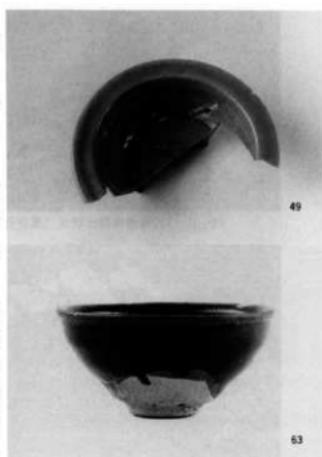
Ph. 28 120号造構掘り下げ状況（北から）

Fig.19・Fig.20・Fig.21・Fig.22に出土遺物を示した。

Fig.19-1~41は土師器である。40、41以外すべて底部は糸切り調整を行い、内底部には撫で調整を加えている。1~31は皿である。法量は口径7.0cm~9.4cmを測り、器高は1.0cm~1.7cmを測る。法量的にばらつきは少ないが、さまざまな断面形は数種にタイプ分けすることができる。4、7、8、10、11、14、31には板目圧痕の痕跡がみられる。32~41は壺である。口径は10.6cm~12.2cmを測り、器高は2.2cm~3.0cmを測る。40、41は京都系土師器である。手づくねで成形され外底部付近に指頭圧痕がみられる。

Fig.20-42~49は青磁である。いわゆる龍泉窯系青磁で42~46は碗である。外面体部には鎬蓮弁文を施す。43は疊付から高台内の軸を削り露胎としている。44、45、46は高台疊付のみ露胎とする。47は鉢である。内面体部に片切彫りによる菊弁文を施す。48は大皿であろうか。疊付のみ軸を拭き取り露胎としている。49は小鉢である。外面体部には鎬蓮弁文を施し、見込みには双魚文を施す。疊付のみ露胎とする。

50~58は白磁である。50~53は皿である。口縁部の軸を



Ph. 29 120号造構出土遺物（縮尺不同）

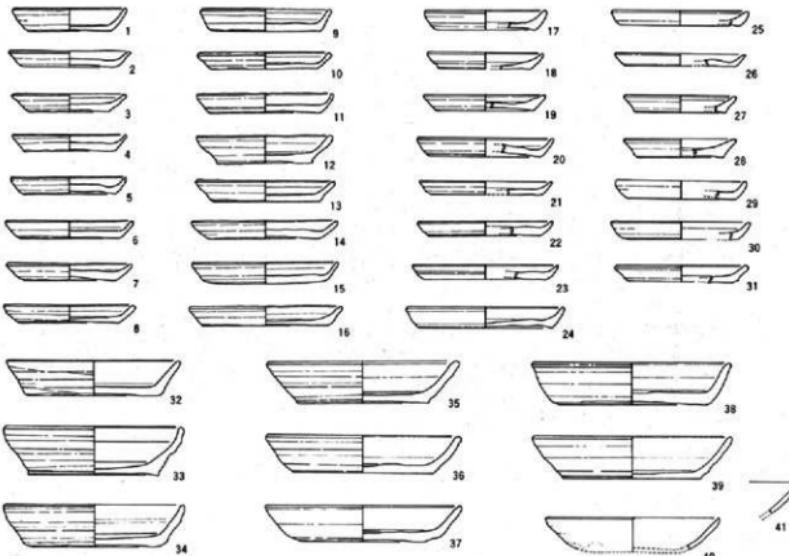


Fig.19 120号造構出土遺物実測図 (S=1/3)



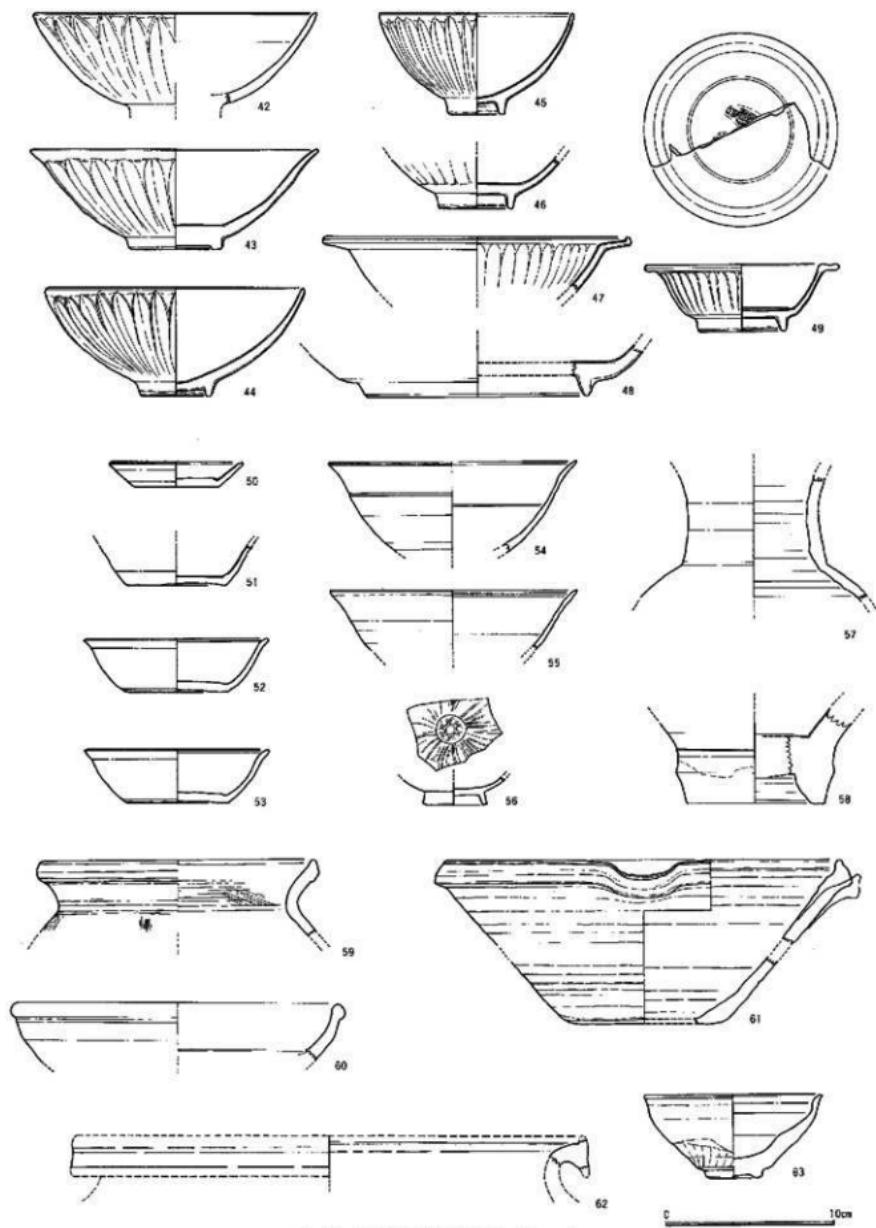


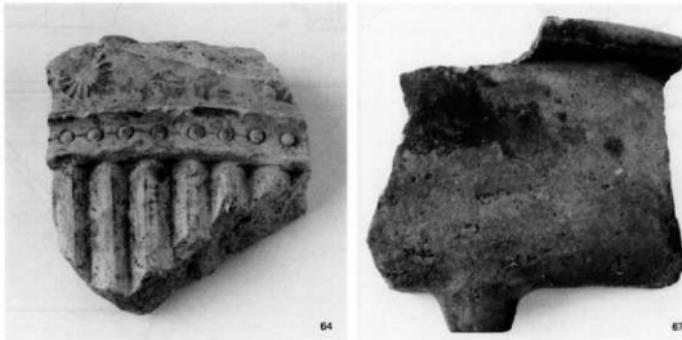
Fig. 20 120号邊構出土遺物實測圖 (S=1/3)

拭き取って口ハゲとし、底部はヘラ切り調整とする。54、55は碗である。これも皿と同じく口縁部の釉を拭き取って口ハゲとする。56は小碗片である。内面に印花文を施す。57、58は壺である。

Fig.19-59は瓦質土器の壺である。外面体部には継位、口縁部内面には横位のハケメ調整が施されている。60は古瀬戸の皿である。全面に灰釉がかかる。61は東播系須恵器の片口鉢である。口縁部には自然釉のタレがみられる。胎土に黒色の粒子が混入する。62は須恵器の広口壺の口縁部片である。63は天目茶碗である。完形で出土しており、口径は10.6cm器高は5cmを測る。釉調は漆黒色から赤銅色で体部中程まで施釉される。体部下半部は露胎となっており、時計回り方向にあてた工具痕が観察され、削り高台とする。

Fig.20-64、65、67、70、71は瓦質土器である。64、65、67は火鉢である。64は内面上部に帯状の剥離痕があり、段状に巡る突帯があったものと考えられる。復元口径は38cmを測る。65は体部の一部だけ詳細は分からぬが、内外面とも細かい単位のヘラ磨きを施している。67は三足土器で口縁帯に巴の文様を工具突端部で施す。内面は全体に細かいハケメ調整を行う。外面上部に煤が付着する。70、71は捏鉢である。71は復元径35cmを計り、内外面にハケメ調整を行なうが、外面はやや磨耗している。66、68、69は土師質土器である。66は捏鉢であり、復元径は30cmを測る。内面には細かいハケメ調整を施している。68、69は鍋である。復元径は46.8cm、50.8cmを測る。どちらも外面上部に煤が付着しており黒褐色を呈し、体部は被熱して赤褐色となる。

Fig.21-72~85は陶器である。72、73、74は皿である。釉調は暗褐色から暗茶褐色で、復元径はそれぞれ8.8cm、8.8cm、10.4cmを測り、器高は2.6cm、2.9cmを測る。75は茶釉の四耳壺である。76は壺である。茶褐色の釉がかかり、口縁部に目土が残る。77は黄釉の四耳壺である。内面は肩部まで施釉しそれ以下を露胎とする。78は鉢である。外面にはオリーブ色の釉がかかり、内面には乳白色の釉がかかる。口縁部上に目土が付着する。79は壺の口縁部片である。渦ったオリーブ色の釉がかかり、目土が付着する。80は鉢である。茶褐色の釉調で口縁部に目土が付着する。内面には二本の隆帯が形成される。復元径は18cmを測る。81は壺の口縁部片である。復元径は17cmを測り、釉調は深緑色から暗



Ph. 30 120号遺構出土遺物（縮尺不同）

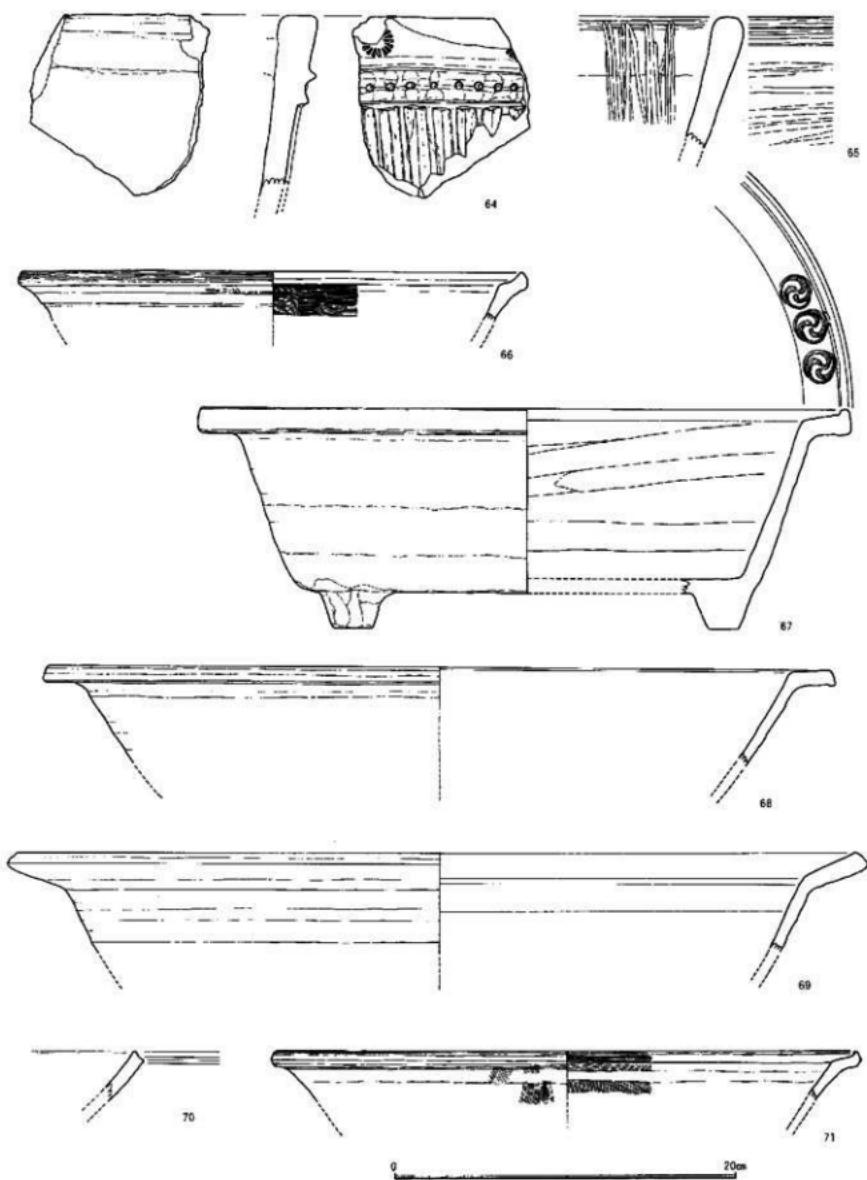
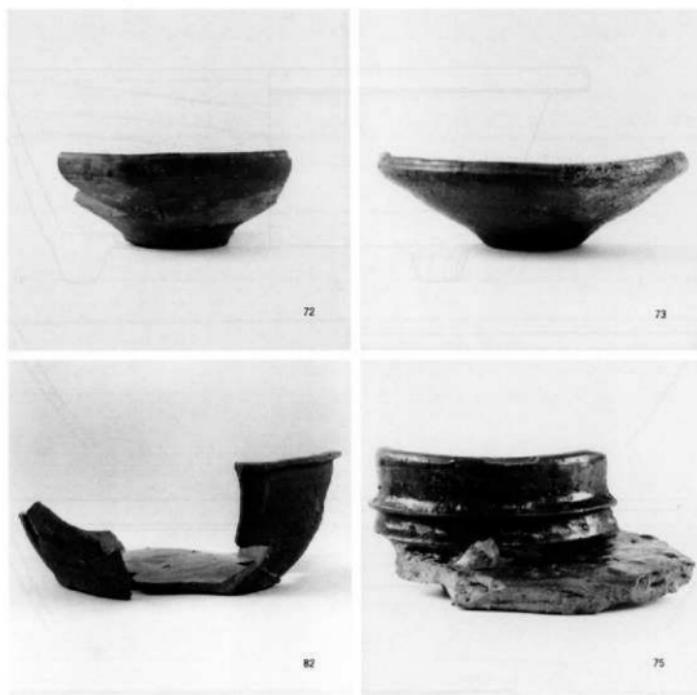


Fig. 21 120号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

オリーブ色を呈する。82、83は盤である。外面は体部下半まで施釉されるが、以下は露胎とする。釉調はオリーブ色から茶褐色を呈し、82の底部は薄く施釉されるが、83の底部は露胎となる。84、85は口縁内折臺である。84は暗茶褐色の釉が全体にかけられ、屈曲部上ではオリーブ色の釉が横線状に施される。85は内面上部に叩き痕がみられる。復元径は43.6cm、47.4cmを測る。

この他には、青白磁梅瓶・青白磁壺・青磁花瓶・白磁蓋・鉄釘・瓦・石鍋などが出土している。遺物のほとんどが、石列の内側・石列に取り付く整地層の掘り下げ時に出土したものである。瓦は数点が出土しているが、この遺構の上屋構造に使用された瓦としては絶対的に少ない出土量である。このことより瓦葺き以外の板葺きなどの上部構造であったことが想定される。蔵の基礎と考えられるこの遺構の年代は出土遺物から14世紀代前半をあてることができよう。



Ph.31 120号遺構出土遺物（縮尺不同）

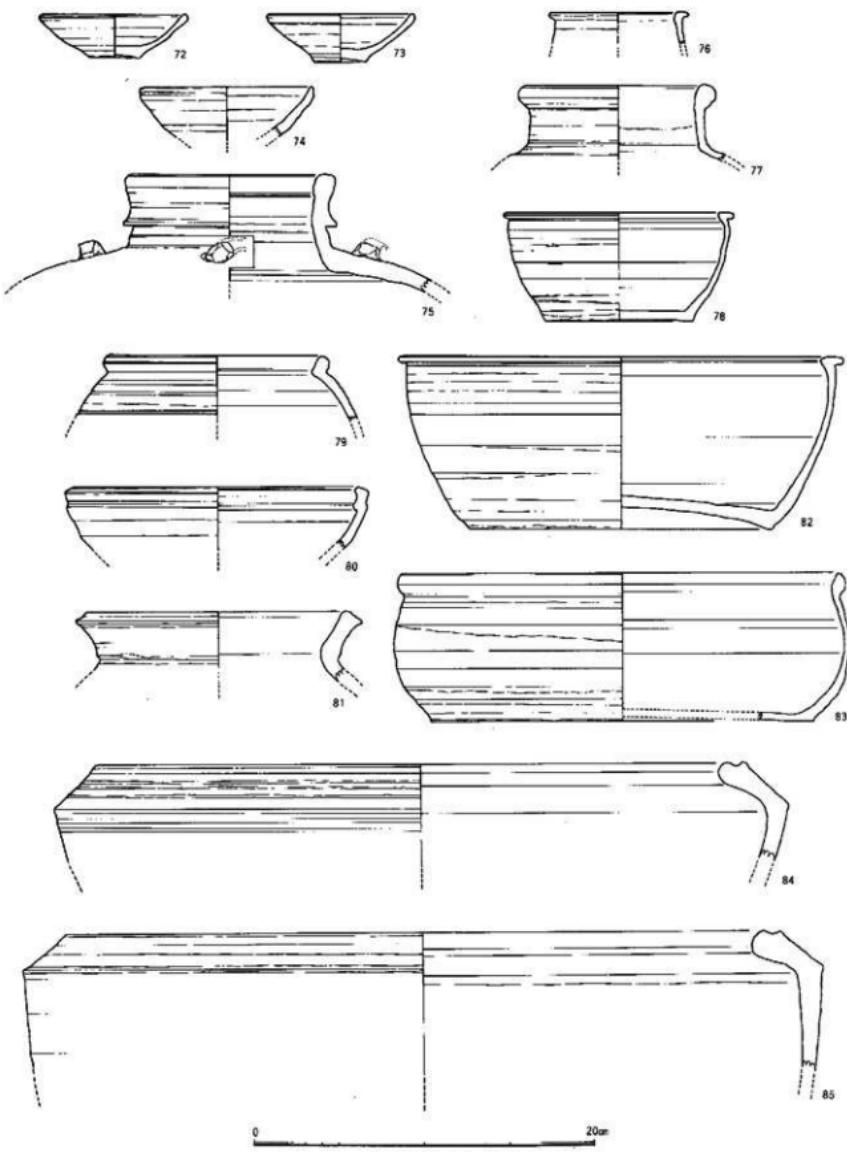


Fig. 22 120号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

(4) 第4面

第3面調査中にトレント内に土層を観察したところ、引き続き整地面が何層にも堆積している状況が確認され、各整地面が第2面、第3面と近接した時期の造構面であろうと判断し、大幅に掘り下げを行った。土層断面を確認しながら整地面がなくなる直前まで掘り下げを行い、標高4.40m付近で厚く堆積する黄白色粘土の整地面を検出し、これを鍵層として造構面を設定した。第3面までと同じく調査区北側のみ整地が確認されるが、南側では検出されなかった。造構検出の結果、石組造構・土坑・道路状の整地・井戸の掘方の一部などを検出することができた。南側でも井戸等に一部破壊されているが石組造構や土坑などが検出された。南側では南端トレントをさらに掘り下げて土層の堆積を観察したが、何の変化もなく暗褐色土の堆積だけが確認された。

検出された造構の内にわずかではあるが、方向性をもって構築されているものがあった。148号造構・150号造構がそれである。詳細は後述するとして、148号造構は48°程西偏し、150号造構は120号造構と同じく47°程東偏する。これは148



Ph.32 第4面全景北側（南から）



Ph.33 第4面全景南側（北東から）

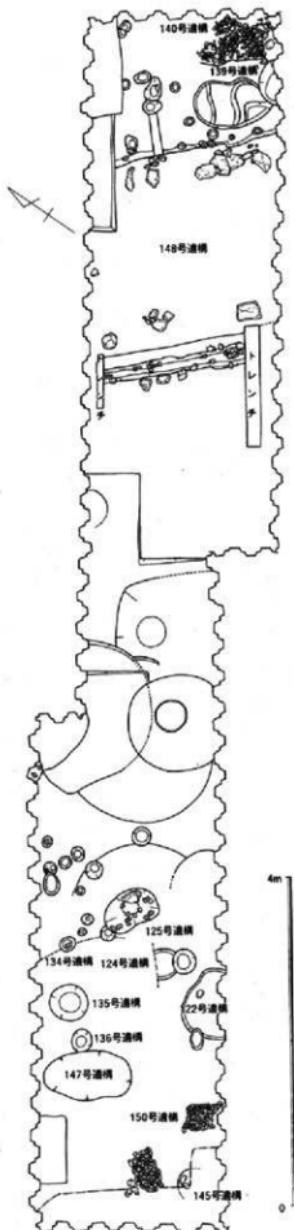


Fig.23 第4面造構全体図 (S=1/120)

号遺構にたいして120号遺構・150号遺構などが直交することを意識して構築されたことを示し、何からの区画が存在していたことが窺える。本調査地点は周辺の調査成果から近接する聖福寺の築地塀の推定ライン上に位置することから、148号遺構が聖福寺の築地塀である可能性も十分に考えられた。しかし、調査の結果からは築地塀の下部基礎構造と考えにくく、その痕跡も認められなかつたことから、築地塀の基礎遺構とは異なる遺構と結論づけた。148号遺構・150号遺構はその出土遺物から13世紀後半の年代を与えることができる。その他の検出遺構の出土遺物から第4面の年代は13世紀後半頃とすることができよう。

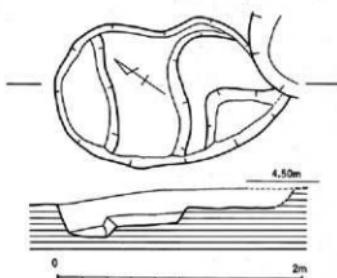


Fig. 24 139号遺構実測図 (S=1/40)



Ph. 34 139号遺構検出状況 (南東から)

139号遺構

調査区北側で検出した土坑である。一部を他の遺構に搅乱されるが長径2.0m、短径1.1mを測る梢円の平面形をもつ。遺構底部は三段になるが、落ちは明瞭ではなく整地の切れ目にあたる可能性も考えられる。覆土は暗褐色のペトペトした土で炭化物を少量含んでいた。

Fig. 25に出土遺物を示した。1は青磁の壺である。龍泉窯系のものである。2～4は白磁である。2は小碗で疊付のみ袖を拭き取って露胎としている。3は皿である。見込み周間に沈線を加える。4は碗である。外底部から高台内まで露胎とする。5は輸入陶器の瓶である。茶軸が全体にかかる。6は褐釉陶器の鉢である。白砂の目痕が口縁部に残る。7は黄釉陶器の盤である。

この他に青白磁梅瓶や滑石製品や天目茶碗などが出土した。遺物から13世紀後半から14世紀代前半の年代が考えられる。

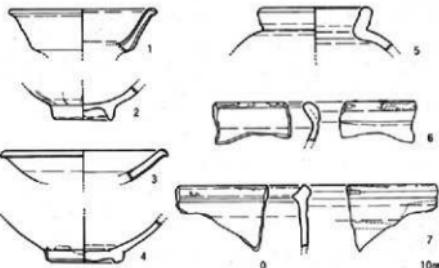


Fig. 25 139号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

140号遺構

調査区西端で検出した石組遺構である。一部が調査区にかかるのみで全体の規模は分からぬ。標高4.40m付近の整地面上に礫が敷き詰められる状況で検出された。礫は比較的小さいものが使用されており、ほとんどが拳

大の礫であり、人頭大の礫は少ない。礫の隙間に遺物が入っている。第3面の120号遺構と同じく地固めの基礎状遺構と考えられる。一部分のみの検出で方向性などは把握できなかった。

Fig.27に出土遺物を示す。1は土師器の皿である。底部は回転糸切り調整とし、うすく板目圧痕が残る。2、4～7は青磁である。2は小碗である。口径は10cmを測る。3は白磁の碗である。口縁部の釉を拭き取って口ハゲとする。釉調は淡灰色を呈する。4～7は小鉢である。いわゆる龍泉窯系青磁である。4は疊付のみ露胎とし、露胎部分は赤褐色となる。5は厚く施釉される。6も疊付のみ露胎とする。7は小片であり、法量などは不明である。体部外面に鎬邏弁文を施す。8、9は常滑焼の豪の口縁部片である。釉調は8が灰褐色で9が暗褐色を呈する。

これらの遺物から13世紀後半頃の年代が考えられる。

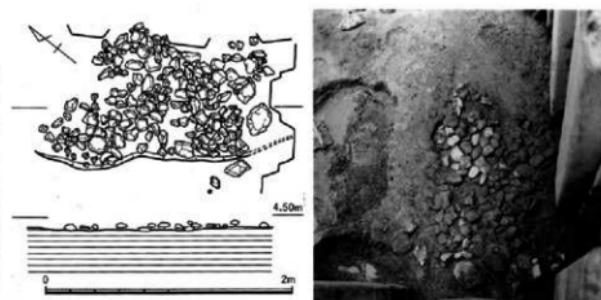


Fig. 26 140号遺構実測図 (S=1/40)

Ph. 35 140号遺構検出状況 (南東から)

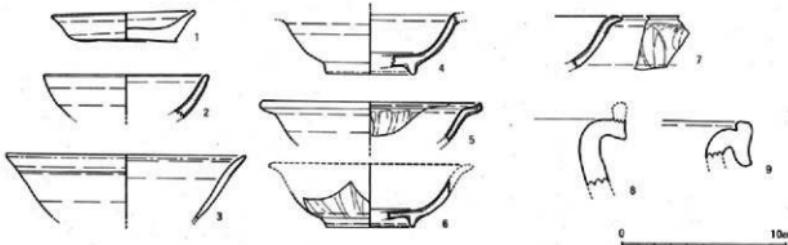


Fig. 27 140号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

148号遺構

調査区北側で検出した遺構である。検出時は単に遺構を伴わない整地面とも考えられたが、黄白色粘土の整地面がやや硬化していたこと、他の遺構が切り込んでいない等のことから道路状遺構と考えた。幅は約5mを測り西側には溝、東側には段を有し周囲より一段高くなる。整地面の標高は4.04mを測る。整地面上には両端に沿って柱をのせるような、やや大型の扁平な礫を並べ、西側の溝には礫が落ち込む。東側では50～80cmの間隔で柱穴が、落ちの下段に沿って並ぶ。これらからこの遺構には何らかの上屋構造が伴っていたことが想定できる。西側の溝は雨落溝であろうか。

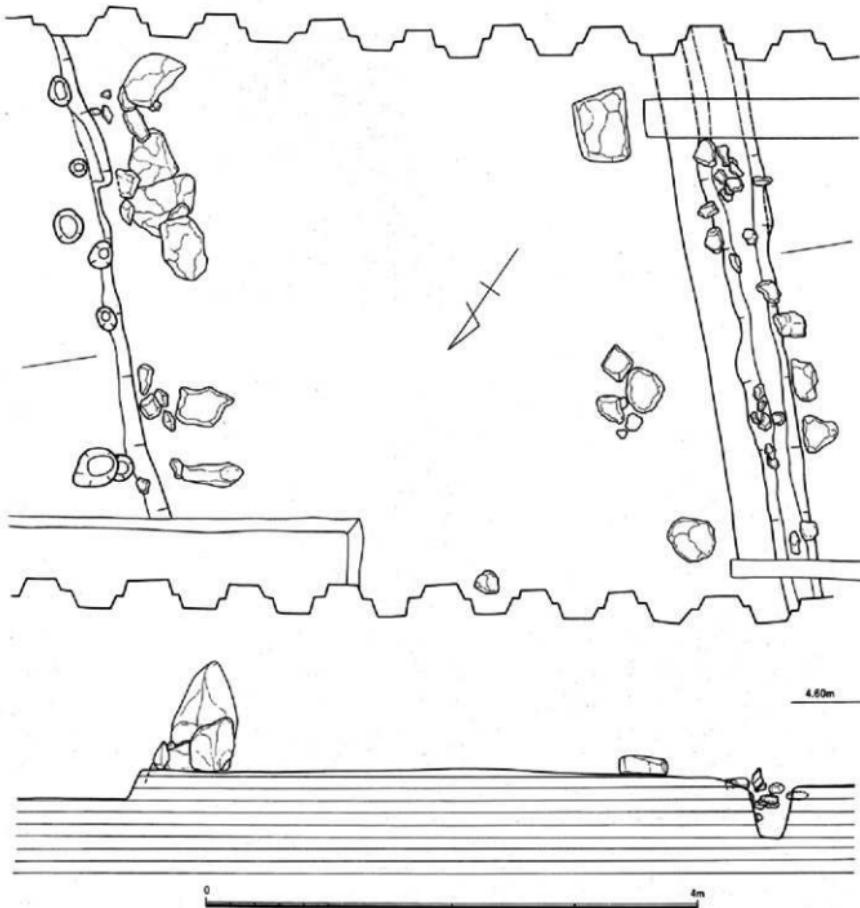


Fig. 28 148号遺構実測図 (S=1/40)

遺構の性格としては道路というより廊に近い構造が考えられる。この遺構の主軸は48°程西へ偏り、調査地点に面する現在の道路より西へ振れる。この廊状遺構が示す先には何らかの建物施設が存在する可能性が考えられる。この廊状遺構が当時周辺に土地区画の制約となりえたことも想定される。なお、瓦は数点のみが出土しているが、全体に使用されているとは考えられず、120号遺構と同様に瓦葺き以外の上屋構造であったと考えられる。



Ph. 36 148号遺構検出状況（北東から）



Ph.37 148号橋北側柱穴列検出状況（南東から）



Ph.38 148号橋南側溝検出状況（南東から）

Fig.29, 30, 31に出土物を示す。

Fig.29-1～9は土師器である。1～5は皿である。底部は糸切りされ、2～4は板目圧痕がみられる。内面はナデ調整で口径は7.5cm～10cm、器高は1.1cm～1.4cmを測る。

6～9は壺である。底部は糸切り調整が施され板目圧痕を伴う。9は灯明皿として使用されたらしく、口縁部に油煙が付着する。10は瓦器の柄である。内面の磨きから楠葉型瓦器碗であることがわかる。口縁部端部内面に沈線を施し内面は平行で密な、外表面は斜交するヘラミガキが施されている。11～16は白磁である。11、15は皿である。11は口ハゲで底部の釉も一部拭き取られている。15は内面に片切彫で文様を施し露胎の底部に「林」と花押を墨書きで施す。

12、13、14、16は墨書きの碗である。12、13は底部片で汚れがひどく墨書きは判読できない。14の墨書きは不明瞭である。「網」か。16の墨書きも不明瞭であり、判読できない。

Fig.30-17～24、26～29は青磁である。いわゆる龍泉窯系青磁である。17は小鉢である。疊付を露胎とする。



Ph.39 148号橋出土遺物（縮尺不同）

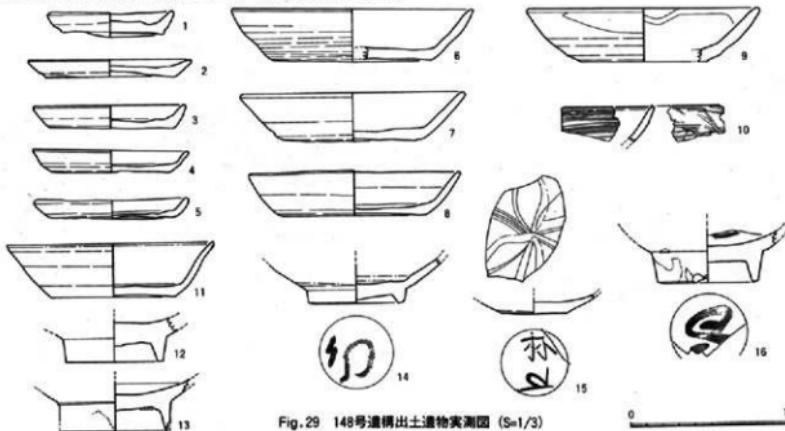


Fig.29 148号橋出土遺物実測図 (S=1/3)

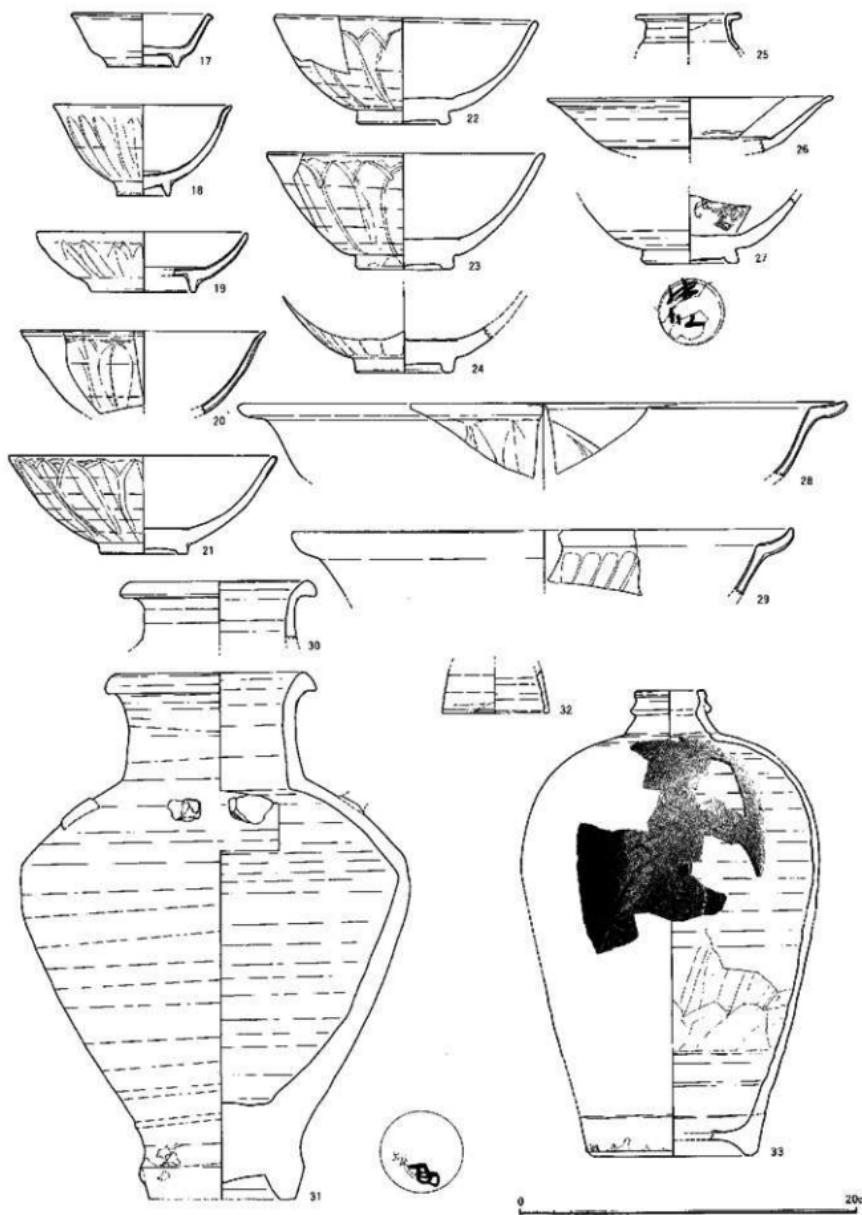


Fig. 30 148号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

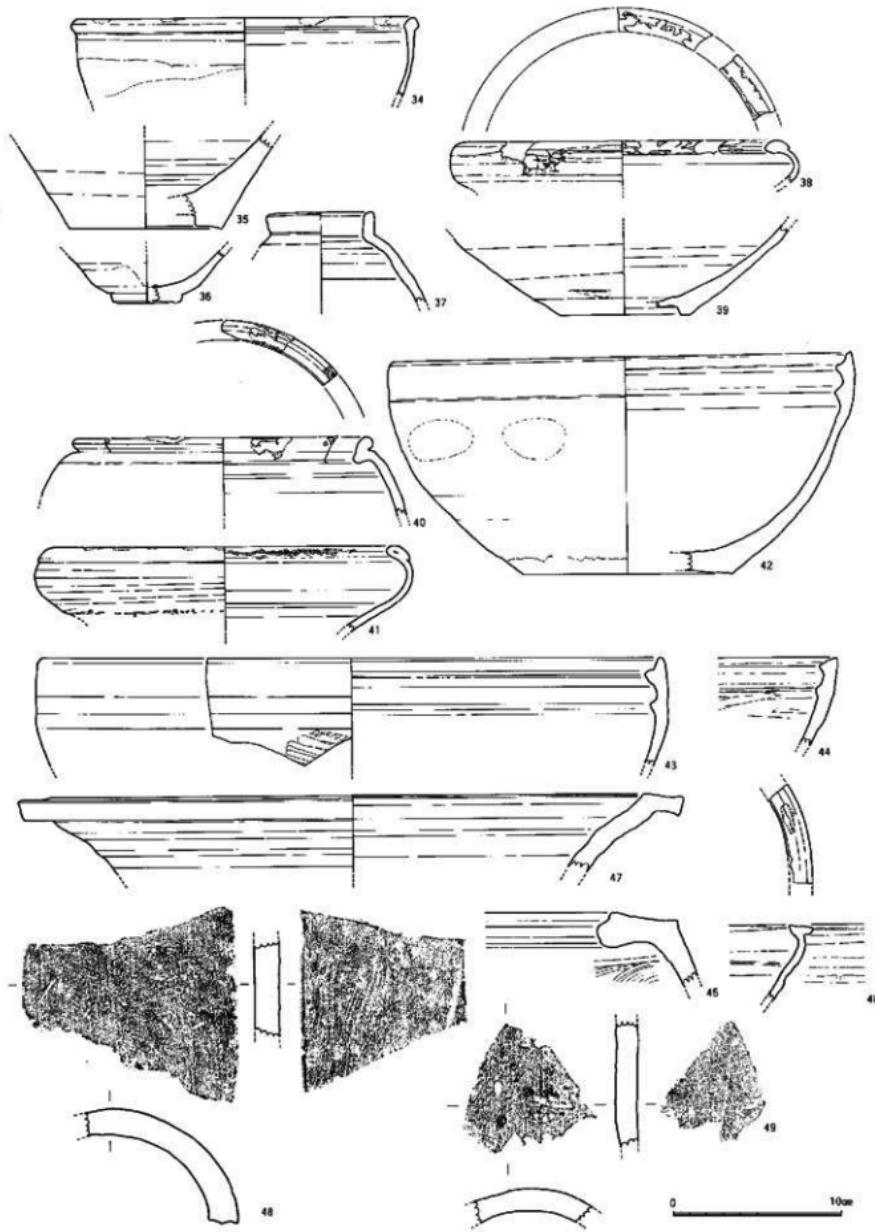
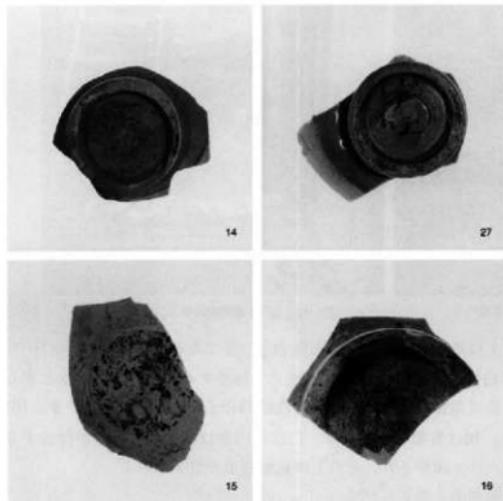


Fig. 31 148号遗址出土遗物实测图 (S=1/3)



Ph. 40 148号遺構出土墨書き土器（縮尺不同）

Fig. 31-34、35、37~46は陶器である。34は盤である。35は壺である。37は長頸壺である。38は茶軸鉢である。39は鉢である。40は鉢である。41は茶軸鉢である。42は捏鉢である。43は捏鉢である。44は捏鉢である。45は口縁内接壺である。46は鉢の口縁部片である。36は天目茶碗である。47は備前焼の壺である。48、49は瓦である。ともに繩目が残る。

これらの遺物から13世紀代後半の年代をあてることができる。

18は小碗である。外底部から疊付までを露胎とする。外面には鎧蓮弁文を施す。19は皿である。疊付付近を露胎とする。20~24は碗である。外底から露胎とし、外面には鎧蓮弁文を施す。28、29は盤である。28は内面に割花文を、29は内面に菊弁文を施す。26は皿である。27は墨書き土器である。高台内まで釉が流れ込み墨書きは判読できない。30、31は白磁の壺である。31は底部に墨書きがあるが、不明瞭で判読できない。花押か。27、32、33は青白磁である。27は香炉片である。32は蓋である。33は梅瓶である。外面上部には唐子文、下部には蓮花唐草文が施される。

18

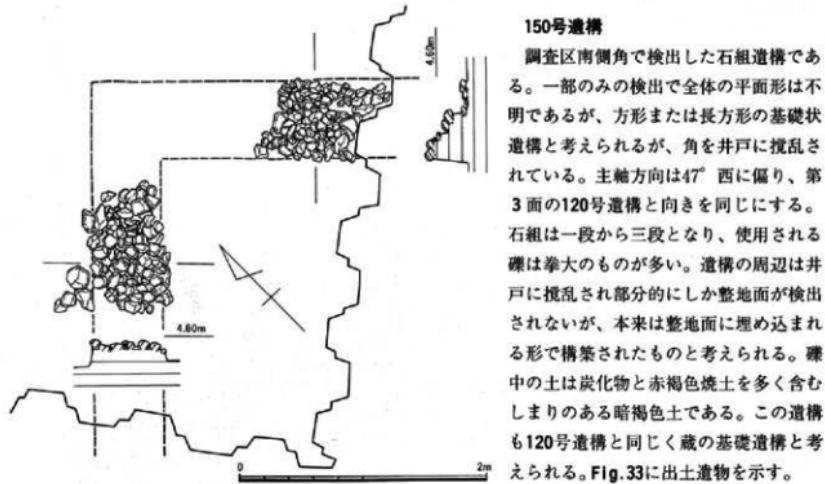


Fig. 32 150号遺構実測図 (S=1/40)

150号遺構

調査区南側角で検出した石組遺構である。一部のみの検出で全体の平面形は不明であるが、方形または長方形の基礎状遺構と考えられるが、角を井戸に搅乱されている。主軸方向は47°西に偏り、第3面の120号遺構と向きを同じにする。石組は一段から三段となり、使用される礫は拳大のものが多い。遺構の周辺は井戸に搅乱され部分的にしか整地面が検出されないが、本来は整地面に埋め込まれる形で構築されたものと考えられる。礫中の土は炭化物と赤褐色焼土を多く含むしまりのある暗褐色土である。この遺構も120号遺構と同じく蔵の基礎遺構と考えられる。Fig. 33に出土遺物を示す。



Ph. 41 150号遺構検出状況（北東から）

Ph. 42 150号遺構検出状況（北東から）

Fig.33-1～4は土師器である。1は糸切り調整された底部をもつ皿である。2、3、4は壺である。底部は糸切り調整とする。5は白磁の碗である。体部中程まで施釉するが、以下を露胎とする。6、7は青磁の鉢である。どちらも龍泉窯青磁である。8は青白磁の合子蓋の小片である。9、10は陶器である。9はY字口縁壺である。10は黄釉の盤である。口縁部内側は露胎で、目土が付着する。11は瓦質土器の捏鉢である。外面はハケメ調整され、その上に指頭圧痕が加えられる。遺物からこの遺構の年代は13世紀代後半頃と考えられる。

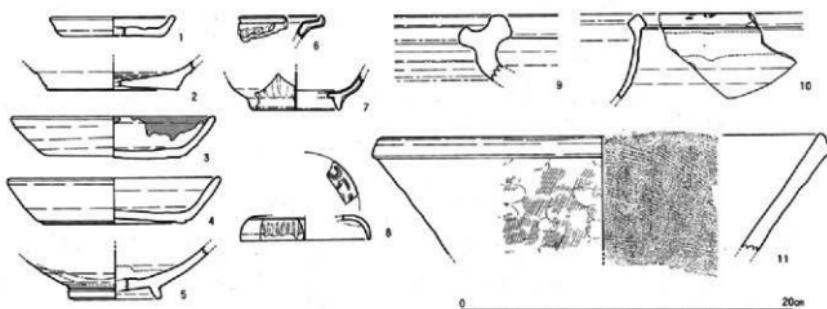


Fig. 33 150号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

151・152号遺構

第4面から第5面へ掘り下げる中に検出した遺物群で廃棄遺構として捉えた。調査区を囲む鋼板によって搅乱され、遺構の掘方等の検出はなかった。遺物は標高4.00m付近のしまりのない暗褐色土の中から積み重なるように検出された。遺物の出土範囲が大きく2つに分けられたことから、調査の都合上151号、152号と区別して取り上げたが、本来は一括廃棄されたものと考えられる。

Fig.34に出土遺物を示した。



Ph. 43 151・152号遺構検出状況（南西から）

Fig. 34-1 は黒色土器の椀である。内面には炭素を吸着・黒化させて内黒とする。内外面ともに密なヘラ磨きを施す。2、3 は瓦器椀である。ともに柿葉型瓦器椀で内面には細かいヘラ磨きが施される。4、7 は越州窯系青磁である。4 は輪花碗片で、7 は水注の胴部片である。5 は青磁の双層碗片である。6 は青白磁の合子蓋の小片である。8、9 は陶器である。8 は四耳壺、9 はT字口縁壺である。10 は常滑焼の壺である。内面には接合痕がよく残る。遺物から13世紀後半の年代が考えられる。



Ph. 44 151・152号遺構出土遺物 (縮尺不同)

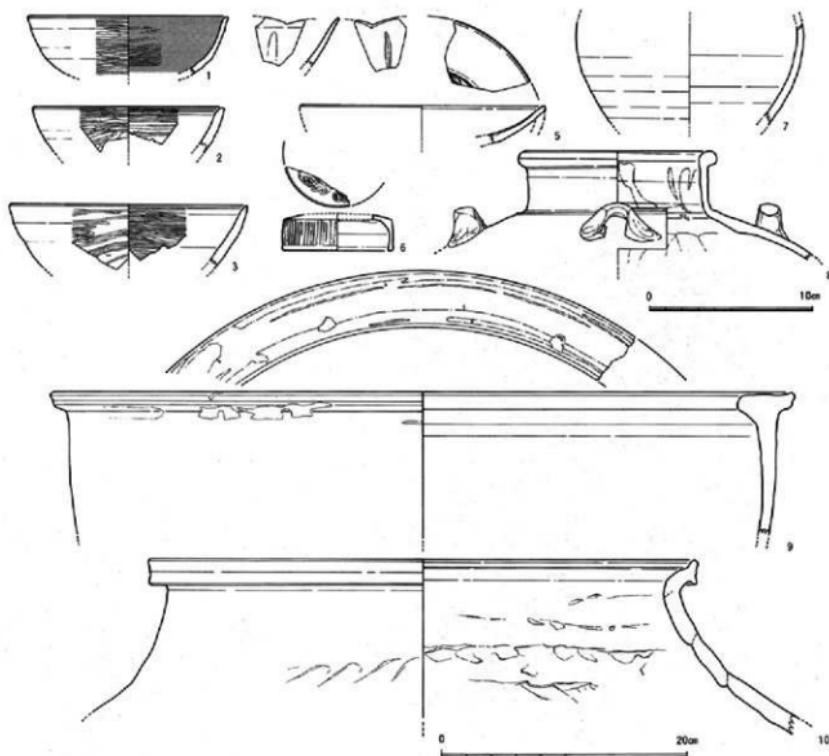


Fig. 34 151・152号遺構出土遺物変測図 (S=1/3, 1/4)

(5) 第5面

標高3.30m付近で検出した遺構面である。第4面下の堆積状況をトレンドで観察したところ、大別して暗褐色土、暗褐色砂質土、褐色砂という層序が確認された。この褐色砂面は博多遺跡群の基盤層である砂丘砂の上面にあたる。第4面からは約1m程低い遺構面であり、掘り下げ途中の暗褐色砂質土面にて何度か遺構精査を試みたが、明確な遺構の検出はなかった。調査区北側では掘り下げ中に遺構の検出はないものの13世紀代後半頃の多量の遺物や獸骨などが出土した。上面からの井戸遺構で大きく搅乱される南側では、13世紀後半代から15世紀代の遺物が出土している。

第5面では、土坑・溝・住居跡・井戸などの遺構を検出した。検出した遺構は出土遺物から8世紀～13世紀後半の年代が与えられるが、掘り下げ途中で検出できなかった遺構もあるため、第5面とした砂丘面の年代としては8～9世紀代が考えられる。2018年度からは土器や瓦類等の出土地点を

しかし人骨は、この造構に伴うものではなく、本来砂層中に埋葬されていたものを掘削時に掘り出してしまい、再埋葬し



Ph. 45 第5面全景北側（南から）



Ph.46 第5面全景（南西から）

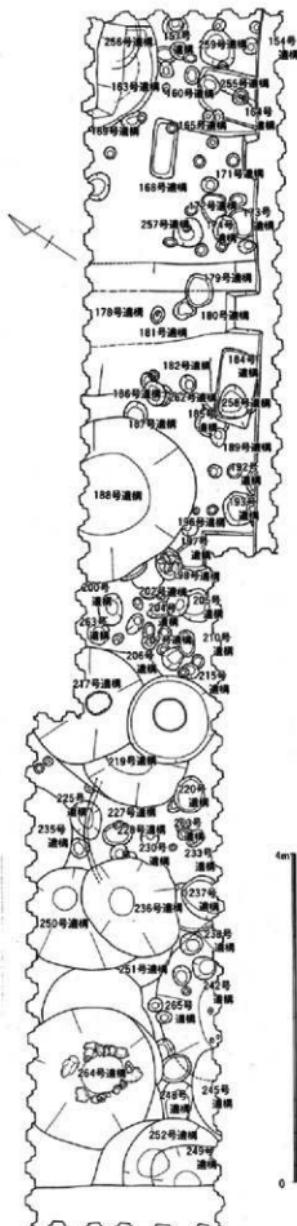


Fig. 35 第5面造模全体図 (S=1/120)

たものと考えられる。遺構の年代は遺物から12世紀後半と考えられるが、人骨の年代はその年代よりも遅るものであることしか現在のところ分かっていない。この他に第5面では砂丘面上に焼砂・窓などを検出した。これらは住居に伴うものと考えられたが、住居跡の検出はなかった。調査区南側に集中していた井戸遺構は砂丘面に掘り込まれているため、大きな逆円錐形をなすが、調査区が狭いため掘方全体を検出できたものは少なく、掘方の一部のみが調査区にかかるだけで井戸枠などは調査区外にあるものもあり、調査できなかった遺構もあった。また安全確保の面から完掘できないものは少なくなかった。なお、本調査地点における湧水点は標高1m付近である。

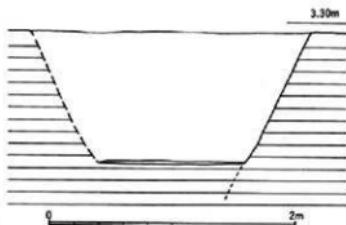
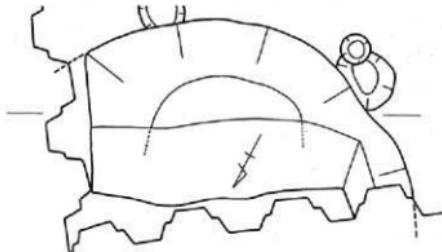


Fig. 36 163号遺構実測図 ($S=1/40$)

った。井戸遺構自体の覆土は暗褐色土で、下部には暗褐色砂質土が堆積する。Fig. 37に出土遺物を示す。1は白磁の碗である。体部中程まで施釉し以下を露胎とする。この他に土師器、須恵器、陶器などが出土している。遺物よりこの遺構の年代は12世紀後半を考えることができる。



Ph. 48 163号遺構出土遺物



Ph. 47 163号遺構検出状況（北東から）

163号遺構

調査区北側隅で検出した遺構である。遺構上に土層観察用に壁を残し遺構の一部が調査区内にかかるだけであるが、完掘はできなかった。断面にみられる堆積状況から井戸遺構と考えられる。覆土中には別の遺構が掘り込まれているが、検出はできなか

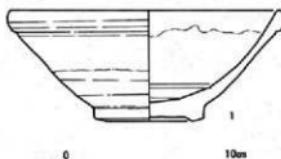


Fig. 37 163号遺構出土遺物実測図 ($S=1/3$)

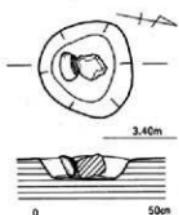
164号遺構

Fig. 38 164号遺構実測図 (S=1/20)

調査区北側で検出した遺構である。砂丘面に掘り込まれた土坑内から土師器碗が口縁を南側に横向きにした状態で出土した。底部には人頭大の礫が立て掛けられるように置かれていた。

Fig. 39に出土遺物を示す。1～3は土師器である。1、2は壊である。1は底部をヘラ切り調整したうえに板目圧痕を加える。内面の器面調整は静止指ナデを施す。2も底部をヘラ切りとし板目圧痕を加える。3は碗である。体部の成形はナデ調整で行い、底部をヘラ切りしたのち板目圧痕を加える。高台は貼り付けて成形している。口径は12cm～12.4cm、底径は7.9cm、器高は4.3cmを測る。胎土はきめ細かい黄褐色土である。4は須恵器の壊である。体部をナデ調整で成形し高台部を貼りつける。外底部の一部が黒化する。口径13.7cm底径9.3cm、器高は3.8cmを測る。これらの遺物から9世紀の年代が与えられる。



Ph. 49 164号遺構出土遺物

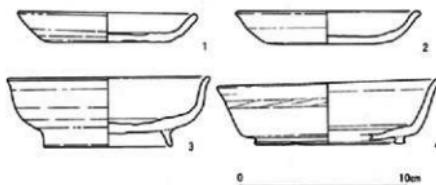


Fig. 39 164号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

178号遺構

調査区北側を横切るように検出された溝遺構である。幅3.2m、検出面からの深さ0.7mを測る。砂丘面に掘り込まれ、覆土は暗褐色砂であった。溝の方向は磁北方向から西に35°程偏っている。断面で堆積状況を観察すると、溝が埋没したあとに東側に移行し再度溝が掘り直されている。掘り直された溝は幅1.5m、深さ0.5mを測る。底には暗褐色砂質土が堆積している。狭い調査区内での検出であり、この溝がどのような性格の溝であるかは分からぬ。

Fig. 41、42に出土遺物を図示する。



Ph. 50 178号遺構検出状況 (北東から)



Ph. 51 178号遺構堆積状況 (北東から)

Fig.41-1～7は土師器である。1は壺である。内面の一部分に漆が付着する。2は皿である。京都系の土師皿で「て」の字状口縁をもつ。3は椀である。体部はヘラ切りし、高台部を張り付けている。4は皿である。底部はヘラ切りとし、口径は21cmを測る。5は椀の体部である。口径は14.6cmを測る。内面にはヘラ磨きを施すが、摩滅しており明瞭ではない。6は椀である。口径は12cmを測る。口縁部に膨らみをもつ。7は壺である。底部はヘラ切りし板目圧痕を加える。復元口径は15.4cmを測る。8、9、11は黒色土器の碗である。内面に炭素を吸着させて内黒とする。8は貼り付け高台で、口径10.4cmを測る。内外面ともヘラ磨きを丁寧に施す。10は墨書きの白磁である。皿の底部片で高台内に「網」の墨書きが読める。



4

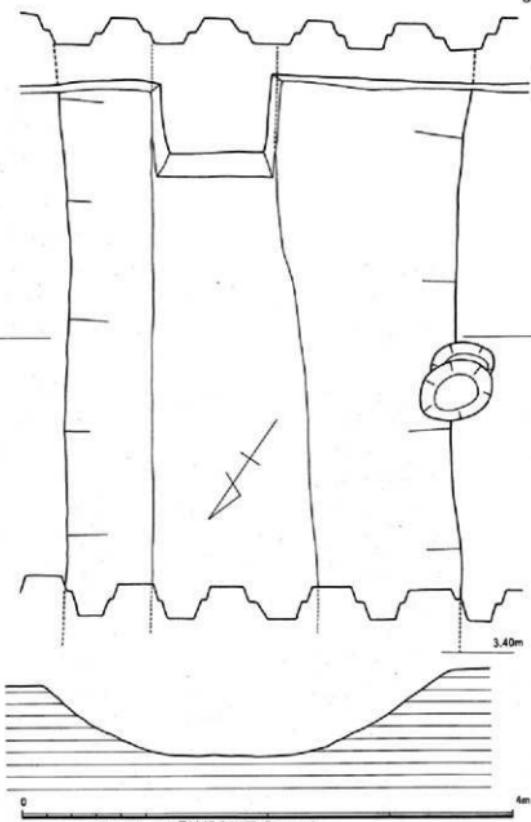


Fig.40 178号遺構実測図 (S=1/40)

Ph. 52 178号遺構出土遺物

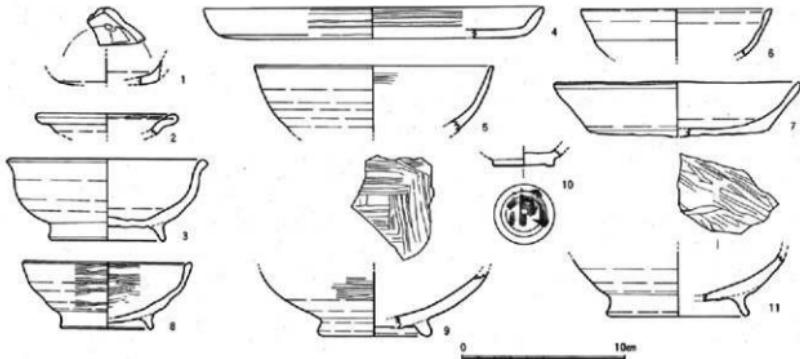


Fig.41 178号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

Fig. 42-12~14は土師器の壺である。12は口径14.6cmを測る。外面にはハケメ調整を施し、内面には棒状工具突端部で斜格子状に沈線を施す。13は復元口径25cmを測り、外面には縦位のハケメ調整を内面には横位のハケメ調整を施しヘラ削りを加える。14は復元口径24.8cmを測り、外面上には幅広いハケメ、内面には横位のハケメ調整を施している。15~17は須恵器である。15は壺蓋である。復元口径は29cmを測る。外面にはヘラ削りを施す。16は壺蓋である。復元径は14.4cmを測り、口縁端部は黒化する。17は壺である。復元口径は22.8cmを測る。18は滑石製の石鍋である。耳は八角形に削られている。19は越州窯系青磁の水注である。釉は薄くかかり、外面には白化粧を施す。この他に製塩土器、埴輪などが出土している。これらの遺物から掘り直された溝の年代は10世紀後半から11世紀後半を考えることができる。最初の溝の年代は9世紀代と考えられる。

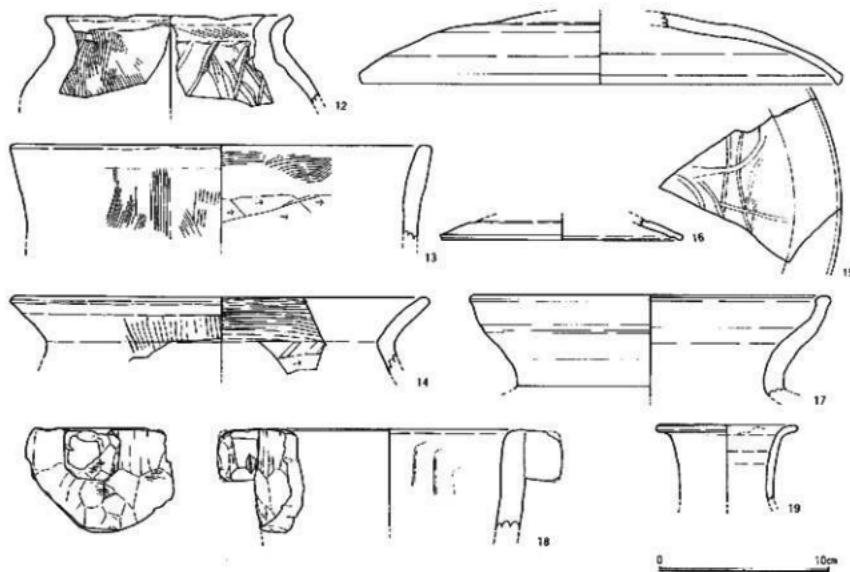


Fig. 42 178号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

184号遺構

調査区北側で検出した遺構である。隅丸長方形の土坑で1.8m×1.0mを測り、検出面からの深さは35cmを測る。覆土は暗褐色砂質土であった。Fig. 44に出土遺物を示す。

1~5は土師器である。1~4は皿である。1の底部はヘラ切り調整され板目压痕をナデ消す。2は体部をナデ調整し底部はヘラ切りとする。3は底部を糸切りとする。4は収入品で内面にはヘラ磨きを施す。体部には指頭压痕が残る。5は壺である。底部を糸切りし板目压痕を加える。6~8は瓦器碗である。6は復元径16cmを測り、内外面に

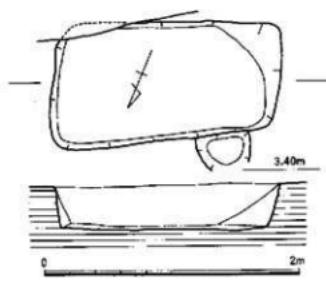
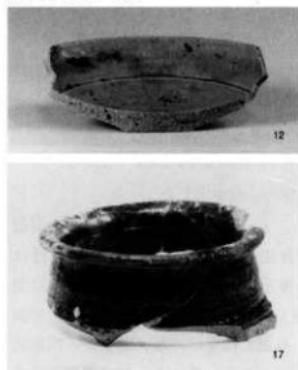


Fig. 43 184号遺構実測図 (S=1/40)

横位のヘラ磨きを施している。7は復元径18.8cmを測る。内外面とも密なヘラ磨きを施す。8は復元径17.6cmを測る。外面の磨きはやや粗い。9~16は白磁である。9~11、13~15は碗である。9はわずかに外反する口縁部をもち口径は15cmを測る。10は底部片で体部中程まで施釉し以下を露胎とする。11は口縁部片である。13、14も底部片である。これも体部下半部を露胎とする。15は口径15.4cmを測り、玉縁状口縁をもつ。12は平底皿である。口径は10.6cm、底径3.9cm、器高2.6cmを測り体部下半から露胎とする。16は小杯で口径3.2cm、底径2.4cm、器高1.6cmを測る。外底部から露胎とする。ヘラ切りする。17、18は陶器である。17は褐釉の壺である。18は褐釉の鉢である。外面は無釉とし口縁部には目土が付着する。19は瓦である。丸瓦の端部で濃灰色を呈する。この他に楠葉型瓦器碗和泉型瓦器碗などが出土している。これらの遺物から12世紀代前半頃の年代が考えられる。



Ph. 53 184号遣構出土遺物（縮尺不同）

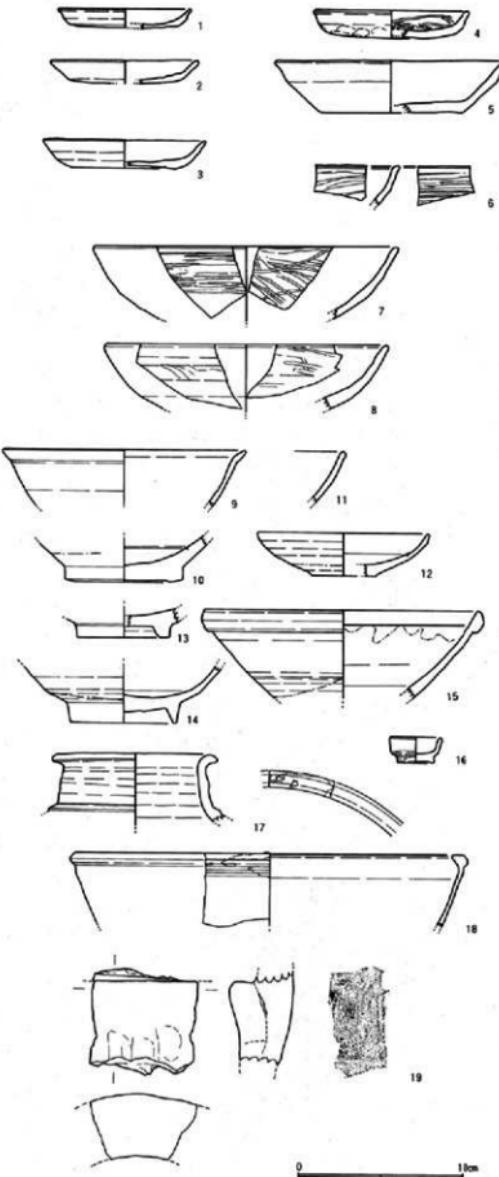
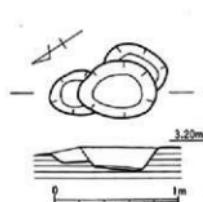


Fig. 44 184号遣構出土遺物実測図 (S=1/3)

Fig. 45 186号遺構実測図 ($S=1/40$) 色の砂であった。**186号遺構**

調査区北側中央で検出した遺構である。長径64cm、短径48cmを測る楕円形の土坑である。検出面からの深さは20cmを測る。178号遺構の最初の溝の覆土に掘り込まれている。覆土は暗褐色である。



Ph. 54 186号遺構出土遺物 (縮尺不同)

Fig. 46に出土遺物を示した。1、2は土師器である。1は皿である。口径10.4cm、底径7.1cm、器高は1.9cmを測る。底部はヘラ切りした後、板目压痕を加える。底部には煤の付着が見られる。内面はナデ調整を施す。2は碗である。口径13.1cm、底径7.2cm、器高4.8cmを測る。高台は貼り付けてナデ調整を施す。外面下半部付近には指頭压痕が並んで残る。3は須恵器の蓋である。復元口径は16cmを測り、ナデ調整と削り調整で成形する。この他には製塙土器などが出土しており、これらの遺物から9世紀の年代が考えられよう。

188号遺構

調査区中央部で検出した井戸遺構である。半分が調査区内にかかる状態で正確な規模は不明である。検出した部分では直径4mを測り、円形の平面形をもつ。周辺が崩壊する恐れがあったため完掘しておらず、井戸枠の調査は行わなかった。14世紀前半とした第3面では直上に遺構が検出されており、これ以前に掘削・埋没した遺構であろう。覆土は主に暗褐色で砂質土が混じる。

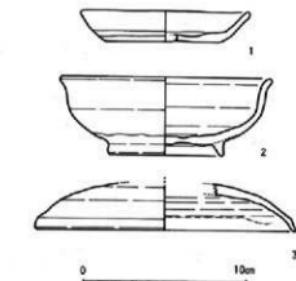


Ph. 55 188号遺構検出状況 (北西から)

28

Fig. 48, 49に出土遺物の一部を示した。

1～4は土師器である。1～3は皿である。1、2の底部は糸切り調整され板目压痕が加えられる。復元口径は9cm 8cmを測る。3は復元口径が24cmを測り、外面には磨きが施される。4は甕である。口径は17cmを測り、ナデ調整で成形されたあと、外面には粗いハケメ調整が、内面にはハケメ調整と削りが施される。5、6、10は須恵器である。5は碗である。口径は17cm、底径10cm、器高は4.75cmを測る。貼り付け高台で焼成はあまり良くない。6は墨書きもつぶである。墨書きは部分的に残り、判読できない。

Fig. 46 186号遺構出土遺物実測図 ($S=1/3$)

10は鉢の口縁部片である。7は黒色土器の椀である。口径は15.4cmを測り、内面に炭素を吸着させ内黒とする。内面には磨きが観察できるが、外面にはみられない。8は瓦質土器の鉢の口縁部の小片である。外面は黒化し、一部にハケメ調整が観察できる。内面には横位のハケメ調整が丁寧に施されている。9は瓦器椀である。漆黒色を呈し、高台部は貼り付けて、内外面には丁寧なヘラ磨きを施している。内面は一部斜格子状にヘラ磨きが施され、磨き痕は部分的に銀化している。

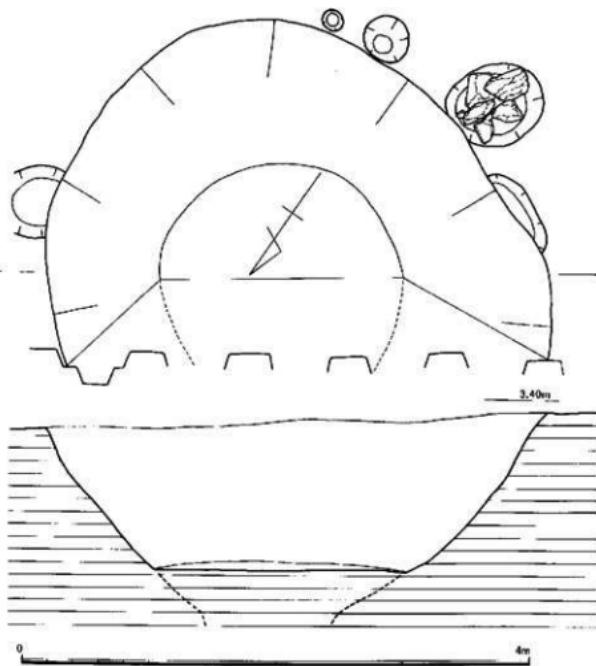


Fig. 47 188号遺構実測図 (S=1/40)

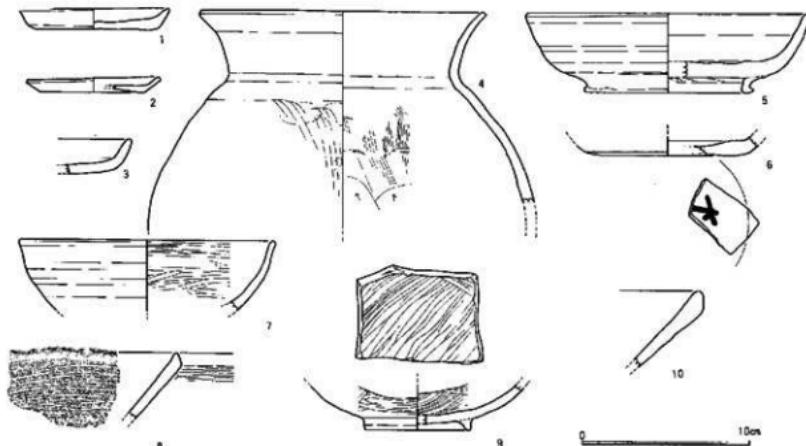


Fig. 48 188号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

Fig. 49—11～19は白磁である。11、14、17～19は皿である。11、14は体部中程まで施釉し、以下の釉を拭き取って露胎とする。11は口ハゲとする。17は口径10.2cm、底径3.8cm、器高2.6cmを測り、底部に墨書きをもつ。判読はできない。18、19は口縁部の釉を拭き取って口ハゲとし、外底部まで施釉する。12、16は碗である。12は口縁部片でいわゆる口ハゲである。16は底部片で削り高台は逆「の」字状に削られる。見込み周縁の釉をけずりとる。13、15は盃である。13は口縁部片であり、釉調はオリーブ色を呈する。15は底部片で外底部まで施釉する。24は青白磁の合子蓋である。全面に施釉するが端部のみ釉を拭き取る。20、21、23は青磁である。20は小鉢である。口径は10.2cmを測る。口縁部を押し込み輪花とする。21は盤である。外面には蓮弁を施す。疊付周辺の釉を拭き取り露胎とする。23は貼花双魚文の盤である。外面に鯉蓮弁文を施し、疊付周辺を露胎とする。22、25は高麗青磁の碗である。22は口径15.4cmを測る。25は底部片であり、見込みと疊付に白砂が付着する。26は滑石製品である。滑石を削り人面を造る。頭部は一部欠損している。27は天目茶碗である。復元径は12.8cmを測り、直線的に立ち上がる体部をもつ。28、29は陶器である。28は褐釉の壺の口縁部片である。体部には両面に叩き痕が観察される。29は無釉捏鉢の口縁部片である。体部には叩きを施す。

これらの遺物から13世紀後半から14世紀前半代の年代を考えることができよう。

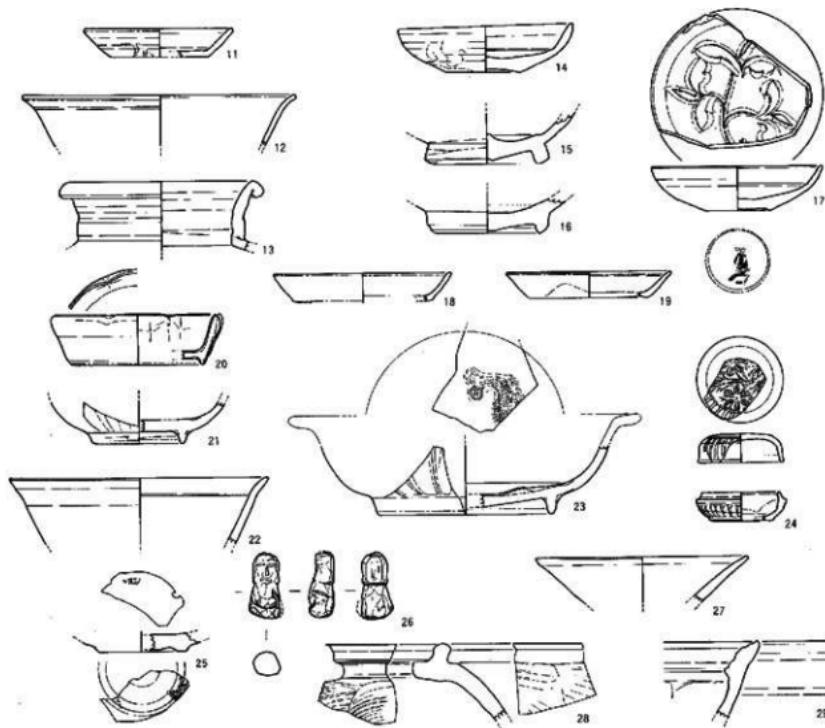
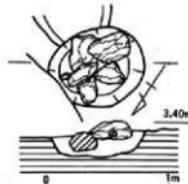


Fig. 49 188号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

0 10cm



198号遺構

調査区中央部で検出した遺構である。長径80cm、短径60cmの梢円形の土坑のなかに人頭大の礫が5個配置してあつた。根縫め石とも考えられたが、礫の表面は被熱していた。

Fig. 51に出土遺物を示す。

Fig. 50 198号遺構実測図 (S=1/40)
1、2は須恵器である。1は蓋の破片である。復元径は16.3cmを測り、焼成は良好である。2は壺である。復元底径は10.2cmを測る。高台は貼り付けとし、体下部でわずかに腰折になって立ち上がる。これらの遺物から遺構の年代としては7世紀代中頃が考えられる。

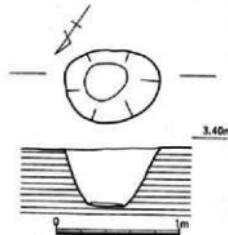


Fig. 52 200号遺構実測図 (S=1/40)

200号遺構
調査区中央部北側で検出された遺構である。長径80cm、短径60cmを測る梢円形の土坑である。検出面からの深さは45cmを測る。

Fig. 53に出土遺物を示す。

1は白磁の碗である。体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。口径は14.6cmを測り、底部は6.4cm、器高は6.4cmを測る。釉は光沢をもつ透明釉で使用痕がみられる。2は土師器は壺である。底部には板目圧痕が観察される。口径は16.6cm、器高は3.55cmを測る。コテアテ成形し内面にはナデ調整を施す。内面には幅広い磨きが施されている。この他には須恵器などが出土している。これらの遺物から、遺構の年代は11世紀後半から12世紀前半ころが考えられる。

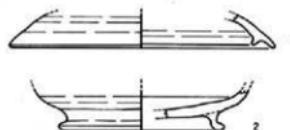


Fig. 51 198号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)



Ph. 57 200号遺構出土遺物 (縮尺不同)

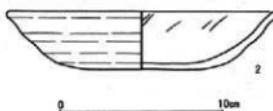


Fig. 53 200号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

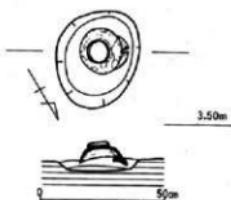


Fig. 54 207号遺構実測図 (S=1/10)

207号遺構

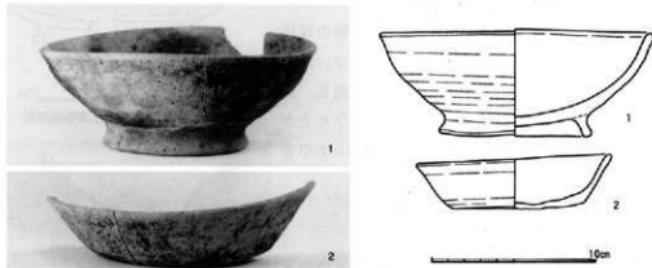
調査区中央部で検出した遺構である。長径42cm短径34cmを測る、梢円形の土坑の中に土師器の椀で逆位の状態で置かれていた。椀の下には壺がこれも逆位で置かれていた。

土坑は浅く検出面から5cm



Ph. 58 207号遺構遺物出土状況 (北西から)

の深さであった。本来はもっと深い土坑であっただろう。おそらく、椀と壺は意図的に重ねて埋設されたものと考えられる。Fig.55に出土遺物を示す。1、2は土師器である。1は椀で貼り付け高台をもつ。口径16.8cm、底径9.3cm、器高6.6cmを測る。ナデ調整で成形し、磨き痕は観察されない。2は壺である。底部はヘラ切りし板目圧痕を加える。口径12cm、底径8.1cm、器高3.0cmを測る。これらの遺物から10世紀代の造構と考えることができよう。



Ph. 59 207号遺構出土遺物（縮尺不同）

Fig. 55 207号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

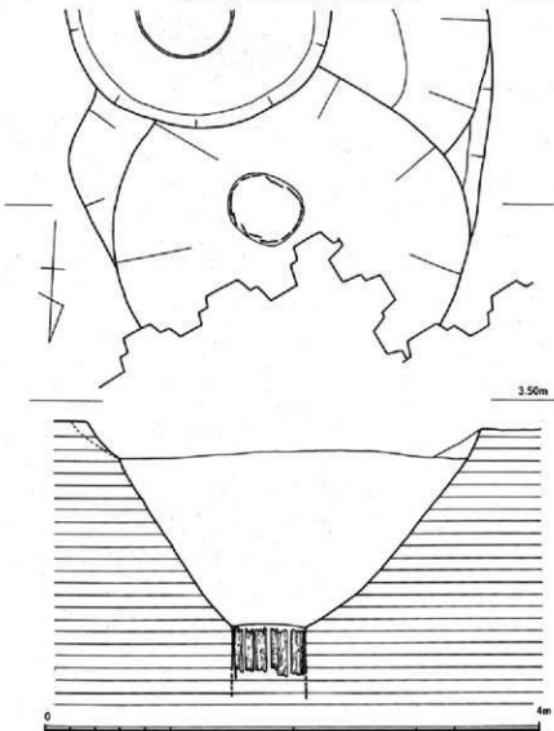


Fig. 56 217号遺構実測図 (S=1/40)

217号遺構

調査区中央部南側で検出した井戸遺構である。北側は調査区外となり、南側をたの遺構に擾乱される。掘方は約3mを測る円形である。検出面から2m程の深さで井戸を検出した。井戸は17枚の板で形成された桶を使用しており、板は長さが40cm前後であるが、下部は腐食して残りが悪い。桶の下部の標高は1.3mを測るが、本来は1m下まで続いているものと考えられる。桶は若干歪みを生じるが直径60cmを測る。

Fig.57に出土遺物を示す。

1～4は土師器である。1は皿である。口径7.4cm、底径5.35cm、器高1.2cmを測り、底部は糸切り調整される。2は小型容器である。外面は磨きが施される。3は壺である。コテアテ成形され底部は糸切りとし、口径は13.8cmを測る。4は椀である。底径は8.6cmを測り、ナデ調整で成形する。5～8は白磁である。5は口ハゲの皿である。6は碗の底部片で見込みは輪状に釉が削り取られる。7は口ハゲ碗の底部であ

る。8も口ハゲ碗の底部片である。体部中程まで施釉する。9、10、12は青白磁である。9、10は合子蓋である。内面中程から端部までを露胎とする。12は青白磁の碗である。豊付から高台内を露胎とする。内面には文様が施されるが、部分的に残る。11は青磁である。龍泉窯系青磁で外面には搞運文が施される。13、14は土師質土器の鍋である。15は釉里紅の竹梅文瓶である。16、17は須恵器である。16は鉢である。片口部は内面から押し出して成形する。17は高台壺である。内底部に赤色顔料が付着している。18は瓦質土器の鉢である。内面には丁寧な横位のハケメ調整が密に施されている。19~22は陶器である。19は蓋であり、端部に目土が付着する。20は壺の口縁部である。21は瓶の口縁部片である。22は掲釉壺の口縁部である。内外面ともに叩き痕が残る。

これらの遺物からこの井戸遺構の年代は13世紀後半から14世紀前半頃を考えることができよ



Ph. 60 217号遺構検出状況（南から）



Ph. 61 217号遺構井筒検出状況（西から）

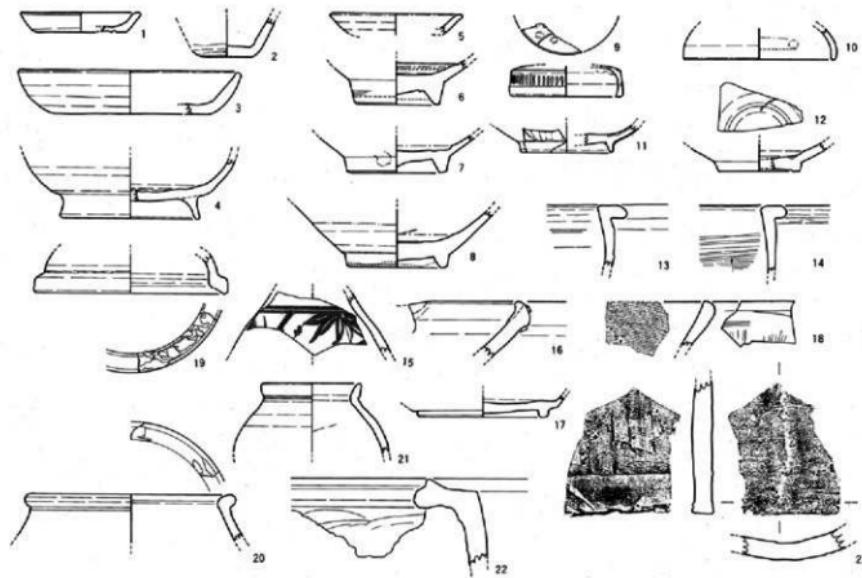


Fig. 57 217号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

219号遺構

調査区中央部南側で検出した井戸遺構で、082号遺構と217号遺構に切られ、全体の平面形は分からぬ。掘方として検出できたのは、直径2.6mの半円部分だけであった。周辺が崩壊する危険性があったため、完掘はしていない。標高1.6m付近まで掘り下げたが井側の検出はなかった。

Fig.59に出土遺物の一部を示した。1、2は青磁である。1は小碗である。外面には櫛文入りの蓮弁文を施し内面には竈と櫛で曲線文を施す。2は碗である。いわゆる龍泉窯系青磁である。蓮弁文を施す。3、4は青白磁である。3は印花唐草陽刻文を施す。4は合子蓋である。5～7は陶器である。5は黄釉広縁盤である。口縁部には目土が付着し口縁の上下に肌土の塊をおいて重ね焼きする。6は黄釉細縁盤である。外面は口縁下から露胎とする。7は鉢である。8は瓦である。平瓦の小片である。これらの遺物から13世紀後半から14世紀前半代の年代を考えることができる。

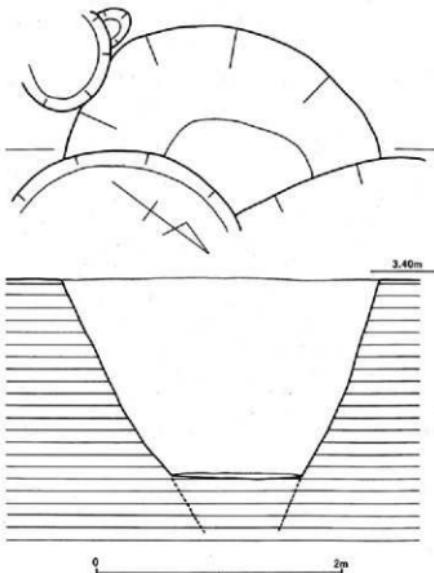


Fig. 58 219号遺構実測図 (S=1/40)



Ph. 62 219号遺構検出状況（南東から）

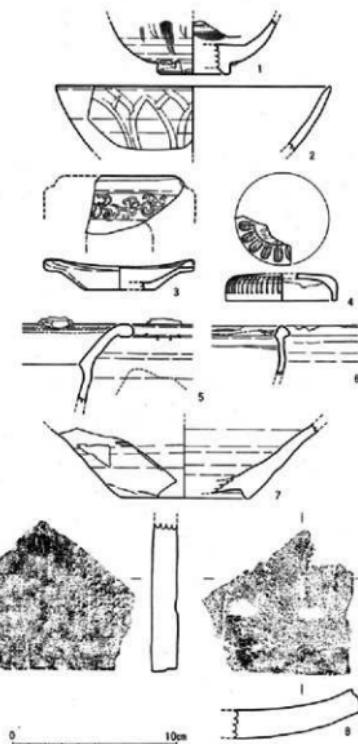


Fig. 59 219号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

236号遺構

調査区南側中央で検出した井戸遺構である。掘方は長径が2.8m、短径が2.3mを測る橢円形である。掘方に対してやや北側に片寄る井側は桶を用いているが、遺存状態がわるく枚数は確認できなかった。板材は腐食しており、幅・長さは観察できない。井側下の標高1m付近で砂層から湧水を確認した。

Fig.61、62、63に出土遺物を示した。Fig.61-1～9は土器である。1～6は皿である。1～5糸切り調整された底部をもつ。7～9は壺である。底部は糸切りされ内面はナデ調整される。10は瓦器焼である。桶类型瓦器焼の特徴である密な範磨きを施す。11～17は青磁である。11～13、17は碗である。外面には鏽斑を施す。18は底部高台内に梅花文を墨書きで施す。14は壺である。15は皿である。16は盤である。18は越州窯系青磁の平高台碗である。内外面に白化粧を施す。内面には目跡がみられる。19は李朝粉青沙器の壺である。外面には象嵌で文様が施され、その上から釉がかけられる。

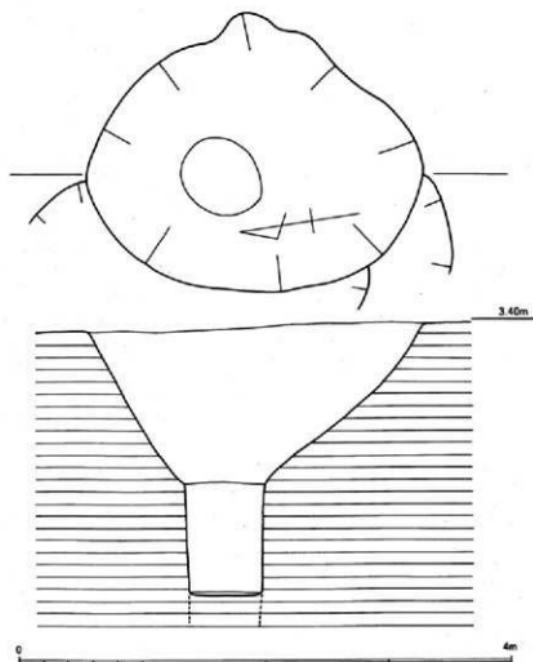


Fig. 60 236号遺構実測図 (S=1/40)



Ph. 63 236号遺構検出状況（南東から）



Ph. 64 236号遺構井筒検出状況（南から）

Fig.61—20～22、28は白磁である。20は口ハゲ皿である。体部中程から露胎とする。21は平皿である。底部の釉を拭き取り露胎とする。22は皿である。口縁部の釉を拭き取って口ハゲとする。28は瓶である。外底部から露胎とする。23、24、25～27は青白磁である。23は碗である。小片であるが、蓮弁を施す。24は合子身である。造りはあまり丁寧ではない。25は皿である。底部を露胎とし、内面には鶴描文を施す。26は梅瓶蓋である。型造りで上面には陽刻印文を施す。27は小碗である。型造りで口ハゲとし、内面に花鳥文を施す。

Fig.62—29は常滑焼の壺である。小片であるが、自然釉がかかる。34は灰釉陶器の桙である。いわゆる山茶桙である。ナデ成形された体部を糸切りし高台を貼り付ける。36は土師質土器の鍋である。口縁部上に縄目文様をめぐらす。30～33、35、37～43は輸入陶器である。30は黄釉盤である。体部内面を施釉する。31は壺の口縁部片である。叩き痕が残る。32は鉢の口縁部である。小片で全体の器形はよく分からぬ。33は無釉四耳壺である。自然釉が薄くかかる。35は瓶の底部片である。釉調は暗

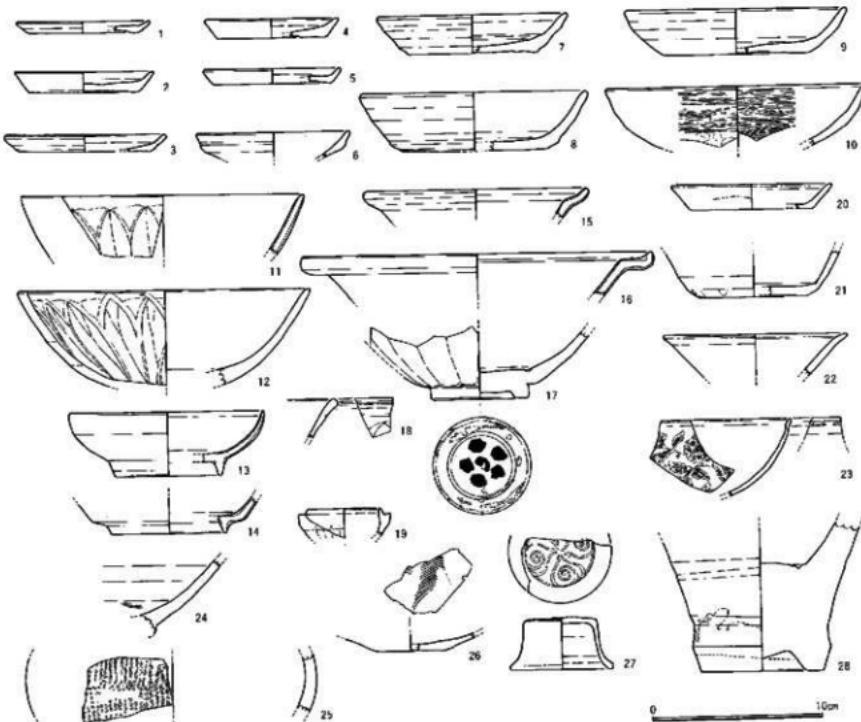


Fig.61 236号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

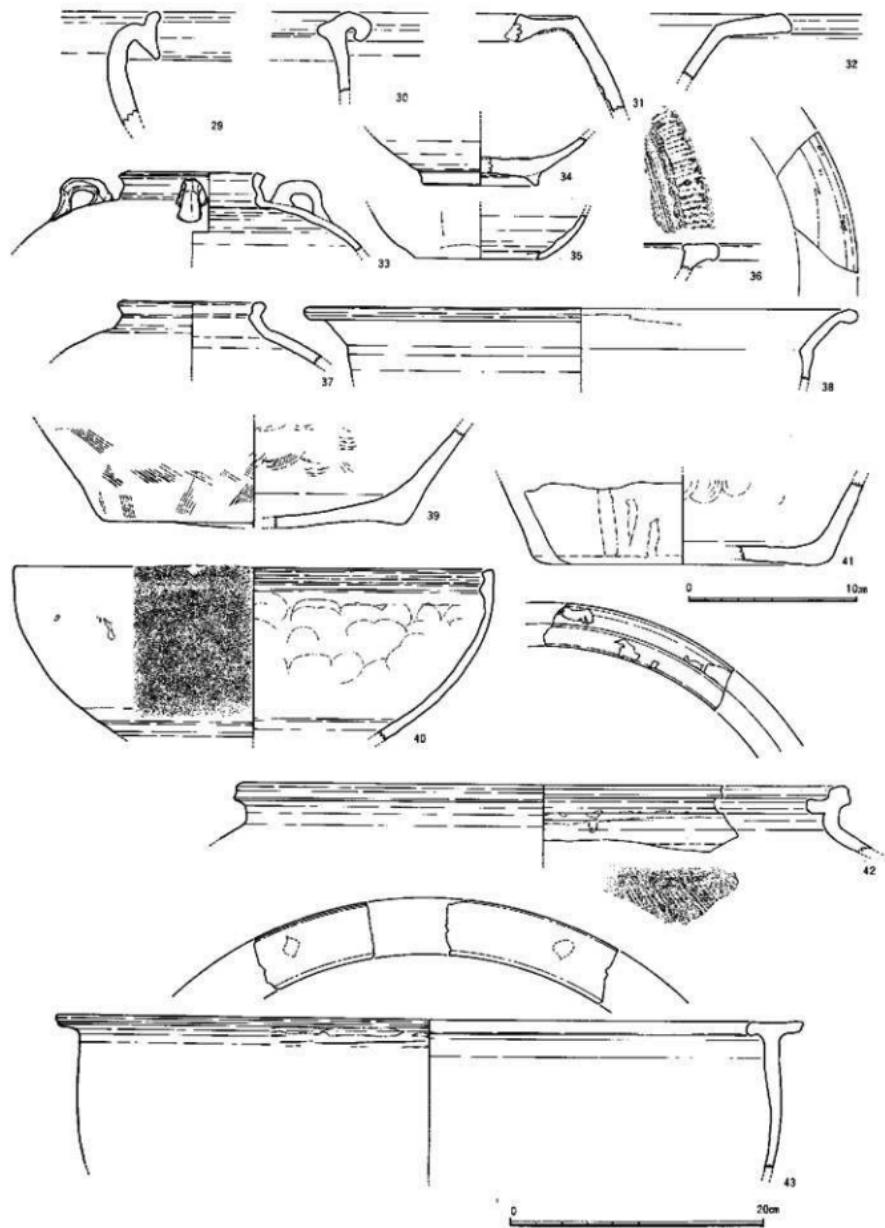
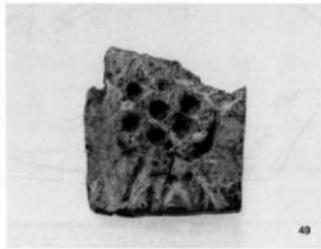


Fig. 62 236号墓出土遗物实测图 (S=1/3 • 1/4)

褐色を呈する。37は壺の口縁部片である。焼成は不良である。38は黄釉の盤である。外面は口縁部下から露胎となる。39は壺の底部片である。内外面とも叩き痕がよく残る。底部の釉は搔き取られ薄い。40は捏ね鉢である。外面には叩きを施したあとナデ調整を加える。内面には丸い當て具の跡が全面に残る。41は壺の底部片である。内面に叩きの當て具痕が残る。42、43は壺の口縁部片である。

Fig.63-44~47は天目茶碗である。44は口径12.6cmを測り、外面中程から露胎とする。釉調は黒褐色から暗茶褐色を呈する。外面露胎部の色調は暗灰褐色を呈する。45は口径12.6cmを測る。釉調は刻褐色でわずかに禾目になる。46は口縁部の小片である。釉調はほぼ黒色で、口縁部のみ茶色となる。47は底部片である。削り高台は露胎となり、施釉された部位の釉は比較的薄く施される。48は瓦片である。平瓦の小片であり内面には布目が残る。色調は暗灰色から灰黒色を呈する。49、50は滑石製品である。49はスタンプの一部であるが、破片であり全体の文様は分からぬ。50は温石片である。全体的に被熱し煤が付着し黒くなる。全面に工具の加工痕が明瞭に残る。51は石製品である。小片であり、全体の形状は把握できないが、硯の底部片と考えられる。破面は黒褐色で、加工面はよく研磨され暗赤褐色を呈する。

これらの遺物の他には石鍋片、砥石、骨加工品、鉄釘等が出土した。遺物からこの遺構の年代は13世紀後半を考えて大過ないものと思われる。



49

Ph. 65 236号遺構出土遺物

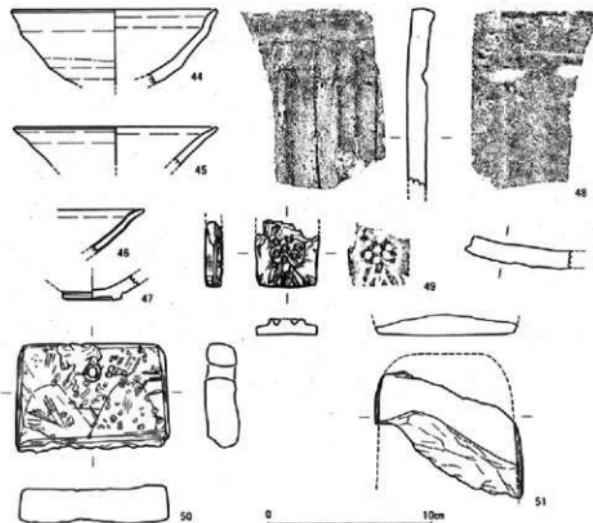


Fig. 63 236号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

237号遺構

調査区南側の矢板際で検出した遺構である。調査区外に広がるため正確な平面形は捉えられない。現況で直径1m程度の土坑となる。土坑内北側で人骨頭骸部が出土した。出土状況から埋葬されたものとは考えにくく、砂層中に埋葬されていた人骨を土坑掘削中に掘り出してしまい、再埋葬したものと考えられる。人骨の遺存状態はあまり良くない。下頸骨ではなく、頭骸部は土圧で歪む。性別、年令は分からなかった。こり人骨の年代は土坑の年代である12世紀後半より遙かが正確な時期は分からない。

Fig.65、66に出土遺物を示す。1～7は土器器である。1～3は皿である。1、2の底部は糸切り調整され、3の底部はヘラ切りされ板目圧痕を加える。口径は7.6cm～9.6cmを測る。4～7は杯である。4～6はヘラ切りした底部をもち、7の底部は糸切りとする。8は瓦器碗の口縁部である。内外面に幅3のヘラ磨きを丁寧に施す。9～14は白磁である。9～12、14は碗である。9は体部中程まで施釉する。口径は15.4cmを測る。10、11は尖った口縁部をもち、口径は17cm、16.2cmを測る。

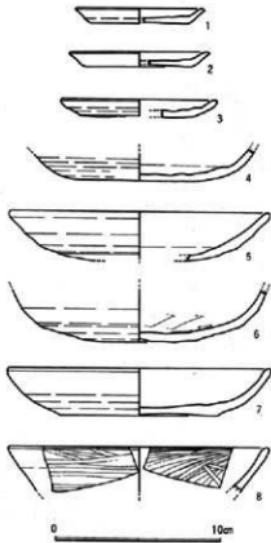


Fig. 65 237号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

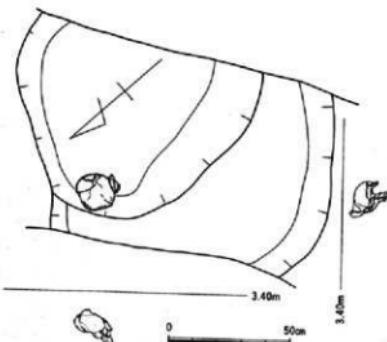


Fig. 64 237号遺構実測図 (S=1/20)



Ph. 66 237号遺構検出状況（西から）



Ph. 67 人骨検出状況（南西から）

12は玉縁状口縁をもつ碗である。口径は15.6cmを測る。14は碗の底部片である。外底部から高台内まで露胎とする。内底部には描文を片刃彫で施している。底径は6cmを測る。13は皿である。口径は14cmを測る。15は越州窯系青磁の皿である。オリーブ色の透明釉を全面に施す。豊付は釉を削り取り露胎とする。見込み内には目跡は観察されないが、豊付から高台内には目土と珪砂が付着する。この他には須恵器同安窯系青磁、滑石製品、陶器などが出土している。これらより遣構の年代として12世紀後半が考えられる。

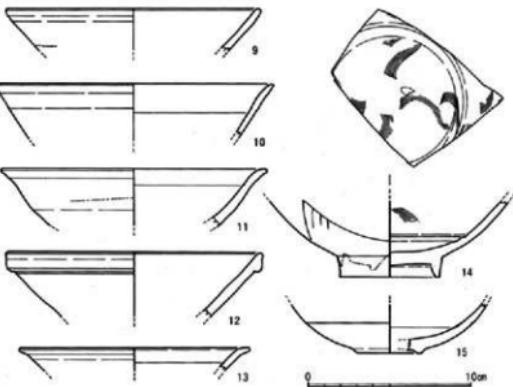


Fig. 66 237号遣構出土遺物実測図 (S=1/3)

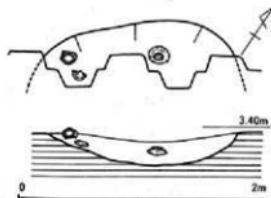


Fig. 67 242号遣構実測図 (S=1/40)

242号遣構

調査区南側で検出した遣構である。遣構の一部が調査区内にかかるのみで、平面形は捉えられない。本来は橢円形を呈する土坑と考えられる。遣構の壁に張り付くように遺物が検出された。矢板打込み工事で原位置は保っていないものと考えられる。Fig.68に出土遺物を示した。

1～3は土師器である。1は皿である。底部はヘラ切りされ板目压痕を加える。全体はナデ成形される。口径は10.2cmを測り、底径は7.65cm、器高は13mmを測る。2は壺である。底部は回転糸切り調整され板目压痕を加える。体部はコテアテ成形される。口径は15.5～15.7cm、底径は7.3～7.5cm、器高は34mmを測る。豊前地方からの搬入品か。3は碗の底部片である。高台部は体部をヘラ切りした後貼り付けられナデ調整が施される。内底部はナデ成形されたあと研磨されている。高台径は7.7cmを測る。色調は淡褐色を呈する。4は須恵器の蓋である。口径は13.8cm、器高は4.5cmを測る。色調は全体に青味を帯びた濃灰色で焼成は良好である。これらの遺物から遣構の年代として12世紀後半を考えることができよう。



Fig. 69 242号遣構出土遺物



Ph. 68 242号遣構検出状況 (北から)

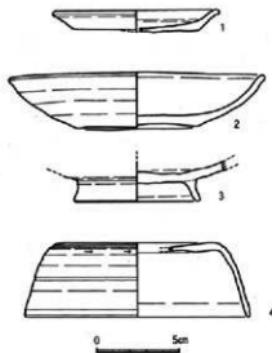


Fig. 68 242号遣構出土遺物実測図 (S=1/3)

250号遺構

調査区南側で検出した井戸遺構である。長径推定3m、短径2.5mの楕円形の井戸である。北側が調査区外になり、南側は他の井戸に搅乱されているため、正確な平面形は分からぬ。井戸は北側に片寄って据えられていたと考えられる。井戸にはおそらく桶が用いていたと考えられるが腐食していて遺存していない。

Fig.70, 71に出土物の一部を図示する。

1は土師器である。椀の体部片である。復元径は15.4cmを測り、ナデ成形され内面には磨き痕が観察されるが、単位・方向は分からぬ。色調はにぶい褐色を呈し、焼成は不良である。2～5は白磁である。2は高台付皿である。高台部は削りだしで露胎となる。見込みに細い沈線を施す。3は碗である。口縁部の釉を拭き取った、いわゆる口ハゲ碗である。4は碗の底部片である。外底部まで施釉している。5は皿である。口径は10.4cmを測り、体部下半部を露胎とする。6は龍泉窯系青磁の碗である。体部外面には鎬蓮弁文を施し、外底部から高台内を露胎とする。口径15.7cm、底径5.6cm、器高6.6cmを測る。7、8、9は輸入陶器である。7は壺の口縁部片である。釉調は外面で緑がかった黒褐色で、内面では濃オリーブ色を呈する。口径は11.8cmを測る。8も壺の口縁部片である。口径は11.6cmを測る。外面のみ施釉する。

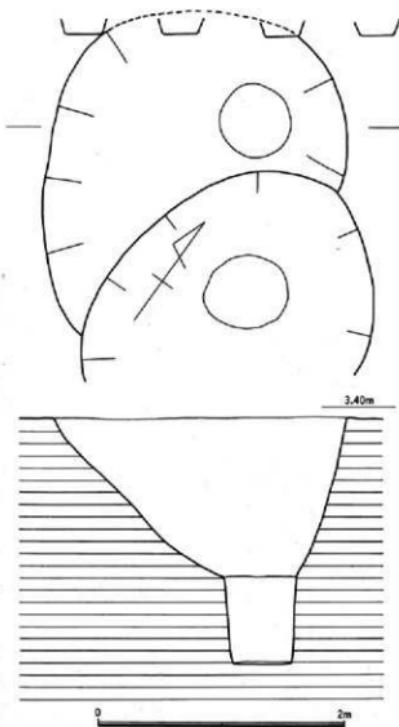


Fig. 69 250号遺構実測図 (S=1/40)

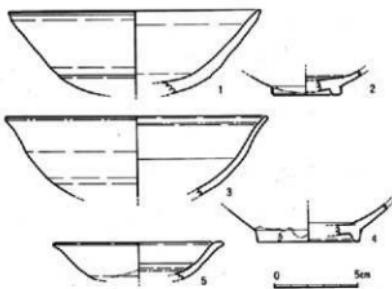


Fig. 70 250号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)



Fig. 71 250号遺構検出状況 (南東から)

9は鉢の体部片である。外面には指押さえの痕跡がよく残る。10は東播系須恵器の捏鉢である。復元径は30.8cmを測る。11は瓦である。平瓦の小片であり、紐状の布目が観察される。これらの遺物からこの井戸遺構の年代は13世紀代と考えることができる。

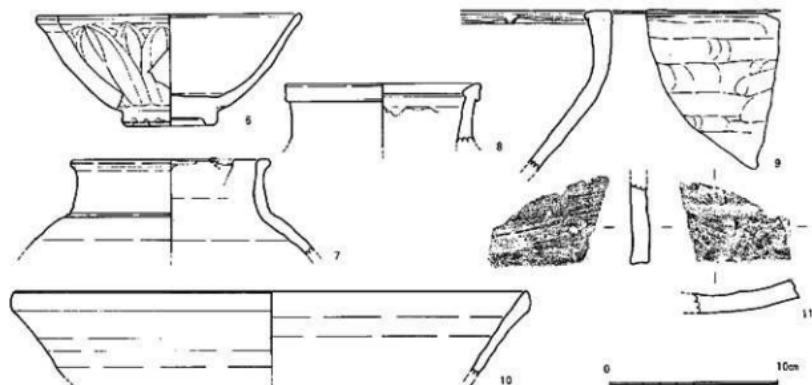


Fig. 71 250号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

255号遺構

調査区北側で検出した長方形の土坑である。底部に段を有する。Fig.73に出土遺物を示す。1、2は須恵器である。1は蓋であり、口径は15.7cmを測る。2は蓋の摘み部片である。小片であり全体の法量は分からず。3は土師質土器の先の口縁部片である。内面にはハケメ調整、外側には叩きが施される。これらの遺物から遺構の年代として8世紀後半をあてることができよう。

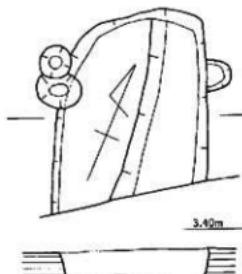


Fig. 72 255号遺構実測図 (S=1/40)

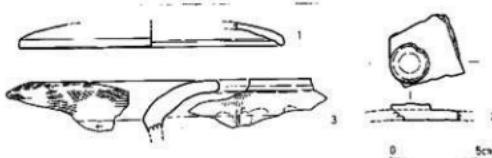


Fig. 73 255号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

259号遺構

調査区北側で検出した遺構である。長径1m短径80cmの梢円形の土坑である。検出面からの深さは25cmを測る。本米は砂丘面上で検出されるべき遺構であろうが、掘方は検出できず確認のため掘り下げを行った結果、検出し調査した。Fig.75に出上遺物を示す。

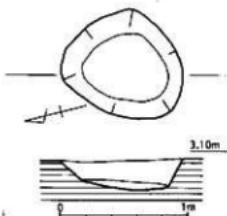


Fig. 74 259号遺構実測図 (S=1/40)

1は須恵器の壺の体部片である。復元底径は11cmを測り、底部はヘラ切りとする。外面下部に墨書があるが、断片であり判読できない。色調は濃灰色を呈す。この他に須恵器蓋が出土する。これらより9世紀初頭の年代を考えることができよう。



Fig. 75 259号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

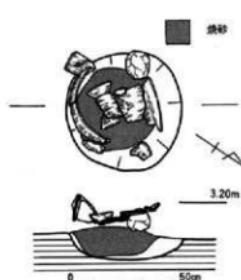


Fig. 76 263号遺構実測図 (S=1/20)

た。焼砂はかたくしまっており、土坑内のみ検出された。土師器の壺は立った状態で検出され、その内側に甕と壺の破片が倒れ込んだ状態で検出された。Fig.77に出土遺物を示す。1～3、5は土師器である。1は壺の口縁部片である。復元径は20.4cmを測り外面にはハケメ調整とナデ調整、内面にはヘラ削りと指ナデ調整を施す。器壁は厚く全体的に造りは粗い。2は甕である。復元径は27.8cmを測る。外面には口縁部から頸部まで煤が厚く付着する。3は壺である。底部には板目圧痕がみられ、復元径は12.2cmを測る。5は壺型土器である。焼成は良好で造りは良く外面には縦位のハ

263号遺構

調査区南側、233・234号遺構下で検出した住居遺構である。壺は住居に伴う遺構であり、第5面とした砂丘面からやや掘り下げたところで検出した。住居の掘方は一部が検出されたのみで、全体の正確な平面形は捉えられない。住居の壁は約20cm程の立ち上がりをもつが、上部は削平されたと考えられる。壺遺構の下には赤変化した砂が10cm程堆積している。



Ph. 71 263号遺構検出状況 (北東から)



Ph. 72 263号遺構検出状況 (南西から)



2

Ph. 74 263号遺構出土遺物



Ph. 73 263号遺構検出状況 (南東から)

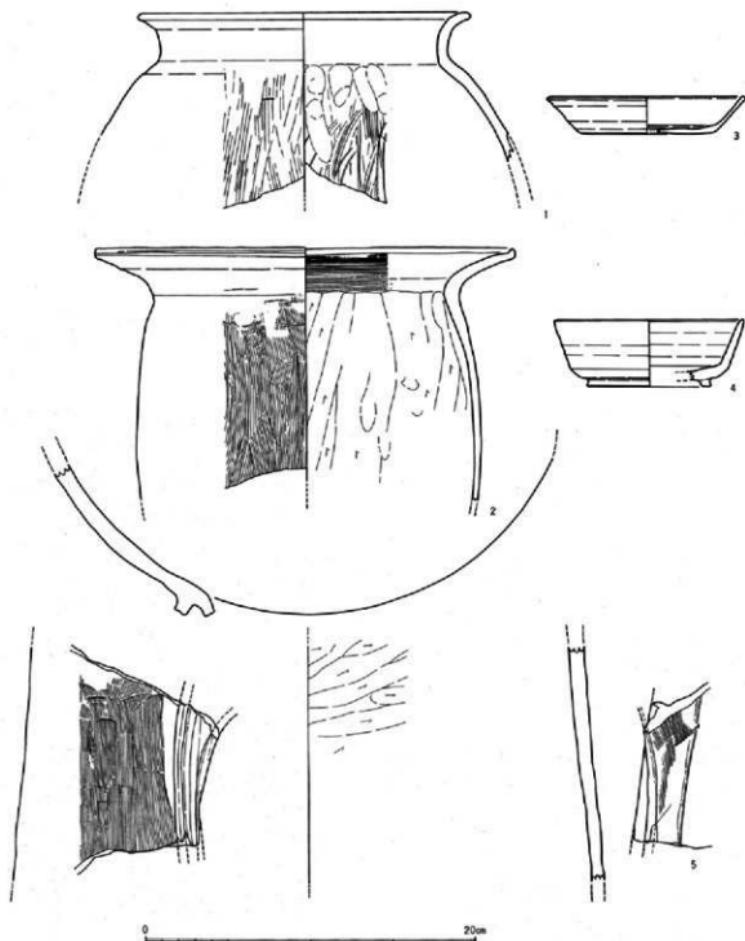
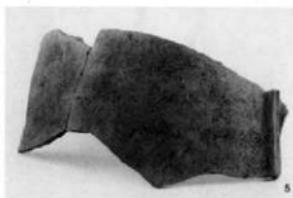


Fig. 77 263号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)



Ph. 75 263号遺構出土遺物

ケメ調整、内面には削りとナデ調整を施す。造りは精緻であり、色調は赤褐色から灰褐色を呈する。4は須恵器の高台付坏である。口径は11.6cm、高台径は7.6cm、器高4.1cmを測り高台部は貼り付け後にナデ調整を施す。これらの遺物からこの住居遺構の年代は8世紀代を考えることができる。

264号遺構

調査区南側で検出した井戸遺構である。掘方は3.2~3.5mの円形である。掘方にたいし、やや南東側に片寄って石積の井側が検出された。石積は一段のみで標高2.4m~2.5m付近で井側を一周するように検出したが、下部では検出されなかった。

Fig.79、80に出土遺物を示した。

1、2は土器器である。1は皿であり底部は糸切り調整され板口圧痕がみられる。2は杯である。復元径は18cmを測り、底部は糸切りする。内面に磨きを施す。3は白磁の口ハゲ皿である。4、5は青磁の皿である。4は外面に浅い片切形を施す。6、7は青白磁である。6は口ハゲの小碗である。7は合子身である。8~10は輸入陶器である。8は壺の口縁部片である。9も壺の口縁部片で端部に白砂が付着する。10は黄釉盤の口縁部片である。口縁端部を露胎とする。11、12は瓦質土器での捕鉢である。13は瓦である。平瓦の小片である。14は石製品である。石鍋の再加工品である。この他に李朝白磁上師器鍋などが出土している。

これらの遺物からこの井戸遺構の年代は15世紀代を考えることができる。

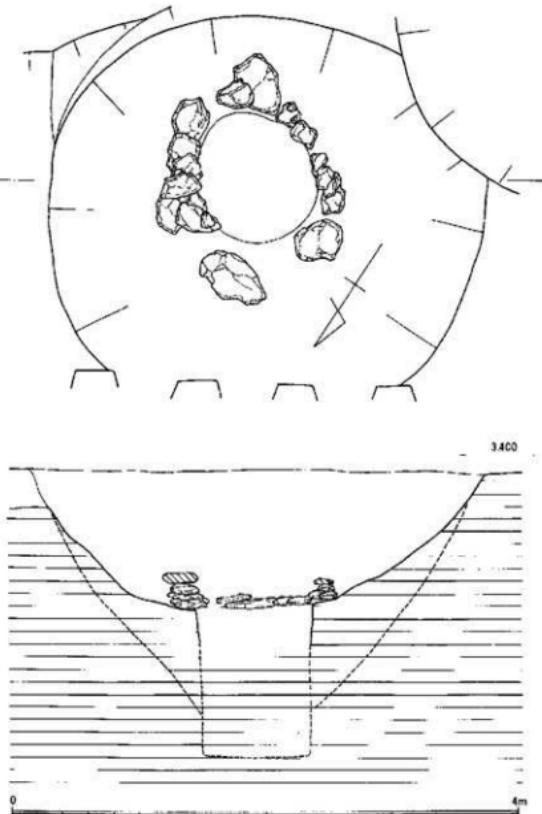


Fig. 78 264号遺構実測図 (S=1/40)

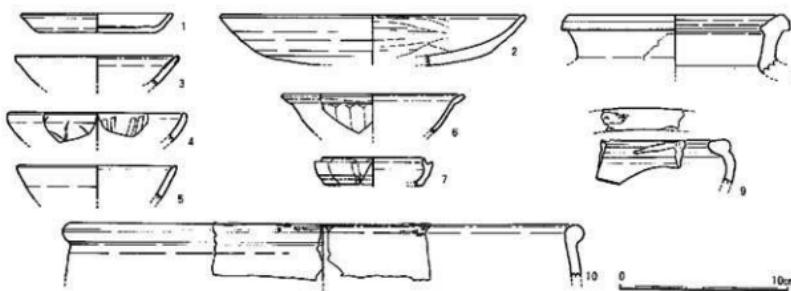


Fig. 79 264号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

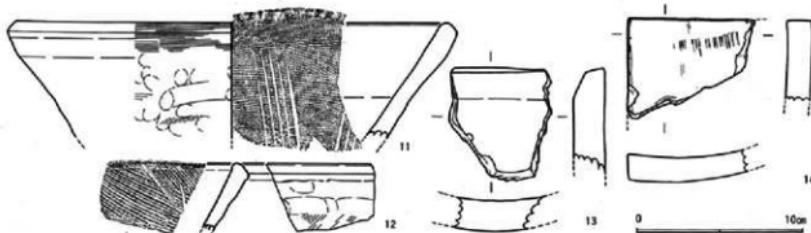


Fig. 80 264号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

265号遺構

調査区南側、242号遺構下・264号遺構東南側で検出した井戸遺構である。南側は調査区外になり一部のみ調査を行った。現況では直径約4mの円形の掘方をもつと推定される。標高2mまでは掘り下げを行ったが井側は検出されなかった。掘方から推測して井側は調査区外に位置すると思われる。覆土は暗褐色砂であった。Fig. 82に出土遺物の一部を図示する。1、2は土師器である。1は壺である。復元径15.8cmを測り、底部はヘラ切りとする。2は高台壺の底部片である。底径は7cmを測る。これらの遺物からこの井戸遺構の年代は9世紀から10世紀代が考えられる。



Ph. 76 265号遺構検出状況（南東から）

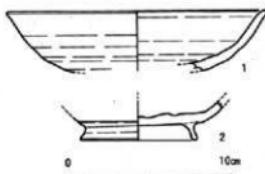


Fig. 82 265号遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

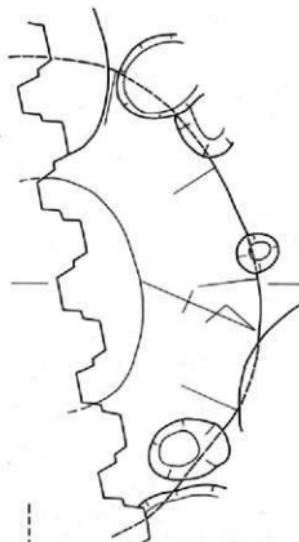
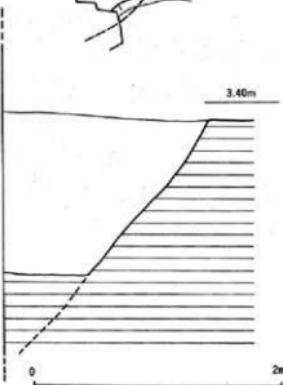


Fig. 81 265号遺構実測図 (S=1/40)



(6) その他の出土遺物

これまでに触れられなかった遺物のうち、重要と思われるものについて、簡単に紹介する。出土遺構・層位については図中に示す。

Fig.84-1、2は青磁である。1は菊皿で10枚が倒立の入れ子状態で一括出土した。口径は12.4~13cm、底径5.4~5.9cm、器高2.8~3.5cmを測る。型打ち成形され縁付のみ釉を削り露胎とする。釉調は青緑色で半透明である。2は糸瓜形花生である。片側ずつ型打ち成形し貼り合わせる。口縁部下に壁掛け用の穿孔が施される。釉調は透明な青緑色である。1、2共に景德鎮のもとのと考えられる。

Fig.85-3~8は土師器である。3~5、7は皿である。3は手捏ね成形

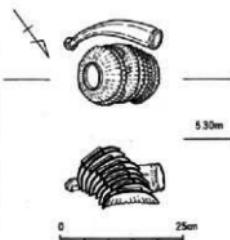


Fig. 83 出土状況実測図(S=1/10)



Ph. 77 遺物出土状況（西から）



Ph. 78 遺物出土状況（北から）



Ph. 79 遺物出土状況（南から）

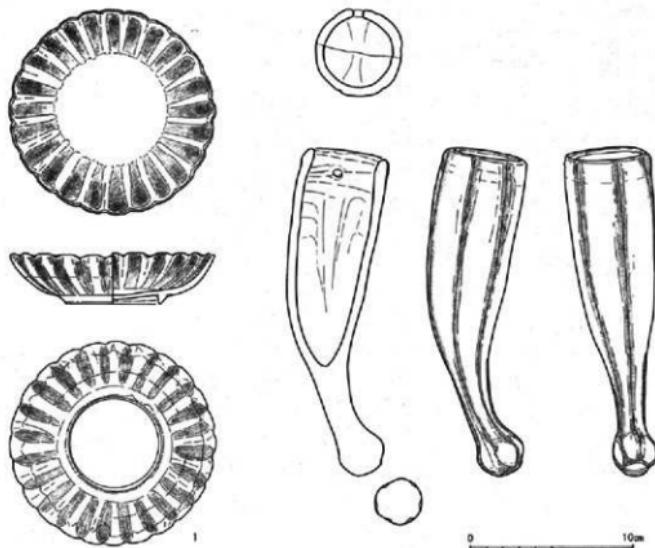
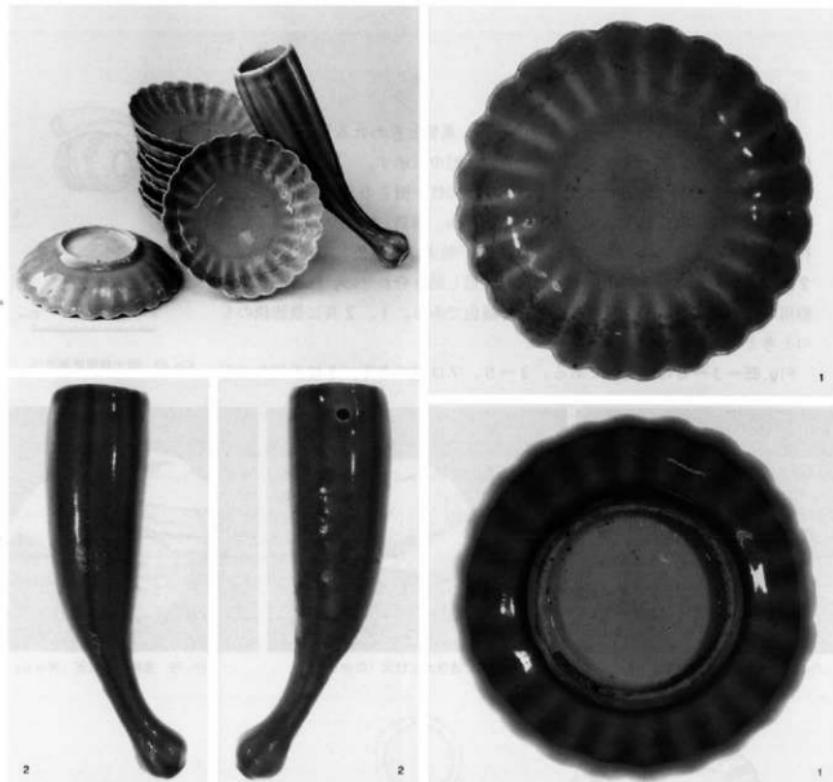


Fig. 84 その他の出土遺物(S=1/3)



Ph. 80 包含層出土遺物（縮尺不同）

される。4は京都系土師器のいわゆるヘソ皿である。焼成は良好で、胎土は淡褐色でナデ調整が施される。6は早島式の土師器椀で、底部付近に指押さえの痕跡が残る。7は壺の口縁部片である。

8は黒色土器の高台付皿である。内面に炭素を吸着させた内黒土器である。Fig.85-10は瓦器椀である。外面には指押さえの痕跡が明瞭に残り、内面にはヘラ磨きが施される。特徴から和泉形瓦器椀と思われる。11、13は緑釉陶器である。11は皿で狼投窯、13は碗で京都系である。12は灰釉陶器の碗である。14~20は須恵器である。14、19は碗である。15、18は鉢である。16、17、20は壺である。

Fig.87-21、22、27、36は白磁である。21、22は口ハゲの皿である。27は灯明皿である。底部は未調整で、口径8.2cm、底径4cm、器高3.5cmを測る。36は蓋である。

Fig.87-23~26、28~35、37~49、Fig.88-50は青白磁である。23、24は碗である。24は外面に蓮弁文、内面には蓮花唐草文を施す。25、26は口ハゲ碗である。内面に印花文を施す。28は灯火器である。29は口ハゲ碗である。30、35、39は皿の底部片である。31、34は印花菊花文鉢である。32は透彫文三足香炉である。足には獣面または浮文が施される。33は合子身である。37は花形坏である。38は印花文坏である。型造りで、牡丹文が陽印文で施される。40、43~47は梅瓶蓋である。41は小型の梅瓶蓋である。42は蓋である。48は印花八角合子蓋である。49は小型の水注である。50は梅瓶である。復元器高は28cmを測る。外面には唐子蓮花唐草文を施す。

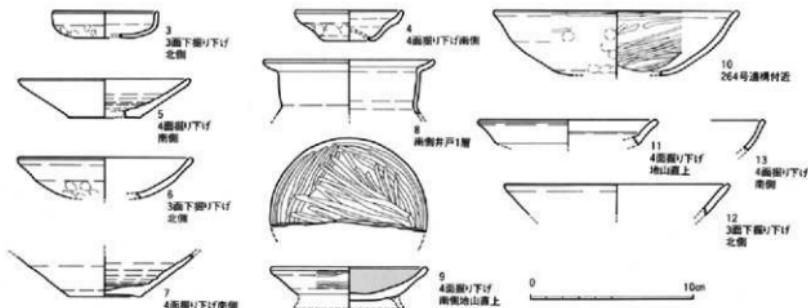
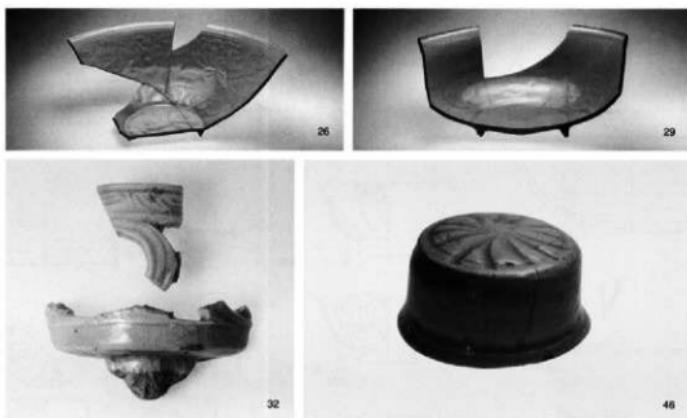


Fig. 85 その他の出土遺物 (S=1/3)



Ph. 81 その他の出土遺物 (縮尺不規)

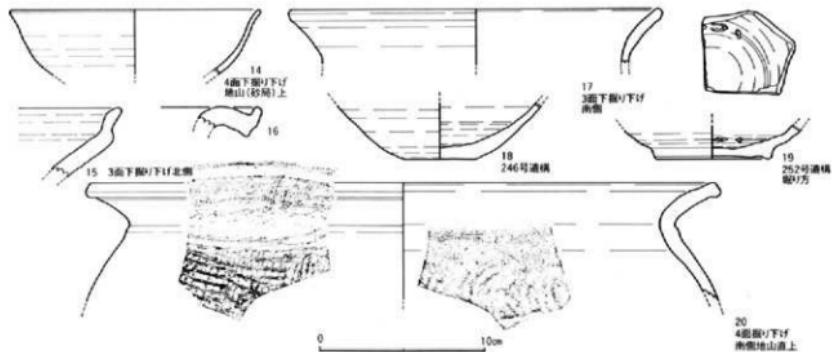


Fig. 86 その他の出土遺物 (S=1/3)

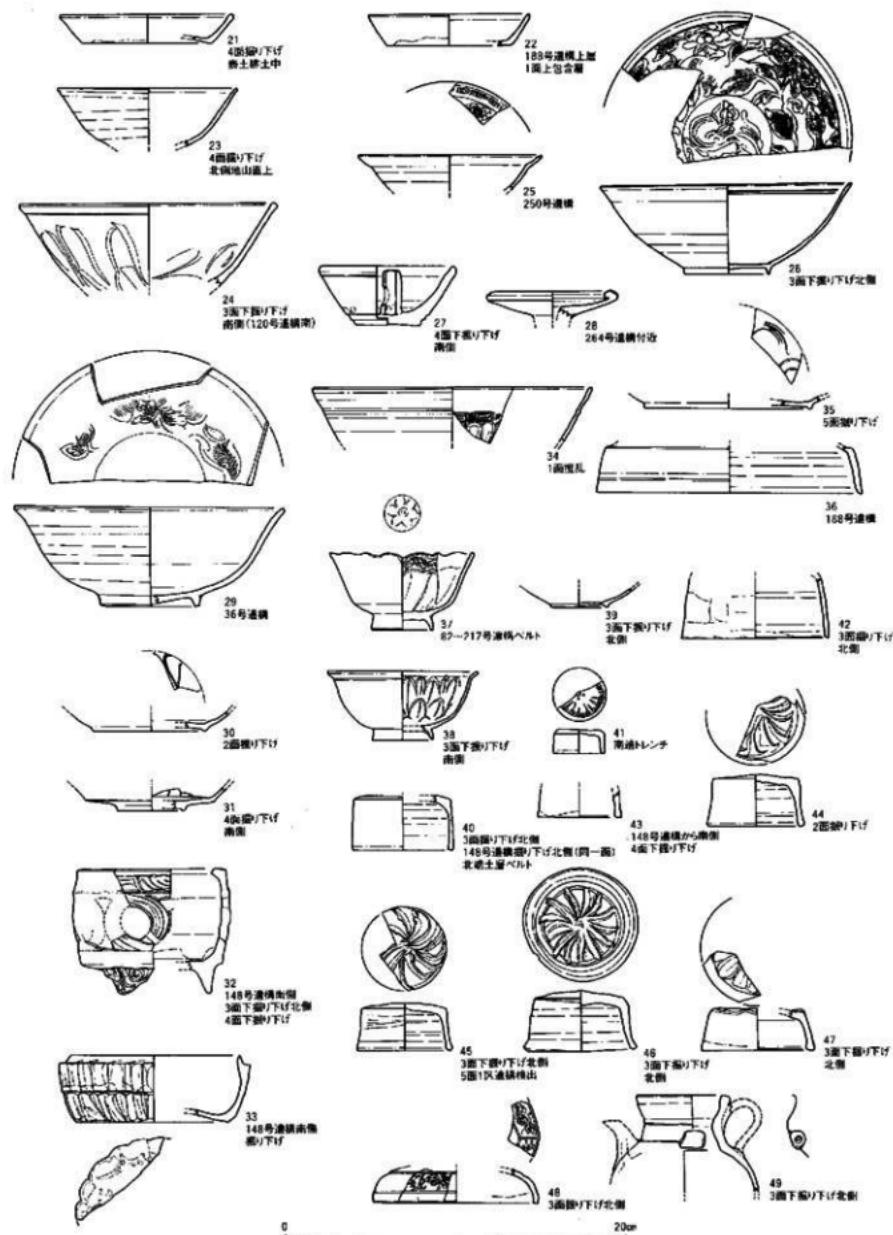


Fig. 87 その他の出土遺物(S-1/3)

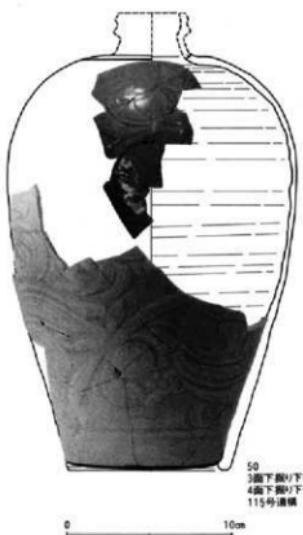
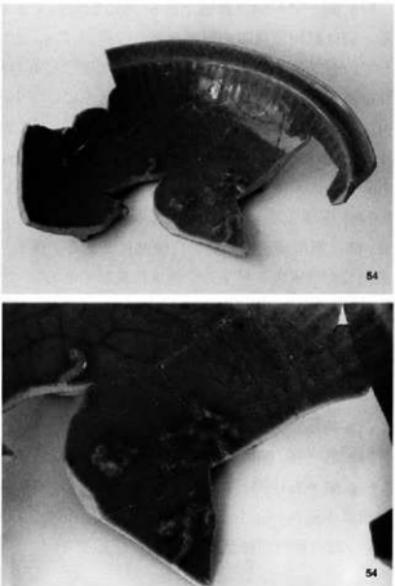


Fig. 88 その他の出土遺物 (S=1/3)



Ph. 82 その他の出土遺物 (縮尺不同)

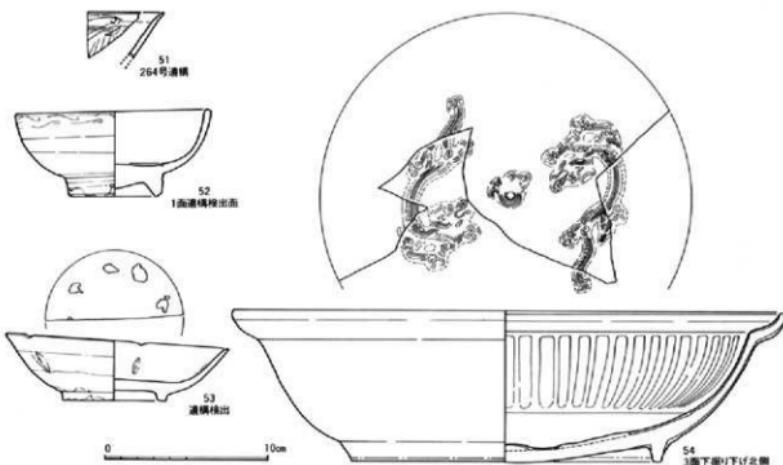


Fig. 89 その他の出土遺物 (S=1/3)

Fig.89—51～54は青磁である。51、52は碗である。51は口縁部片で外面に画花・刻花文を施している。53は越州窑青磁の皿である。口径13.7cm、底径6.3cm、器高3.7cmを測り、見込みには目土が付着している。唇付は釉を削り取り露胎でここにも目跡が残る。54は龍泉窑系青磁の盤である。体部内面には搔きおとしの蓮弁文を施し、見込みには中央に宝珠を配し、それを追う一对の龍がまわりに貼り付けられる。

Fig.90—55～59は陶器の黒褐釉碗である。いわゆる天目茶碗である。60～62は陶器の褐釉小壺である。外面の所々に鉄粉が吹き付けられている。63、64は李朝白磁の碗である。64は口径12.8cm、底径5.2cm、器高3.9cmを測り、体部中程まで施釉する。見込みには胎十目が付着し重ね焼したことが分かる。65は朝鮮須恵器の壺の口縁部片である。復元径は32.2cmを測る。胎土の色調は赤褐色で、外面は銀化した暗灰色を呈する。焼成は良好である。

Fig.91—66～75は瀬戸焼である。66、67は灰釉の瓶子である。67は体部外面に印花文を施す。68は大口茶碗である。69は華瓶である。底部は糸切りし、釉調は黒色を呈する。二次的に被熱しており、本来は透明であった釉は半透明で表面は荒れている。70は皿の底部片である。これも被熱し表面が荒れている。72、73は灰釉の壺である。71、74、75は鉢皿である。71は底部片であるが、脚目がよく残る。底部は回転糸切りとする。

Fig.91—76、80は瓦質土器である。76は鉢である。内面に搔目が残る。80は壺の口縁部片である。

Fig.91—77、78、79、82は備前焼である。77、78は壺の口縁部片である。77は復元径17.2cmを測り色調は赤褐色から小豆色を呈する。79は鉢鉢である。色調は明赤褐色で焼成はあくまで焼きしまっていない。82は壺の口縁部片である。

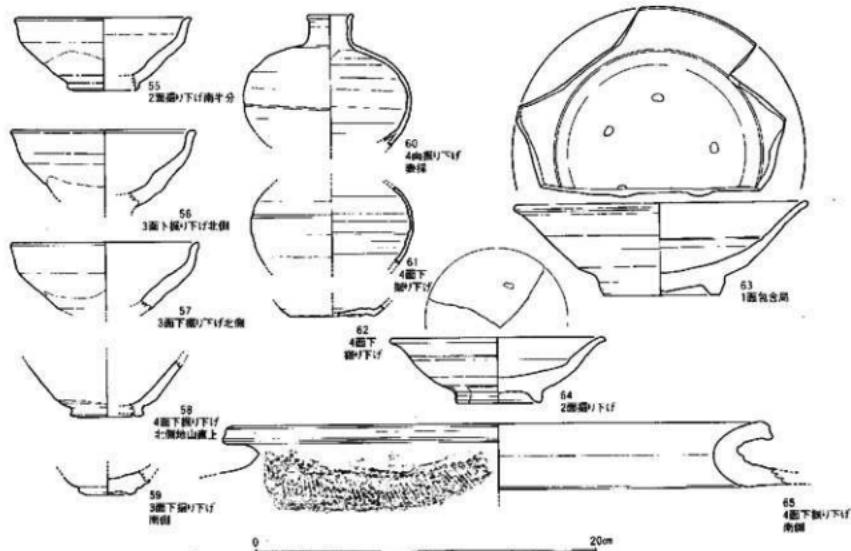


Fig.90 その他の出土遺物(S=1/3)

Fig. 91-81, 83は常滑焼である。81は壺の口縁部片である。復元径は27.2cmを測り、色調は暗赤褐色を呈する。焼成は良好でよく焼しまっている。83は壺の口縁部片である。

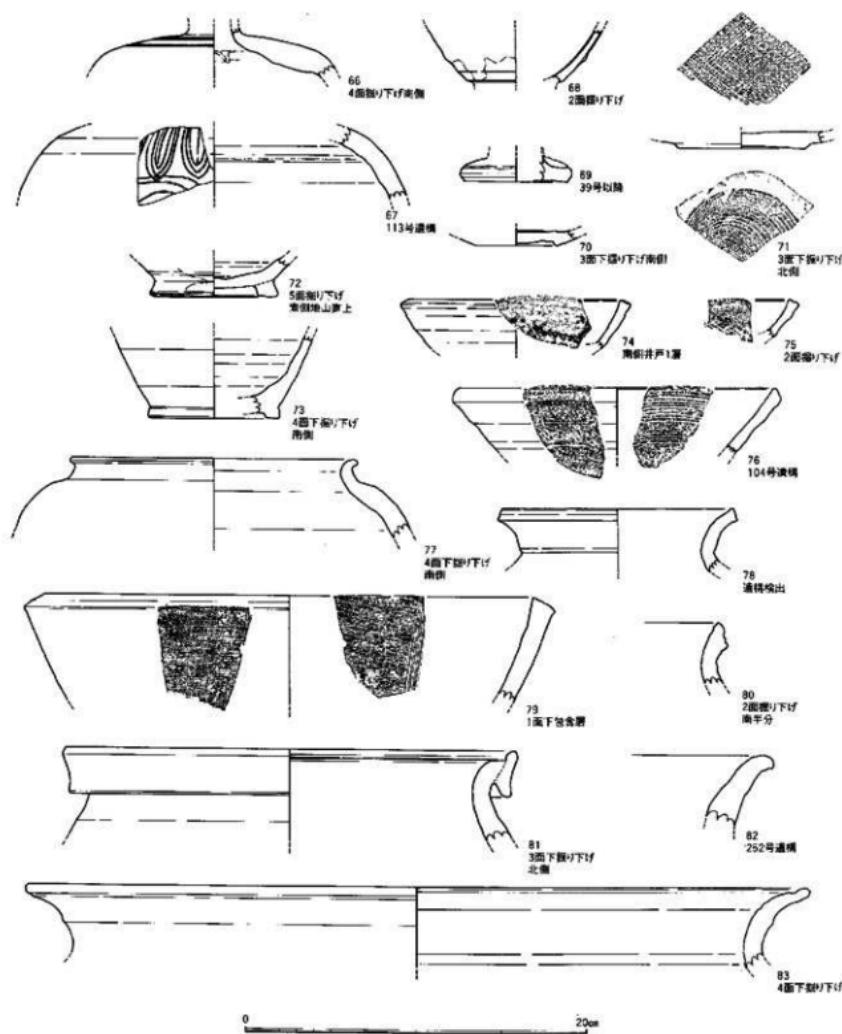


Fig. 91 その他の出土遺物 (S=1/3)

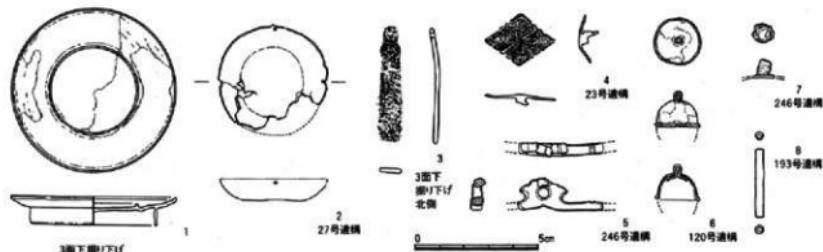
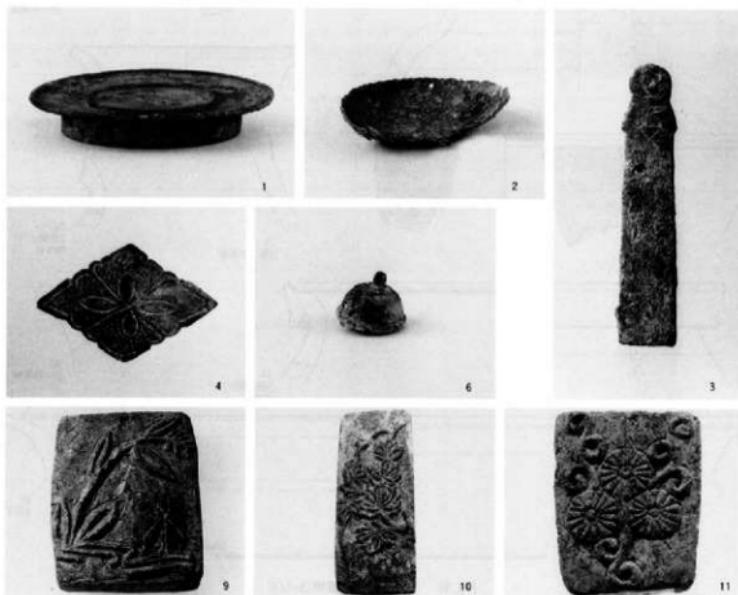


Fig. 92 その他の出土遺物 (S=1/2)

Fig.92-1は銅製皿である。仏具と考えられる。口径6.8cm、底径5.2cm、器高1.15cmを測る。全体的に鋸が付着する。2は銅製の天秤皿である。糸通しの穴が現状で3ヶ所、復元では4ヶ所に穿たれたものと考えられる。銅板を皿形に成形したもので銅は薄い。3は銅製品である。何らかの飾り具と考えられる。4は銅製の飾り金具である。裏に止め具が付くが一部欠損している。5は銅製の釣手付鍋の把手金具である。鋒上がりは良好である。6は銅製の鈴である。下部が欠失している。7はガラス製の摘みである。8は石製の管玉である。穿孔は片側で中心からずれる。

Ph.83-9、10、11は滑石製のスタンプである。



Ph.83 その他の出土遺物 (縮尺不同)

墨書き土器

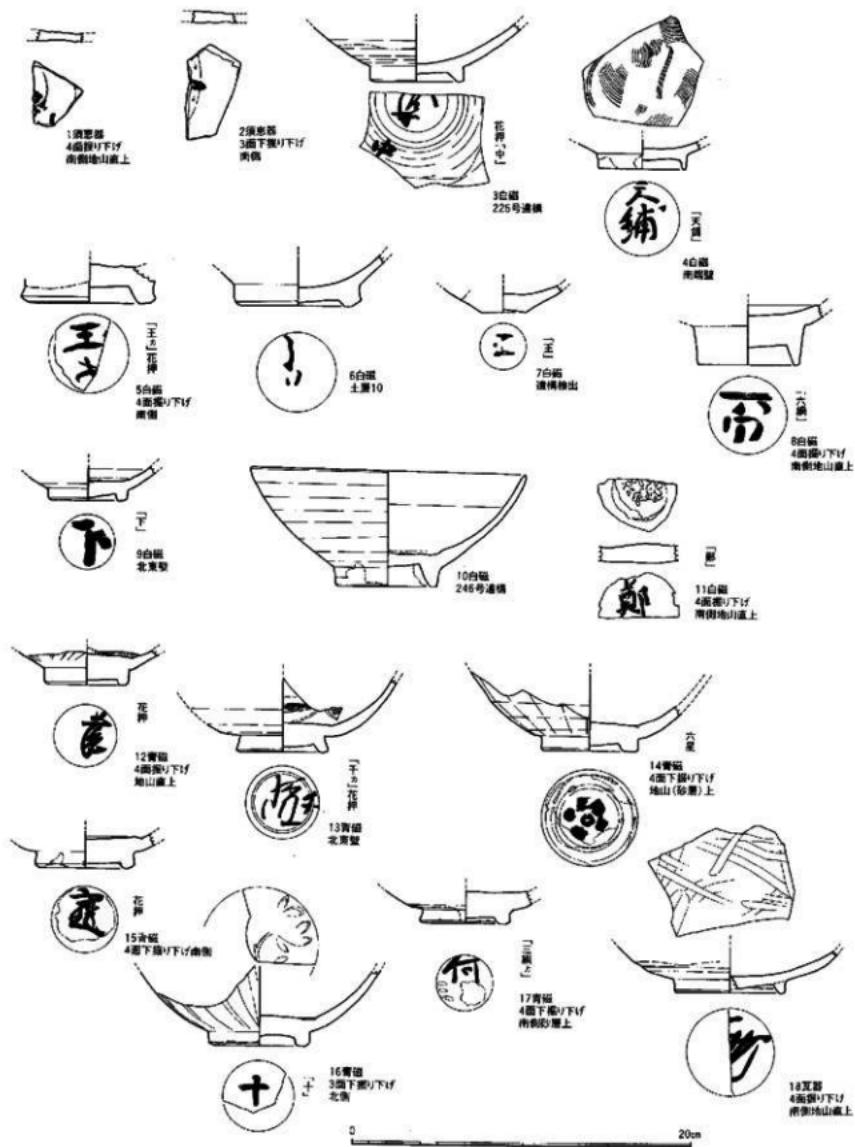
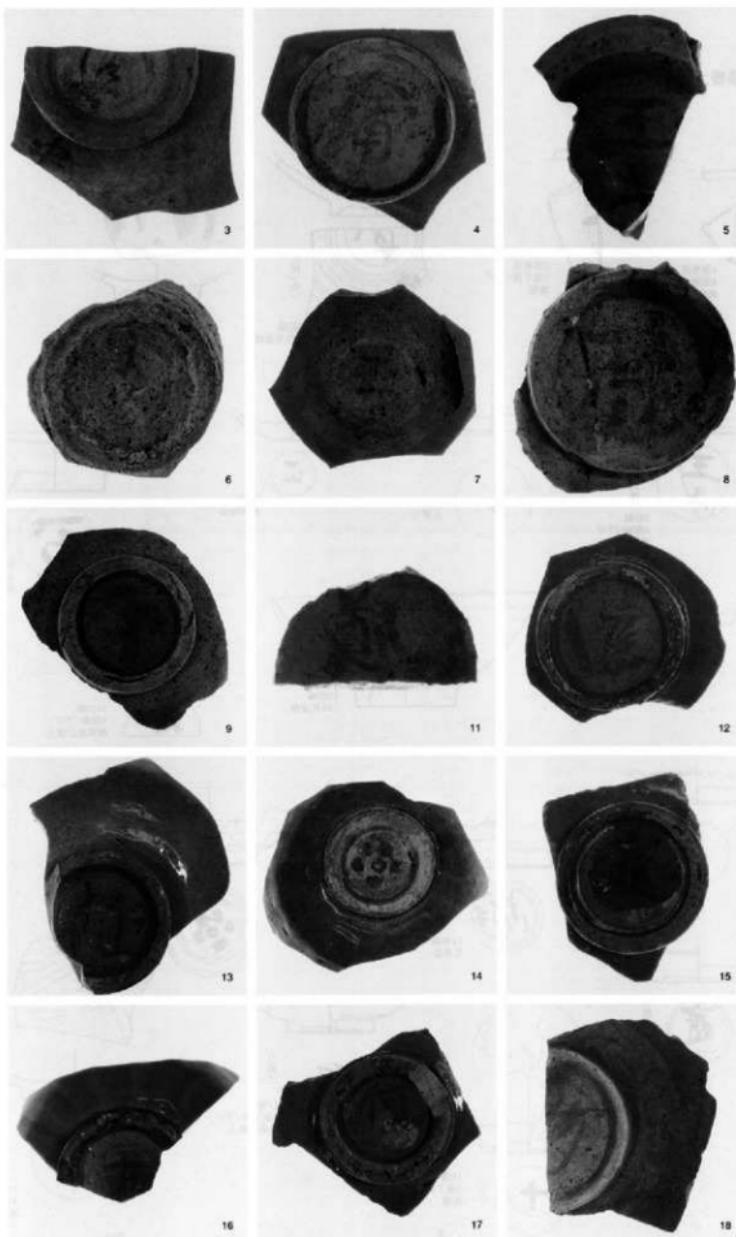


Fig. 93 その他の出土遺物・墨書き土器 (S=1/3)



Ph. 84 その他の出土遺物・墨書き器 (縮尺不同)

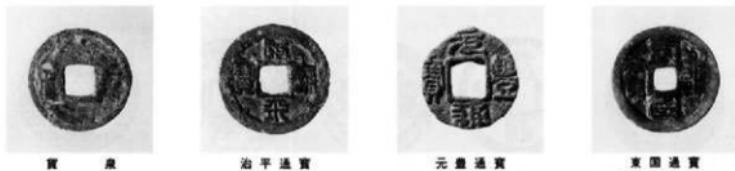
銅錢

今回の発掘調査では、130枚の銅錢が出土している。この内、58枚が北宋錢であり、44.6%を占める（ただし、模鋳錢の可能性のあるものを含む）。また、解読不能のものが59枚に上るが、この大部分は錯によるもので、摩擦によるもの、質の粗悪さによるものはほとんどない。

ところで、これらの銅錢の中には、模鋳錢と思われるものが数点含まれている。模鋳錢と判断したものは、錢径がやや小さいもの（開元通宝・元豐通宝・解讀不能錢）、錢銘のバランスが崩れているもの（太平通宝・紹聖通宝）、無文錢などである。なお、このほかにも模鋳錢が存在する可能性はあるが、識別できなかった。また、大型錢が一枚（開禧通宝折二錢）出土している。

出土状況を見ると、遺構から出土したものはわずか23枚で、17.6%にすぎない。さらに、遺構出土分・包含層出土分を含めて、縕の状態で出土した例はなく、まさに遺失錢と言うにふさわしい出土状態を示す。

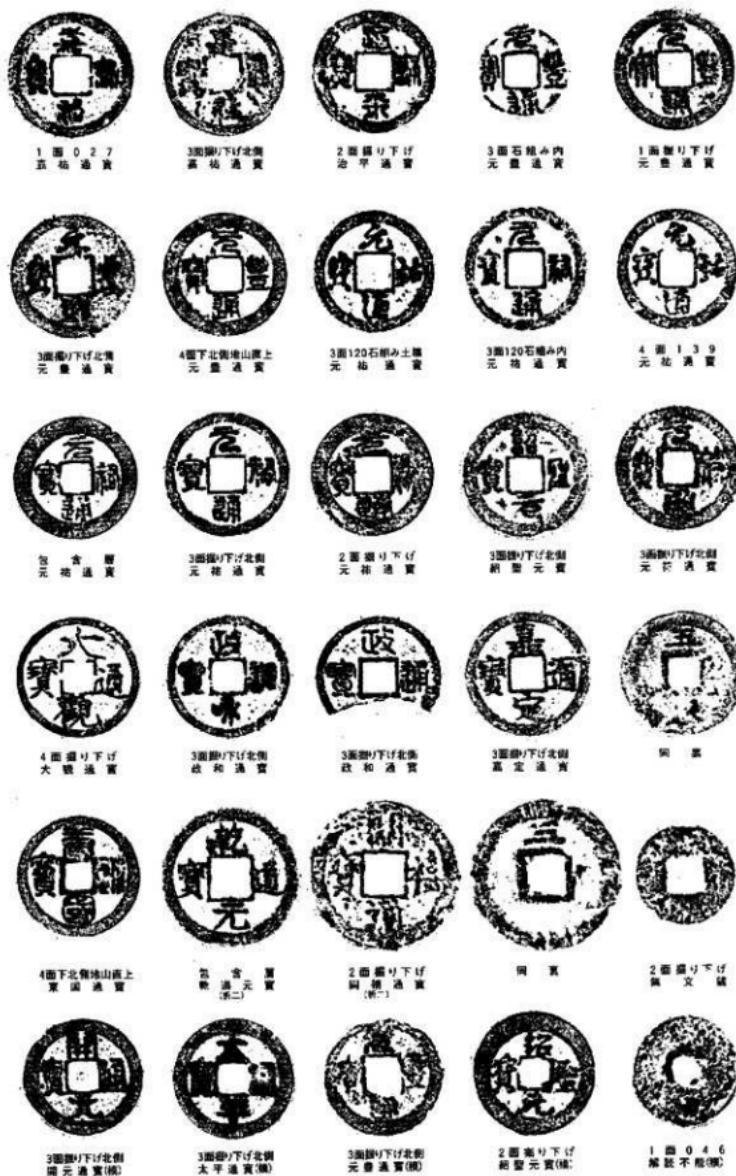
なお、貨泉1枚が出土したが、古代以前に廻るものではなく、中世に将来されたものであろう。



Ph. 85 銅錢（縮尺不同）



Fig. 94 出土銅錢拓本 (S=1/1)



Tab. 1 西暦別出土銅錢一覧表

銭貨名	西暦	王朝名	初鋤年	枚数	銭貨名	西暦	王朝名	初鋤年	枚数	銭貨名	西暦	王朝名	初鋤年	枚数
貢泉	14	新	天鳳元年	1	皇宋通寶	1038	北宋	寛元元年	9	政和通寶	1111	北宋	政和元年	2
開元通寶	621	唐	武德4年	5	嘉祐通寶	1056	北宋	嘉祐元年	2	乾道元寶	1165	南宋	乾道元年	1
乾元重寶	758	唐	乾元元年	1	治平元寶	1064	北宋	治平元年	1	開禧通寶	1205	南宋	開禧元年	1
太平通寶	976	北宋	太平興國元年	1	治平通寶	1064	北宋	治平元年	1	嘉定通寶	1208	南宋	嘉定元年	1
淳化元寶	990	北宋	淳化元年	1	熙寧元寶	1068	北宋	熙寧元年	3	洪武通寶	1368	明	洪武元年	1
至道元寶	995	北宋	至道元年	1	元祐通寶	1078	北宋	元祐元年	11	永樂通寶	1406	明	永樂6年	1
咸平元寶	998	北宋	咸平元年	2	元祐通寶	1086	北宋	元祐元年	9	寛永通寶	1626	日本	寛永3年	2
景德元寶	1004	北宋	景德元年	1	紹聖元宝	1094	北宋	紹聖元年	3	近代錢	—	日本	—	1
祥符通寶	1008	北宋	大中祥符元年	1	東園通寶	1097	高麗	順宗2年	1	無文錢	—	日本	—	1
祥符元寶	1008	北宋	大中祥符元年	2	元符通寶	1098	北宋	元符元年	2	解説不能	—	—	—	50
大中通寶	1017	北宋	大中通寶	3	聖宋元寶	1101	北宋	建中通寶	3	出上総数				130
天聖元寶	1023	北宋	天聖元年	3	大觀通寶	1107	北宋	大觀元年	2					

Tab. 2 遷構別出土銅錢一覧表

面	遷構番号	銭貨名	枚数	備考	面	銭貨名	枚数	備考	面	銭貨名	枚数	備考	
1面	0002	熙寧元寶	1		1面振り下げ	元祐通寶	1		3面振り下げ北側	元祐通寶	2		
	0023	聖宋元寶	1			洪武通寶	1			紹聖元寶	1		
	解説不能	1				寛永通寶	1			元符通寶	1		
	0027	嘉祐通寶	1			近代錢	1	解説不能		大觀通寶	1		
	0029	天聖元寶	1			解説不能	1			政和通寶	2		
3面	0046	解説不能	1	模鋤銘		南元祐通寶	1			嘉定通寶	1	表「五」	
	120-1	聖宋通寶	1			天祐通寶	1			解説不能	24		
	120-2	熙寧元寶	1			天聖元寶	1			元祐通寶	1		
	120-5	元祐通寶	1			治平通寶	1			解説不能	1		
	120-6	治平元寶	1			元豐通寶	2			大觀通寶	1		
4面	0138	元祐通寶	1		2面振り下げ南半分	元祐通寶	1		4面振り下げ北側	元豐通寶	1		
	0139	解説不能	2			天祐通寶	1			解説不能	1		
	0150	解説不能	1			治平通寶	1			大觀通寶	1		
	0150	解説不能	1			元豐通寶	1			解説不能	1		
	0150	解説不能	5			解説不能	1			4面振り下げ南側	淳化元寶	1	
5面	0186	解説不能	1			解説不能	1			永樂通寶	1		
	0187	皇宋通寶	1			解説不能	1			模鋤銘力	3		
	0236	祥符通寶	1	模鋤銘力		解説不能	1			4面振り下げ南側	永樂通寶	1	
	0236	解説不能	1			解説不能	1			解説不能	3		
	0236	解説不能	1			解説不能	1			4面振り下げ北側	乾元重寶	1	
包含層	元祐通寶	1				元祐通寶	4	解説不能	4面振り下げ北側	元祐通寶	2		
	乾道元寶	1				太白通寶	1	模鋤銘		元祐通寶	2		
1面上包含層	皇宋通寶	1				至道元寶	1			元祐通寶	1		
	寛永通寶	1				祥符通寶	2			東園通寶	1		
1面	解説不能	2				聖宋通寶	4			元祐通寶	1		
	解説不能	1				嘉祐通寶	1			解説不能	3		
1面振り下げ	貨	1				熙寧元寶	1	模鋤銘力	5面	咸平元寶	1		
	乘	1				元祐通寶	4	模鋤銘		出上総数	130		

第三章 まとめ

以上、簡単ながら博多遺跡群第104次調査について概要を述べてきた。最後に調査の簡単なまとめと若干の問題点の指摘を試みたい。

本調査地点での遺構の初現は7世紀中頃で、8世紀代には堅穴住居跡が営まれる。調査地点一帯に集落が形成されていたことは、近接する74次・84次調査地点の調査成果からも確認できる。隣接する84次調査地点では9世紀後半から11世紀前半頃の遺構は検出されなかったが、本調査地点では該期の遺構も少数ながら検出されている。13世紀中頃になると白色粘土を用いた整地が行なわれるようになり、13世紀後半から14世紀前半にかけて廊状遺構や蔵の基礎状遺構が構築された。15世紀代になると遺構の数は減少し、その現象は16世紀代まで続く。

以下、このまとめに関連して今後の調査の問題点について検討したい。

(1) 古代の遺構について

本調査地点は、博多遺跡群が立地する砂丘地形、博多浜と息浜に大きく分けられる二つの砂丘の内博多浜の北東端部近くに位置する。周辺の調査成果から、現在の御供所通り付近には8世紀代から集落が営まれていたことが分かっている。その時期には博多浜南部域では東西・南北方向の溝による区画が存在し、何らかの官街の存在が推定されている。本調査地点においても9世紀代に位置付けられる溝遺構(178号遺構)を検出した。本調査地点東側に位置する74次調査地点の第4面検出の382号遺構と同時期の遺構である。382号遺構は調査区内を横切るように検出された溝遺構で、調査区内の北西側で立ち上がり、南西側については調査区外に延びその全長・性格は不明であるが、その北西側延長方向には本調査地点の178号遺構があり、仮に382号遺構と同一の遺構とすれば、博多浜北東部にも溝による区画が存在していたこととなる。382号遺構の北西側の立ち上がりは陸橋部と考えることもできよう。両調査地点間の距離は約23mと離れており、同一の遺構とする確証はないが古代の博多浜北東側の様相把握を行なう上で興味深い資料であり、今後の類例の増加に期待したい。

(2) 中世後半期について

本調査地点付近の中世後半期の様相について検出した遺構から考えたい。

中世後半期の博多遺跡群の景観は、これまでの調査から検出された道路遺構とともに復元がなされている。博多遺跡群内には、13世紀末から14世紀初頭に実施された道路整備によって、縱筋(南東-北西方向)の基幹道路と、それをつなぐ数条の支線道路が作られている。これらの道路は16世紀末の秀吉の太閤町割が実施されるまで存続していたことが、これまでの調査から推測されている。

本調査地点においても、太閤町割以前に行なわれていた区画の方向を示す遺構が検出された。第3面検出の120号遺構、第4面検出の148・150号遺構の主軸方向がそれである。これらの遺構は13世紀後半から14世紀前半に構築された蔵の基礎状遺構・廊状遺構であるが、47~48°程東偏またはそれに直交する主軸線をもつ。同時代と考えられる148・150号遺構は回廊遺構とそれに直交する蔵の基礎状遺構であり、その方向的規制を受けて120号遺構が構築されたものと考えられる。近接する74・84次調査の成果からは、13世紀後半から15世紀頃にかけて付近一帯が、聖福寺境内域に含まれていたことが判明しており、その時期に含まれる120、148、150号遺構は規模・構造・出土遺物から聖福寺関連の遺構として間違いない、中世期の聖福寺内の区画の一端がこれらより復元できよう。現存する聖福寺の伽

藍配置の主軸線は42° 程東へ偏っている。聖福寺自体は16世紀末の天正2年に焼失し、天正17年に伴持玄熊よつて再興される。焼失以前の姿をよく留め、伽藍の主軸は焼失以前のものを踏襲しているとされる。今回検出した遺構の主軸方向と現在の聖福寺伽藍の主軸はほぼ直交、また平行しており、創建された当時からほぼ主軸線を変える事無く聖福寺が存続していたことが窺えよう。太閤町割によって周辺の町並が整然と整備され現在まで継承する現在の「博多」において、聖福寺は中世以来の様相を留めているのである。

76次調査地点において検出された築地塀の基礎遺構とされるSG354と本調査検出の148号遺構は類似する構造を持つ。幅はSG354が2.7~2.8m、付随する溝・横列などを含めると5~6mを測り、148号遺構の約5mと同規模の平面形をなし、遺構の主軸線はSG354が磁北から45° 東へ、148号遺構は西に48° 傾っており、両遺構はほぼ直交する主軸線をもつ。またどちらの遺構も両脇に溝状遺構・横列・柱穴列をそなえることから、148号遺構はSG354と同様に築地塀の基礎遺構かとも考えられた。しかし、両遺構が交わる推定地点は復元された幹線道路側ではなく、現在の御供所通り沿いの地点となり寺域を画するための築地塀の役割を果していたとは考えられられない。また、148号遺構が13世紀後半の年代を示すのに対し、SG354は14世紀前半から15世紀後半までの幅の広い年代観を示しており、築地塀としてこの期間中機能していたと考えられる。これらから148号遺構は築地塀とは考えられず、回廊の一部であると解釈した。76次調査で検出された築地塀は推定された幹線道路直前で曲がり道路に沿うように存在した溝沿いに構築されたと推定される。周辺で検出される道路遺構や築地塀などが中世を通じて継続的に利用され続けるのにたいして、本調査区の遺構は比較的短期間のみの利用の後、すぐに廃棄され整地を繰り返し、屋敷地等に転用されていると考えられる。

聖福寺には盛時においては38の子院があったと伝えられている。これらの子院はほとんど現存しておらず、その位置の推定も行なわれていない。本調査地点では13世紀後半とした第4面以後、度重ねて粘土を貼った丁寧な整地を行なっており、一般居住地として利用されたとは考えられず、同じく御供所通りに面する74・84次調査地

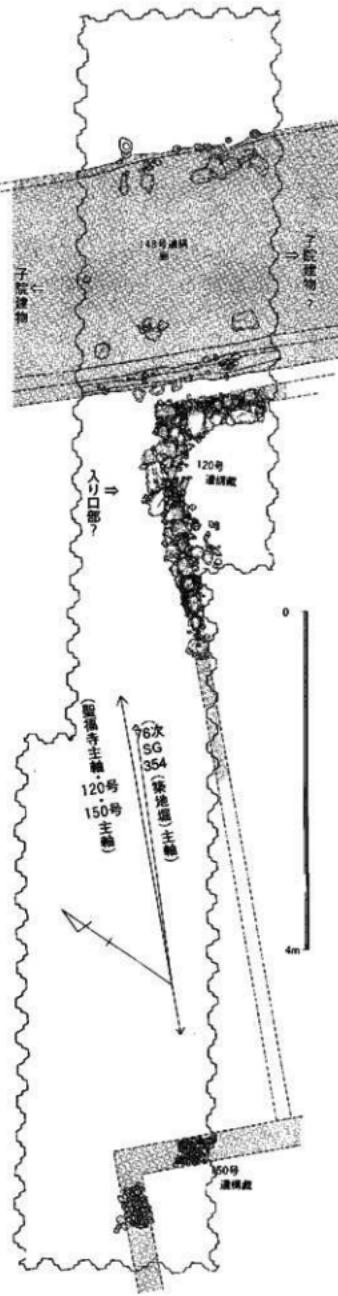


Fig. 96 推定復元図 (S=1/120)

点で確認された状況と同じく特殊な建物空間であったと言えよう。聖福寺の北東部はかつて蓮池と呼ばれた低湿地であったと推測される。また南東側は隣接して承天寺の寺域となり、南西側には前面に幹線道路が通され、子院を建てるほど空間は北西側に限定される。本調査で検出された148号遺構は、その構造から築地附とは考えにくく、子院内の建物を結ぶ回廊として考えるのが妥当であろう。120・150号遺構はそれに付随する蔵と考えることができる。これらの遺構の検出は74次・84次調査地点と本調査地点を含めた御供所通り沿いに子院が展開していたことを示す資料として捉えることができよう。同様の性格・構造をもつと考えられる120号遺構・150号遺構の時期差は13世紀末から14世紀初頭にかけての道路整備にともなう、寺域拡大による建て替えの結果として理解することができる。

本調査では中世後半期における聖福寺の姿の一端を明らかにすることができたが、現時点では断片的な資料であり、子院の位置・寺中町区画等は確認されなかった。今後の調査においてこれらのことが解明されることに期待したい。

参考文献

- 大庭義時 1998 「中世都市博多の成立－博多遺跡群の発掘調査から－」小林茂・磯賀・佐伯弘次・高倉洋彰編『福岡平野の古墳場と遺跡立地』九州大学出版会
- 宮本雅明 1998 「中世後期博多聖福寺境内の都心空間構成」小林茂・磯賀・佐伯弘次・高倉洋彰編『福岡平野の古墳場と遺跡立地』九州大学出版会
- 福岡市教育委員会 1993 『博多40』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第332集
- 1995 『博多45』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第395集
- 1997 『博多56』福岡古埋蔵文化財調査報告書 第521集

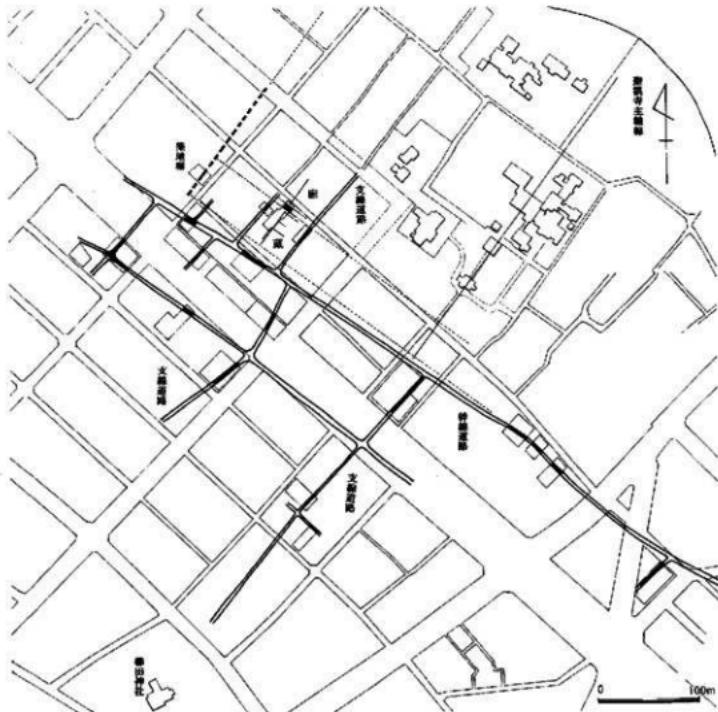


Fig. 97 聖福寺寺中町周辺道路遺構(S=1/5000)

博 多 67

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第594集

1999年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

印刷 ㈱九州カスタム印刷

